

---

# DESTROY

氷室

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

DESTROY

### 【Nコード】

N9853D

### 【作者名】

氷室

### 【あらすじ】

高梨洋介は幼馴染の河野瞳のことが好きだった。しかしその想いは瞳には届かない。そんな時、洋介のクラスメイトである小山田菜々美が洋介にアタックし始めることで関係が変わり始める。

## 第一章

「ちょっと待って瞳。その、もしよかったら俺と一緒に帰らないか？」

夕暮れの校門前、高梨洋介は幼馴染の河野瞳に声をかけた。その声に反応し、振り返った瞳は後ろで縛ったポニーテールを美しく翻した。その動きを追うように洋介の顔も思わず動いてしまう。だがそんな行動も一瞬の内に固まってしまった。体を完全に洋介に正対させた瞳は美しく、夕暮れの太陽を背にして神々しいまでの雰囲気纏っていた。

そんな威容に飲まれ、洋介は瞳の返事を固まっただま待つことしか出来ない。本当であればもっと近寄り、もっと気さくに誘いたかったがとても無理のようだ。

「ごめんなさい。今付き合ってる彼氏に悪いから無理なの」

「あつ……。そうなんだ、それじゃあ無理だよな……」

「ええ、本当にごめんなさい。それじゃ私もう行くね」

そういい残すと瞳は洋介に背を向け、歩き始めた。振り絞った勇気が弾け飛んだ洋介はがつくりとうな垂れ、立ち尽くすことしか出来なかった。夕暮れの風景も相まって哀愁を一段と漂わす洋介の姿は余りにも惨めであった。

「見事にまた断られたね。いい加減諦めたら？」

立ち尽くす洋介に後ろから一人の女子生徒が声をかける。どうやら一部始終を見ていたらしくにやにやと笑いながら洋介の肩に手をかける。洋介が振り返るとそこにはクラスメイトの女子、小山田菜々美の姿があった。

「相手は校内一の美少女、河野瞳だよ。最初っから無理に決まってるじゃない」

洋介は肩にかけられた手を掴み、反論を始める。

「そんなことはない。俺は昔から瞳を知ってるんだ。あいつの好き

な物だつて……」

「幼馴染だからってアドバンテージになるとは限らないんだよ？  
嫌な所だつて知られてるわけだし」

「くっ……」

「高望みはやめて私と付き合えばいいじゃない。私だつてそれなりに自信あるんだよ？」

そう言うとき菜々美は身体をくねらせ、ポーズを決めてみせる。金色のロングヘアはさらさらで美しく、ややツリ目気味の魅惑的な瞳、大人びた顔つきも相まって高校生離れした印象を与える。スタイルも抜群の菜々美は本人が自負するだけあつて魅力的であつた。  
「何度そんなこと言われても俺は瞳のことしか考えられない」

「でも河野さんって今まで何人も彼氏がいたんだよね。見た目は清楚で真面目そうなのに意外だよな」

「そんなことは関係ない」

「文武両道、容姿端麗。他にも色々称える言葉が並びそうな人と付き合うのって大変そう。そう思わない？」

「だからそんなの……」

「仮に付き合えたとしてもいつ振られるかと心配しなきゃいけないんだよ？」

「……」

「私ならそんな心配はいらないよ。それにスタイルなら河野さんより上だし」

「うるさい」

「だから私にしときなつて。損はさせないよ？」

「うるさいっ！ もうほつといってくれっ！」

「あっ」

次々と捲くし立てる菜々美にとうとう堪らなくなつた洋介は怒鳴り散らして駆け出した。一気に離れていった洋介を見て菜々美はやりすぎたかやや後悔した表情を浮かべている。

「逃げられちゃった。でも動揺してきてる。あと少しね」

そう言うとき菜々美は洋介の走っていった方角を見つめ、にやりと微笑むのだった。

「くそっ！ 小山田のやつ、言いたい放題いいやがって」

菜々美から逃げ出した洋介は家へと駆け込むなりそう愚痴った。想いを寄せる瞳への悪口、そして自分の想いが実らないことを散々言われたことによつて洋介の頭は沸騰寸前であつた。あそこで駆け出さなければ菜々美を罵倒し、手が出てしまったかもしれない。

そう考えると洋介は自分の判断は間違つていなかったと未だ冷静になりきれない頭ながら実感した。

「ふうっ。いつまでもこうしても仕方がない。着替えるか」

洋介は靴を脱ぎ、部屋へと向かう。いつもどおりの作業を行うことでペースを取り戻そうという狙いである。階段を上がり、自分の部屋の扉を開けて中に入る。極平凡な一高校生らしい部屋の中は普段の生活観を保っている。苛立った頭の洋介にとつてリラックスできるまさに打ってつけの空間である。

洋介は学生服を脱ぎ、私服に着替えるとベッドに倒れこむ。このように何も考えず寝転がっているだけで洋介はささくれ立った感情が幾分和らいでいくように感じた。

「ああ、今日はいつもより余分に疲れた……。一眠りしたいぐらいだな」

洋介はそう呟くと目を徐々に閉じていく。全力で駆けて家まで帰ってきたことによる疲労感が程よい眠気を誘っていた。

その誘いに身体を任せて眠りにつこうとするその瞬間、かすかに人の話し声が聞こえてきた。

「はっ、瞳か！？」

洋介は聞こえてきた声に敏感に反応し、飛び起きる。そして視線を窓の向こう側、隣家の方へと向ける。洋介の視界に飛び込んだきたのは想いを寄せる幼馴染、瞳と洋介の知らない男子生徒の姿だった。互いに窓を閉じているため声はほとんど聞こえてこないが、時

折はしゃいだ声などが聞こえてくる。

洋介は再び胸中にふつつつと怒りの情が湧き上がるのを感じていた。そして堪えきれなくなったのか窓に近寄り、カーテンを閉めてしまう。ちようどもう夕暮れ時である何も不審なことはない。残る冷静な思考でそう言い訳をしながら洋介は今度こそ深い眠りの中へと落ちていくと決め、ベッドへ横になった。

## 第二章

翌朝、学校へ行くのに気が進まない洋介だったが、休むわけにもいかず重いため息をつきながら登校をしていた。気が乗らない理由は菜々美と瞳に会いたくないということであつた。

とりあえず隣の家の瞳といきなり遭遇という最悪なケースは避けることが出来た。だが学校が近付くにつれ遭遇の確率は増していく。それを思うと洋介の足取りは徐々に重くなつていった。

「行きたくねえな。今日が休みだつたらよかったのに」

誰にも聞こえない程度に小さく呟く洋介。しかし現状学校があるということが覆る連絡はない。伝染病も台風も地震も何もない普通に学校がある日である。自主休校という手段は母親が自宅に専業主婦としている以上使えない。

「保健室に籠つてもなあ。一日中いるわけにもいかないし」

八方塞の洋介はますます気が滅入っていくが、もう校門は目の前である。覚悟を決めるしかなかった。

「瞳はともかく小山田は同じクラスっていうのが最悪だよなあ」

覚悟が決まりはしたものの突き進むとなると同じクラスの菜々美とは必ず顔を合わせることになる。それを思うと決めた覚悟が途端に揺らぎそうになる。

「なんか頻繁にアタックしてくるんだよなあ。もしかしたらあいつのせいで瞳が俺を避けてるんじゃないのか？」

そんな風に今までの失敗を責任転嫁しているともう昇降口である。とりあえず下駄箱付近には菜々美の姿はない。

「このままあいつが休みだと嬉しいんだけどなあ」

そう洋介が呟いた時、洋介の肩に誰かの手がかかった。

「誰が休みだと嬉しいの？」

「うわっ!？」

突然の接触と声に思わずオーバリアクション気味に振り返った

洋介の目の前には菜々美の姿があった。今ちょうどその当人のことを呟いただけに驚きは大きかった。

「そんなに驚かなくてもいいじゃない。とりあえずおはよう」

「あ、ああ。お、おはよう」

「それで誰が休みだと嬉しいの？」

「い、いや。それは……」

困り果てる洋介の様子を見て菜々美は面白そうに微笑み始める。

その表情は楽しいという以外に幸せという感情をも感じさせた。

「あはははっ。まあこのぐらいで勘弁してあげる。さっ、早く教室行こうよ」

「そうだな。行くか」

早くこの話題を打ち切りたかった洋介は助かったとばかりに菜々美の言葉に頷く。そして二人は並んで廊下を歩いていく。

「今日数学があるんだよね。かつたるいなあ、サボっちゃおうかなあ」

「サボるのか？」

廊下を歩きながらいかにも面倒くさそうにサボりを仄めかす菜々美に洋介は素早く食いついた。そんな洋介の態度に不満を感じた菜々美はイジワルそうな表情を作りながら洋介の期待を砕きにかかる。「それでも洋介も同じ教室にいるんだから受けないとね。残念でした」

「べ、別に俺は残念がつてなんて」

「ホント？ 嬉しい！」

そう言って菜々美は洋介の腕に抱きつく。柔らかな感触を突如腕に感じた洋介は顔を真っ赤にして焦る。

「や、やめろって！ お前、こらっ」

「やめな〜い。このまま教室まで行こう」

「皆見てるだろうが。離せって」

「私にとっては願ったり叶ったりだし」

「ぐっ……。もう好きにしろっ！」



すっかり菜々美のペースに巻き込まれている洋介は諦めて菜々美のなすがままになった。こうして二人は好奇の目で見られながら廊下を練り歩き教室まで向かうのだった。

昼休み、菜々美は洋介に近付かずに屋上で一人で昼ご飯を食べていた。あまり近付きすぎるとかえって洋介の不興を買うことは菜々美にも分かっていたし、今後の作戦を考えることもあつての行動であつた。

「これからどうしていいのかなあ」

誰に話すともなく菜々美はそう呟く。実際に声に出した方が考えがまとまるのだろうか。屋上に一人しかいないこともあつて菜々美も特に周りを気にする様子はない。

「とりあえず今まで接触し続けて印象付けはもう大丈夫のはず。次は……」

そう言うつと菜々美は目を閉じ、考えを頭の中で巡らす。

普段は明るく振舞っている彼女だが、こうして静かに穏やかにしているともた違った魅力を生み出す。

そして考えがまとまったのかゆつくりと目を開け、決意に満ちた表情を見せる。

「寂しいけど接触をしばらく避けて私の存在を思い知らしめる。これでいい」

菜々美の考えは今までの接触で印象付けた自分の存在を、今度は急に近くに寄らなくなることにより際立たせようというものだった。何事も押す一辺倒では上手くいかない。タイミングを見計らい引いてやることで上手くいけばそのまま自分の方へ転がりこむことさえある。

そういうわけで菜々美は長い目で見てより関係を前進させるため、また上手くいけば一気に願いを成就させるためにあえて寂しくなる方向をとつたのである。

「はあ、もし彼氏にすることが出来たら何をしようかなあ」

もう既に作戦が上手くいくことを信じきっている菜々美は顔をだらしなく緩ませ、将来のことを考えてしまっている。

「初デートはどこにしよう。記念だから一緒に考えたいなあ」

「学校内でも一緒にご飯を食べたりしたいよねえ」

「学園祭も体育祭も一緒に過ごしたいし」

「夏休みやクリスマス、バレンタインデーも特別にしたいな」

菜々美の脳裏に浮かぶ幸せな未来図は尽きることなく次々と浮かんでいく。まだ高校二年の春、これから楽しいイベントや時間はまだまだたくさんある。それを考えると菜々美はとろけてしまいそうな程幸せに浸ることが出来る。

そしてそれと同時にそんな未来を実現可能なものにするために菜々美は作戦を確実に実行するよう決意もしている。こういった幸せな妄想はその作戦期間の寂しさを紛らわすためのものだったのかもしれない。

### 第三章

洋介はここ二週間何か物足りない感覚に捉われていた。それまでに比べると穏やかで静かで結構な話なのだが、あまりに静かすぎたのである。それまでの日常にはあつてここ二週間に欠けていたもの、それは菜々美の存在だった。

最初の内は洋介もやっとうるさいのがなくなったとむしろ気が楽になった気がしていた。なにしろ彼には瞳という心に決めている女の子がいるのである。それを考えると菜々美の存在はマイナス要因でしかなかったのだから。

だが、今までであったものが急になくなるというのは徐々に洋介の心に寂寥感を生み出しつつあった。

「くそつ。小山田のことなんか邪魔だと思ってたぐらいなのに……」

そう呟きながら洋介は自分の席から菜々美のいる方を見遣る。そこには女子数人に囲まれて楽しそうにお喋りをしている姿があった。元々明るく社交的な菜々美は男女問わず友達が多い。学内一かと思える程のスタイルのよさと整った顔立ちで友達としてではなく一人の女性としての人気も絶大であろうに何故菜々美が自分に執心するのか洋介には理解できなかった。

そういう理解できない事情もあつて洋介は素直に菜々美の好意を受け入れようという気にはならなかった。なんだかからかわれているような感じがしたのである。

「いい加減愛想を尽かされたかな」

受け入れるつもりもなかった好意だが、いざそれがなくなってしまうと現金なことに惜しくなってしまう。洋介はそんな自己の感情に嫌気が差した。

「俺は瞳一筋の筈だったのにな……」

ほとんど深い闇に飲み込まれていく洋介は気分転換をしようと席を立ち、教室から出る。

今はまだ昼休み中盤、まだ時間はけっこう残っている。洋介は階段を上がり、屋上へと向かう。普段人の出入りが少ない屋上は気分転換に打ってつけの場所である。

洋介が屋上の扉を開けると目の前にまたもや洋介の気分を悪化させる光景が飛び込んできた。屋上に佇む男子と女子。男子の方は洋介が知らない人物だったが女子の方はよく見知った人物だった。

「瞳……」

洋介が小さく呟きながら見つめた先には瞳がいた。男子の方は頭を下げながら瞳に手を差し伸べている。瞳に告白をしたのであろうと洋介には理解できた。これだけでも洋介の気持ちを不快にさせるものだったが、その後の瞳の行動は洋介の気持ちを叩き壊すものであった。

男子が差し伸べた手を握り、微笑む。お受けしますという意味の芝居がかった行動だった。その瞬間それまで聞こえてこなかった音声我突然洋介の耳に飛び込んできた。

「よっしゃああああああああっ！」

喜悦満面に飛び上がる男子生徒が上げた喜びの雄たけびだった。それがとどめとなった洋介は苦渋の表情をしながらその場を全速力で離れた。階段を駆け下り、廊下を走り、昇降口を駆け抜ける。そしてたどり着いた先は体育館裏だった。

体育館に遮られ、陽が届かず日中だというのに薄暗いその場所は今の洋介にはぴったりの場所だった。様々な感情がない交ぜになった洋介は心の収集がつかず苦しんでいた。

「瞳は俺とは一緒に帰ってもくれないのに……。また今度は違う男と……」

激しく渦巻く感情の奔流に晒された洋介の頭の中はパニック状態になっていた。洋介はしゃがみ込み、頭を抱えながら泣き声の混じった咆哮を上げた。

人気のなくなった教室に洋介は帰ってきた。結局昼からの授業は

全部サボり、ずっと体育館裏でしゃがみ込んでいた洋介は誰が見ても弱りきった状態になっていた。瞳からは生気が弱弱しくしか感じられず、行動も普段の彼に比べればずっと遅い。

やっとのことで自分の席にたどり着くと椅子に深く座り込む。頭の中では帰らなくちゃと思っているのだが身体が動かない。

「……もう自分の気持ちすらわからなくなってきたな」

弱弱しく洋介は呟く。小さい頃から秘めてきた想い。そして近頃では如実に行動に表した想い。しかしそれが昼休みの光景で明らかに弱まってしまっていた。一向に成就する気配すら見せない現実に打ちのめされ、逆に他の男は成就し喜悦の表情、行動を見せる。

「ああ、死にてえ……」

洋介は机に突っ伏し、物騒な言葉を呟く。彼としてはただの独り言だったが、それに応対をする者がいた。

「死ぬぐらいだったら私と付き合わない？」

「えっ？」

想定していなかった事態に洋介は顔を勢いよく上げる。彼の目の前にはここ二週間の間、全く接触をしてこなかった菜々美の姿があった。菜々美はいつもと変わらぬ明るい笑顔で洋介を見つめている。

「小山田……」

「どうしちゃったの？ 午後の授業には顔出さないし、今は死にたいとか言ってるし」

「別に……」

「心配してる人にそんな態度をとっていいのかな？」

「……」

黙りこんでしまう洋介を見て菜々美は苦笑する。やれやれとばかりに菜々美は洋介の前の席に移動すると椅子を引き、そこに座る。

「ほら、私が聞いてあげるから。溜め込んでてもいいことないよ」

「でも……」

「でもとかはいいの。早く喋りなさい」

「……」

「早くしないと無理にでも喋らせるよ？」

「……聞いてくれるか？」

ようやく心を開き始めた洋介に満足したのか菜々美は笑顔で頷く。  
「そう言ってるでしょ。さあ、どんと来なさい」

そう言って胸を叩く菜々美の姿に洋介は少し笑みを零しながらぼつぼつと話し始めた。

精神的に弱っていたためかここ二週間、菜々美の接触がなかったことや昼に屋上で見た光景、その後の葛藤など隠すことなく洋介は菜々美に話した。

菜々美はそれを適度に相槌を打ちながら聞き手に徹する。普段賑やかな彼女と違い、実に物静かにしていた。

「そう、そんなことがあったんだ」

全てを聞き終わった菜々美は表面上は難しい顔をしていたが、内心では会心の笑みを浮かべていた。自分の目論見どおりしばらく距離を置いたことで印象を強めるということに成功しただけでなく、洋介の瞳への感情が微妙に変化したことに喜ばずにはいらなかった。

しかし菜々美はそんなことは全く感じさせず、洋介に優しい言葉をかけていく。

「辛かったよね。好きな人が他の人の告白を受け入れているのを見るなんて」

「俺……。もう色んなことがわかんなくなってる」

「大丈夫。ゆっくり整理していけばいいんだよ」

「……。そうだな」

菜々美は洋介が弱っている間に無理に自分の方へ気持ち向けようとはせず、真摯に洋介を励ましていた。菜々美としてはここで洋介の悩み事を聞き出せた時点で大収穫である。

だが、それでも菜々美はもう近いうちに洋介が自分の方へなびくと確信していた。

「ありがとう小山田。なんか話ただけでもだいぶ楽になったよ」

「なんのなんの。このぐらいお安い御用だよ」

「それじゃだいぶ遅くなっちゃったし帰るか」

「そうだね。校門まで一緒に行こうよ」

「ああ、行こうか」

菜々美はこの返事を聞いて涙が出そうなほどの喜びを感じた。今まで校門まで一緒に行こうと誘っても断られ、仮に一緒に行つたとしてもそれは強引に菜々美が付きまとうという形だった。それが今、始めて洋介が承諾して一緒に帰ることが出来たのである。

これまでは洋介にとって瞳を誘うのに邪魔な障害という扱いだったのが、もう一変していた。菜々美は改めてこれからは全力で洋介を手に入れる期間であると明日以降へ向け、闘志を燃やすのだった。

## 第四章

翌日、洋介はまだ少し元気がないものの一時の落ち込みようから考えると随分元気になっていた。やはり昨日の授業後、菜々美に悲しみや悔しさ、惑いといった様々な感情を吐き出したことですっきりしたのであろう。

普段どおりの歩みで校門を抜け、昇降口に入ったところで洋介は後ろから誰かが走ってくる音を聞いた。

「おはようっ！ 洋介。もう元気になった？」

足音の主は菜々美だった。洋介の前に回りこむと洋介の顔を眺める。

洋介はもう平気だということをアピールするように笑顔を見せる。

「ああ、おはよう。もう大丈夫だ。昨日は本当にありがとな」

「いいっていいって。好きな人の力になれたんだから私も嬉しいよ」  
菜々美のストレートな感情表現に洋介は顔を赤らめる。これも菜々美にとっては大きな前進だった。

これまでは身体を密着させることでは洋介を意識させることは出来たが、口で好意をアピールしても拒まれるか本気に取りられないかのどちらかだった。それが言葉で表す好意だけで意識してくれるようになったことはこれまでの努力が実ってきたことの表れだった。

その嬉しさに思わず頬が緩む菜々美を見て洋介はますます顔が赤くなる。

「は、早く教室に行こう。いつまでもこうしてても仕方がないしな」  
照れ隠しをするように洋介は急いで靴を履き替え、歩き始める。

そんな様子を微笑ましそうに菜々美は見つめながら自身も靴を履き替え、洋介を追う。

「待ってよ。一緒に行こう」

洋介の隣に並んで歩き始める菜々美は二週間ちよつとぶりに洋介の腕にしがみつく。今度は洋介は少し困った顔をするだけで強く拒



まなかった。二人が歩くその光景はお似合いのカップルそのものに見えていた。

昼休み、菜々美は洋介を連れ出して屋上まで引つ張ってきた。今が好機と見たのであるう、勝負に出る決心を秘めた菜々美はいつになく真剣な表情である。それを悟った洋介は軽口を叩かず、神妙に菜々美の行動に従っていた。

昼休み直後も直後といったこともあつてか、都合よく人は誰もまだいなかった。菜々美は時間がないということで自分を奮い立たせたのか悩んだり迷う素振りも見せずに一気に告白を始めた。

「洋介。私、前からストレートに気持ちを伝えてたと思うけど改めて言うね。私は高梨洋介君のことが大好きです。どうか私と付き合ってください！」

洋介は前々から菜々美の好意は知っているだけに驚くことはなく冷静に菜々美の言葉を聞いていた。以前の彼であればすぐさま拒絶するか冗談だろうと判断していたところだが、ここ最近の出来事で彼の心は大きく揺れていた。

彼の意中の人である瞳は全く好意を見せようとせず、逆に菜々美は好意を洋介に積極的に伝えてくる。それに最近は悩みを聞いてもらったりと何かと接近することになった。

だが瞳に対する気持ちも未だ消えたわけではない洋介は悩みながらも菜々美に言葉を返す。

「小山田……。お前の気持ちは嬉しいけど、俺ははつきり言ってお前に対して恋愛感情は芽生えてない。だから……」

「別に恋愛ってお互い両想いから始まらなきゃいけないわけじゃないよ？」

最後まで言葉を紡ごうとする洋介を見て形成不利を悟ったのか菜々美は思わず途中で言葉を挟み、洋介の言葉を遮ろうとする。そしてその策は成功し、洋介の言葉を遮った。洋介は突然言葉を割り込ませた菜々美を見つめ、黙り込んでしまう。

その隙を逃さないと言わんばかりに菜々美は持論を展開し始める。  
「恋愛なんてむしろ相思相愛から始まる方が少ないと思うよ。身近な例で言えば洋介の幼馴染の河野さんなんか次から次へと彼氏が変わってるでしょ？ そんなに相思相愛が続くと思う？」

「……思わない」

「でしょ？ だからよっぽど嫌いじゃなければ付き合ってみるものありだと思っよ。付き合ってみなければわからないことだっていっぱいあるんだから」

「そうかなあ……」

考え込み始める洋介を見て菜々美は八割方勝利を確信した。一直線な洋介は一度傾かせればこちらへと転がり込んでくる。そして一度こちらへと入り込んできた洋介は一途なだけにふらく心配が薄いというおまけつきだ。もはや幸せな未来は成就したも同然と菜々美は余裕の表情である。

一方の洋介は菜々美の言葉を聞いて明らかに動揺していた。今までの彼の恋愛観は相思相愛が大前提というものだった。だからこそ瞳を振り向かせようと努力をしてきたのだし、他の子にも目移りすることはなかった。

しかしそこに菜々美が現れ、そして今彼の恋愛観を覆す意見をぶつけてきたのだ。そしてそれは確かに道理の通った納得のいくものであるだけに衝撃は強かった。更に瞳が洋介など眼中にないといった様子で次々に新しい彼氏を作る様子を見て、苦渋の思いを味わわされていたことも作用しているのだろう。

「付き合ってみないとわからない……。うーん」

「そう。付き合ってみないとわからない。男友達だってそうでしょ？ 気が合うかどうかなんて最初はわからないんだから」

菜々美は崩壊を始める洋介の牙城を一気に攻め落とさんと果敢に仕掛けていく。瞳に執着するあまり鉄壁の城塞と化していた洋介の心を今までの接触で外堀を埋め立て、三の丸、二の丸と崩していき、とうとう今本丸を落とす時が来たのである。

これまでの反応で言葉による理攻めだけでは力不足と感じた菜々美は覚悟を決めて本丸へと飛び込む。

「洋介……。好き」

「うむっ!？」

突如好きと言いながら洋介の懷に飛び込んだ菜々美は勢いで洋介の唇を奪う。あまりの出来事に目を白黒させる洋介はもう正常な思考を失っていた。菜々美になされるがままで突っ立っていることしか出来ない。

抱きつきながら唇を密着させていた菜々美は洋介が動揺の極みにいることを悟ると顔を離して、甘い言葉を囁く。

「こんなことが出来るのも洋介のことを愛しているからだよ。お願い、私と付き合って」

「えっ、あの、その……」

蕩けかけている頭を必死に理性でもって持ち堪えようと努める洋介だが、既に陥落寸前といった具合であった。理で説き、情で説き、そして止めに色でもって洋介の本能を直接説いた菜々美の策は恐ろしいほどの破壊力である。いかに瞳への一途な想いで鉄壁の守勢を誇ってきた洋介といえどもその想いが届かず裏切られている内に、綻び始めていた所をあの手この手で粘り強く攻められると気丈でいられなくなっていた。

更に洋介を惑わせているのは瞳を追いかけてきたばかりに、これまで他の女子との接触がほばないという点であった。それまでは特に菜々美を意識することはなかったので、如何に付きまとわれようと気にすることはなかったが、一度菜々美の存在が強く視界に入り込んでしまうと免疫のなさから動揺もしやすくなってしまっていた。この点においても瞳が洋介のことを全然構ってあげないことが強く作用していた。

「私には洋介しかないの……。ねっ?」

洋介に抱きつきながら潤んだ瞳で洋介を見つめる菜々美。もう限界だった。洋介は甘い言葉と潤んだ瞳について陥落してしまった。

「お、俺なんかでいいのか……？」

ついに待ち望んだ展開になったのだが、菜々美は喜ぶどころか呆然としてしまう。それまでの勢いが突如なくなつた菜々美に洋介は不審そうに菜々美の目を見つめる。

「あ、あの……。小山田？」

菜々美の顔の前で手の平を左右に振りながら意識を確認する洋介。それでも菜々美は反応を示さない。何か不味いことを言つてしまつただろうかと不安になり始める洋介だったがその瞬間、菜々美に反応が表れた。

「うつ、うつうつうつ……」

大きく開いた瞳から涙をポロポロと零し始める菜々美を見て洋介の狼狽は増していく。突然先ほどまで活発に動いていた人間が泣き始めたら誰でも心配になつてしまふであろう。洋介はうるたえながらもまだ自分に抱きついていている菜々美の背中を擦つて落ち着かせようと試みる。

「お、おい。大丈夫か、小山田？ 一体どうしたんだよ？」

「だ、だつて……。嬉しくて……。嬉しくて……。私……」

途切れ途切れの言葉で喜びを語る菜々美。そんな姿を見てしまふと洋介としても愛おしさが込み上げてしまふ。抱きつかれている所を今度はしっかりと洋介の方から抱きしめ始める。

「あつ、洋介……」

「あんだけ瞳、瞳つて言つてて信じられないかもしれないけど俺、なんか小山田のこと好きになつちまつたみたいだ」

照れくさそうにそう言う洋介を見て菜々美は涙を拭い、笑顔を作ろうとする。まだ涙が流れ続け、上手く作れない不完全な笑顔のまま菜々美はもう一度告白の言葉を紡ぐ。

「私と……。私と付き合つてもらえますか？」

「ああ、俺なんかでよければ……」

「そうじゃないよ。洋介じゃなきゃ駄目なんだよ」

「そ、そうだな。悪い。あゝ、何ていえばいいのかな？」

「本当にこういうの慣れてないんだね。付き合おうでいいよ」

「そうか。それじゃ付き合おうか」

「うん。これで私達彼氏彼女の関係だね」

嬉しそうに笑う菜々美の目にはもう涙はなかった。積極的に接触を続け、それを何度払われてもめげなかった苦労が報われたのだから喜びも数倍であろう。さらに相手の意中には別の人がいたというのはそれを下したのだからまさに快挙であった。

一方の洋介の胸中には不思議な気持ちで一杯だった。まさか菜々美と付き合うことになるとは夢にも思わなかったこと。そしてあれだけ想っていた瞳ではなく菜々美を選んだことが我ながら不思議でなかった。

「俺の気持ちってなんだったんだろうなあ。瞳のことが好きだったはずなのに……」

「それだけ私の気持ちが強かったってことだよ」

「本当に俺でよかったのか？ どうも俺は不実みたいだからな」

「あのねえ……。本当に不実な人だったらとつくの昔に私になびいてるよ」

今更何を言うかと菜々美はため息をつく。どれだけ自分が難攻不落だったかと一から教えてやりたかった。

まだ納得いかなそうな洋介だったが、これ以上言っても怪しい空気になるそうなのでと判断し、その話を打ち切る。

「それにしても彼氏彼女って言っても何だかしっくりこないな。どうするもんなんだろうな？」

「河野さんと付き合えたらこういうことしたいとか考えなかったの？」

「なかったな。とりあえず振り向かせることで頭が一杯だったから」

「……」

「そっか。それじゃ、これから二人で考えていこうよ」

「……。そうだな」

気持ちのいい風が吹く屋上で二人はお互い、考えや想像を巡らせ

ながら仲良く寝転ぶのだった。

## 第五章

放課後、洋介と菜々美は一緒に下校することにした。もはや正式に付き合いを始めた二人のため菜々美は何も遠慮することなく洋介の腕にしがみつく。それを洋介は辺りをきよるきよる窺い、恥ずかしそうな顔をしながらも受け入れる。その事実には菜々美は大袈裟ではあるが、感動を隠し切れない。

「まさかこんな日が本当に来るなんて思わなかったよ。やっぱり諦めないって大事だよな」

「それはいいけどすげえ恥ずかしいんだが……」

「恥ずかしくなんかないよ。むしろ見せ付けちゃおう。えいえいっ！」

そう言つて菜々美はより一層洋介に密着する。腕に抱きつくというよりもぶら下がるぐらいにしな垂れかかってくる菜々美に対して洋介は振り払うわけにもいかず、ただただ顔を赤くするだけである。

「あははははっ！ 洋介顔真っ赤。初心だなあ」

「仕方ないだろ。こんなの初めてなんだから」

「私も付き合つた洋介が初めてだよ」

「その割りに堂々としてるな。恥ずかしくないのか？」

「こういう恥ずかしいのも今までは幻想でしかなかったから、今は嬉しさのが上回ってるかな」

菜々美は満面の笑みで嬉しいと語る。それに対してまた洋介は顔が赤くなる。あまりにも可愛いことを言ってくれる菜々美を真っすぐ見ることが出来ない。洋介は周囲の目と菜々美という二つの要素に恥ずかしさを感じていた。

そんな洋介を見て勘弁してやるかと菜々美は縋り付いていた腕を離し、手を繋ぐに止めた。

「いつまでも顔真っ赤にしてないでそろそろ帰ろ？」

菜々美の声で我に返った洋介は操り人形のように首を縦にかくかく

と振って歩き出す。どうやらこの付き合いの主導権は菜々美がすっかり握っているようである。

二人は下駄箱に向かい、靴を履き替える。そして靴を履き替える際に離れた手を再び握り直す。その光景を見て周りからは羨望や嫉妬など様々な反応が漏れる。二人はそれを過度には気にしないようにして校門へ向かう。

「ねえねえ洋介。この後寄り道して行こうよ。どこがいいかな……あつ!？」

この後の予定を相談しようと菜々美が洋介に話しかけたその時、菜々美の視界には危険人物が映った。それは校門にもたれ掛かり、誰かを待っている様子の瞳だった。

いくら洋介を射止めたとはいえ、まだ洋介の心の中には瞳はしっかりと巢食っているであろう。ここで洋介が瞳を見つけたら何か嫌な展開になるような気がする。菜々美はそんな不穏な未来が見えてしまった。

決して洋介を疑っているわけではないが、菜々美が洋介に執着したように洋介もまた瞳には真剣な想いを抱いていたことを考えると瞳と洋介が顔を合わせることは不安である。やっぱり付き合うというのはなかったこととそんなことになってしまいかもしれない。

頭の中に嫌な想像が次々と浮かび上がってきた菜々美は焦って方向転換をしようと試みる。

「そ、そうだ。今日は駅前のファミレスでも行こうよ。ゆっくり何か食べながら話したいな」

「お、おい。何だよ、いきなり逆方向に歩き始めて」

菜々美の突然の方向転換に洋介は振り回され、戸惑ってしまう。

菜々美は疑惑を抱かせないように必死に取り繕う。

「考えながら歩いてたからね。急に思い付いちやって。ごめんね振り回しちゃって」

「まあいいけどな。それで駅前のファミレスだっけ?」

どうにか取り繕えた菜々美はほっと胸を撫で下ろしながら頷く。



それに洋介は瞳のことは見えなかったようで万々歳である。

胸の支えが取れた菜々美は明るさを取り戻して歩き始める。

「それじゃ行こうか。あつ、そういえば洋介はこれから大丈夫だった？」

「ああ、何も用事ないよ。大丈夫」

万が一にでも洋介が振り返ったりしないように菜々美は洋介に話しかけながら歩くことを忘れない。言葉が途切れることがないように次々と話しかけながら逆の校門へと歩いていく。

そして瞳の姿が見えなくなった辺りでようやく菜々美は本当に安心することが出来た。ずっと気を張っていたのが緩んで会話が途切れる。それを不審に思ったのか洋介は心配そうな顔つきになる。

「おい、大丈夫か？ いきなり黙り込んで」

「あつ、うん大丈夫。喋りすぎたから洋介が迷惑してないかなって思っちゃって」

そう言つて菜々美は笑顔を洋介に示す。最愛の恋人に心配してもらえるのは嬉しいが、不安にさせるわけにはいかないと菜々美はテンションを戻すよう努める。

「いや、別に迷惑してなんかないぞ。むしろ小山田らしくていいんじゃないか？」

「ほ、本当！？ だったらファミレスでは覚悟してね。色々聞きたいことがあるんだから」

「あつ、いや、すまん。やっぱり少しぐらい控えてもいいかもしれない」

「残念でした。もう遅いよ。嫌つてぐらい洋介のこと教えてもらうからね」

少しぐらいテンションが落ちても洋介と話している内に元気になってくる。それを考えると菜々美は本当に洋介に夢中になってるんだなあと思ながら思い知らされる。わざわざテンションを上げ直すうと思つたことすら意味がなかったのだ。話しているだけで気分が昂揚してくる。これが恋なんだと菜々美はうっとりしながら思う。

そしてそんなうつとりした気分とは別の所で絶対にこの人を離してなるものかという黒い感情も湧き上がっていたのだが菜々美はまだそれを意識していなかった。

「すっかり暗くなっちゃったな……」

洋介は暗くなった道を一人で歩いていった。

ファミレスでは菜々美が宣言していたように質問攻めが待っていたため、それですっかり遅くなってしまったのである。趣味、生年月日、血液型などのデータから昔話や交友関係など様々なことを菜々美は聞いてきた。何だか取り調べのような感じではあったが、菜々美がいちいち反応を返してくれるためついいたくさん話してしまった。夕食時になり客が増えてきたことがなかったら恐らくまだまだ続いていたであろう。

迷惑になるということで席を立ち、店を出てから洋介は菜々美を家まで送り、そして現状に至っていた。

洋介の家と菜々美の家はそれほど離れていなかった。それこそものの十五分程度のものである。それでこの暗さだというのはだからどれだけファミレスにいたのかと洋介は店に申し訳なく思った。

もうしばらく歩いているので家は間近だと洋介が思っていると、前方に見慣れた姿があった。それは隣の家の幼馴染、瞳である。

正直あまり顔を合わせたくない存在に変わっていたので洋介は歩みを意図的に遅くする。瞳が家に入るまで追いつくわけにはいかないと途中で意味もなく携帯電話を取り出してみたりと歩みを必死に遅くする。

そして瞳が家に向かう最後の角を折れると、しばらく待って洋介も角へと向かう。既に瞳は家に入っているだろうと予測しての行動だったが、それが甘かった。何と瞳は自宅の門の前で立っていた。

予想外の事態に洋介が戸惑っていると瞳は洋介に近寄ってくる。

「彼女が出来たみたいね。よかったじゃない」

「……ああ」

瞳の意図するところがわからない洋介は戸惑いながらもなんとか返事を返す。

釈然としない表情の洋介とは違い、瞳は悪戯そうに微笑んでいる。その顔は素直に祝福するという顔にはお世辞にも見えない。

洋介は瞳の意図がわかるまで迂闊なことは言わないようにしようと気を引き締めた。

「それで？ そんなことを言うただけにわざわざ門の前で待ち構えてたのか？」

「うん、そうよ。……でもまだ他に言うことはあるけどね」  
「……何だよ」

洋介はやっぱりかと想像通りの展開に辟易した。これが今まで一途に想ってきた女なのかと思うと昨日までの自分は何を考えていたんだと言ってやりたかった。

洋介がそんな風に瞳の態度や自分の気持ちについて考えていると瞳はやはり悪戯そうな顔で洋介を見つめている。さて、その口からどんな言葉が飛び出してくるか。洋介はショックを受けないよう心を強く持ってその瞬間を待ち構えた。

「洋介。洋介にも彼女が出来たことだしこれからはあまり馴れ馴れしくしないでくれる？ 幼馴染ってだけでそんなことされても迷惑なのよ」

「……何だと？」

「聞こえなかったの？ これからはあまり近寄らないでって言ってるの」

「……」

昨日までの自分はよくこんな女に耐えられていたもんだと洋介は過去の自分を褒めてやりたかった。それ程瞳の言葉は辛辣で容赦がなかった。よく人様にそんな言葉を吐けたなとむしろ感心するほどの遠慮のなさだった。

しかしこの瞳の言葉は今の洋介にとっては都合が良かった。菜々美と付き合うことにはいえ、やはり未だ瞳の存在というのは気に

なるものであったが、こんなことを言われたのではその残った想いも気持ちよく霧散してしまう。綺麗に末練を吹き飛ばしてくれた瞳に洋介はやはり本心では腹が立つものの感謝の気持ちも湧いていた。「そうか……。わかった。今後は気を付ける」

「それじゃ、私の言いたいことそれだけだから。じゃあね」

自分の言いたいことを言い終わった瞳はそのまま家に入っていつてしまう。その場に残っている洋介のことなど全く気にせず自由奔放に振舞う姿は洋介には思い上がった女にしか見えない。

「俺、なんであんなのに惚れてたんだろうな……」

洋介はむしろこれから関わり合いにならないことに安堵したような心地がした。これで綺麗さっぱり瞳とは何もなくなったことに洋介は身が軽くなる思いだった。

「これで菜々美にも引け目がなくなるな」

洋介はこれで何も引け目なく菜々美と付き合うことが出来ると胸を撫で下ろす。何だかんだでやはり菜々美も瞳のことは今でも気になっているだろう。それを解決出来た洋介はようやく憂いのない笑みを浮かべることが出来た。

「さて、それじゃ俺も家に入るとするかな」

洋介はそう呟くと自宅に入っただけだった。

## 第五章（後書き）

暫く更新が滞ってしまいました。小説を応募していたりしたら余裕がなくなってしまうかもしれません。これからものんびりになるとは思いますが、更新はしていく予定です。

## 第六章

洋介と菜々美が付き合うようになってから最初の休日、洋介は朝も早い午前八時に駅前に立っていた。休日の、それもまだ多くの店も開いていない午前八時の駅前には閑散としていた。通学する学生も疎らでスーツを着た社会人もあまり見当たらない。そこで立ち尽くす洋介の姿は目立っていた。

（まだかあいつは……）

菜々美が一向に現れないことに徐々にイラつき始めていた洋介はその場をうろついて見たり、辺りを窺うような行動を取ってしまう。じっとしていられないのだった。その落ち着かない行動が周りの目を引く原因になっているのだが、洋介自身はそんなことは全く意に介さず、ひたすら周りを見渡す。

「もう三十分の遅刻だぞ……」

洋介は小さく呟く。待ち合わせは七時三十分だったが、意外に真面目な洋介は十分前に到着していた。待ち時間延べ四十分。洋介でなくとも退屈に耐え切れず、辺りをうろろ歩いてもおかしくないため息をつきながら洋介はケータイを取り出す。既に二通メールを送っていたが、返事は返ってきていない。業を煮やした洋介は今度はアドレスから菜々美の番号を呼び出し、通話を始める。

「これで今起きたなんて言いやがったら……」

そのまま家に帰ってやる。そんな風に思いながら洋介は菜々美が出るのを待つ。

すると洋介の背後から着信音が聞こえてきた。この場所でこのタイミングで着信音が鳴る。洋介は後ろに誰がいるのかを確信しながらゆっくりと背後を振り返る。

「……おはよう」

「あははっ……おはよう」

洋介の不機嫌そうな表情に背後から現れた菜々美は苦し紛れに笑

いながら挨拶をする。少しでも場を和ませようと試みた作戦だったが、その効果は一向に表れていない。洋介の不機嫌そうな表情は何も改まることはなく厳しい目線を浴びせかける。

これは小手先の誤魔化しでは駄目だと悟った菜々美は潔く頭を下げる。

「ごめんなさい！ 今日は何を着ていこうとか、体を綺麗にしていなくちゃとか、勝負下着を着けていこうかなとか考えてたらしいの間に時間が過ぎてて……」

頭を下げながら菜々美は訳を話していく。それにしても三十分のオーバーはないだろうと洋介が文句を言おうとしたその瞬間、菜々美は頭を上げた。そこから見えた菜々美の表情は涙ぐんでいた。

（うっ、不意だが許せそうな程可愛い……）

微笑ましい言い訳に涙ぐんだ顔の合わせ技で洋介はあっさり陥落してしまった。喉まで出掛かった文句を飲み込んで、洋介は菜々美の頭を撫でる。

「もついいよ。とりあえず何か事故に遭ったとかじゃなくてよかった」

「あつ、ごめんなさい。メールの返事返さないといけなかったよね」「ああ、遅刻は別にいいけどそっちはちゃんとして欲しいな。心配だから」

洋介の言葉に菜々美は再び涙ぐむ。洋介は何かまずいことを言っってしまっただろうかと自身の言動を振り返るが、心当たりがない。困ってしまった洋介は菜々美の様子をよく観察すると涙ぐみながらも微笑んでいることが分かった。

「ど、どうしたんだ？ いきなりまた泣き出して」

「だって……だって洋介が私のこと心配してくれるなんて嬉しくて……」

（こ、こいつは……）

何て可愛いんだと洋介は叫んで走り回りたいぐらいだった。しかしそれをやると完全な変人の上に肝心の菜々美に嫌われそうだから

自重する。その代わりとばかりに洋介は菜々美を軽く抱きしめる。

「あつ……洋介……」

菜々美は少し驚いた様子だったが、そのまま洋介の胸で大人しく抱きしめられる。その表情は至福そのものといった様子である。

（ああ、俺のキャラが段々変わっていくなあ……）

ちよつと前の自分だったら外でこんな恥ずかしいことやらないだろうし、そもそも外でなくてもやらないだろう。憧れていた瞳の想像でもこんな場面など考えていなかった。前に菜々美に言つた通り振り向かせることしか考えていなかったのだから無理もない。全く想定していない無意識の行動に洋介は自分が恐ろしくなった。

（俺、これから何しちゃうんだろう）

これからもこんな無意識な行動が次々起こってしまうのだろうかと思うと洋介は顔が真っ赤に火照つてしまうのだった。

閑散としているとはいえ駅前で堂々と抱擁していた二人は顔を赤らめながらそそくさと退散していた。今、現在はファーストフードに入り、朝食の最中である。とは言ってもこれは予定外の行動で、時間がなくなり朝食を抜いていた菜々美のための寄り道であった。

「うー、いきなりこんな恥ずかしいところを晒すなんて……」

「別にいいんじゃない？ 腹が減るのは普通だろ？」

「そつという問題じゃない！」

菜々美は顔を赤らめながら気持ちを分かってくれない洋介に不満を口にする。洋介の前にはフライドポテトにコーヒ―。そして菜々美の前にはハンバーガーにポテト、コーヒ―。朝から男よりも多いメニューが机の上に並んでいるのが恥ずかしいのだろう。

「うう、恥ずかしい」

「でも美味いだろ？」

「うん、美味しい……」

顔を赤らめ、恥ずかしがりながらも菜々美の口は食べることを止めない。やはり空腹には勝てないのだろう。あつという間にハンバ



「ガーとポテトを食べ終え、コーヒーを啜る。

「ご馳走様……」

「おおつ、早いなあ」

「言わないでよお」

菜々美いじりに楽しみを見出した洋介だったが、あまりやると機嫌を損ねるか泣かれるかしそうなのでこれぐらいで留めた。そしてその代わりとばかりに洋介は違う話題を菜々美に振る。

「それでこれからどうすんの？ まだ八時半だぞ」

「まずは中央公園に行っていちゃつく」

「はあっ！？」

菜々美の発言に洋介は驚き、思わず立ち上がってしまった。周りにいる客が何かとばかりに視線を集中させると洋介はその視線に気付き、恥ずかしそうに席に座る。

「お前が変なこと言うからっ！」

「ふ、普通でしょ！ 噴水の近くに座って愛を語るとか」

「お前意外に純情なのな」

洋介は見た目とは異なり、一昔どころか相当前純愛文学のようなデート観を持っている菜々美に驚きの念を隠せない。確かに時間が早すぎるため行ける場所は限られるのだが、洋介にはその選択肢はなかった。せいぜいこの前の下校のようにファミレスにでも入って喋るか、今しているようにファーストフードで喋るかである。

それでも洋介は初デートでもあるし、菜々美の望みは出来る限り叶えてあげたかった。かなり恥ずかしい光景が想像出来るが、仕方ないと洋介は腹をくくった。

「いいよ。それじゃ公園行こうか？」

「ええっ！？ いいの？」

「お前が行くって言ったんじゃないか」

「でもまさかいいって言うとは思ってなかったから」

「まあ、恥ずかしいけど初デートだから出来るだけお前の望みどおりにしてやりたいし……」

「洋介……だから洋介のことが大好きなんだよおおおおっ！」

「うわっ！　ちよっ、こんなところで抱きつくなあああああっ！」

喜びのあまり公衆の面前で熱い抱擁を交わす洋介と菜々美。店員と客の視線を独占してしまっている状態に耐えられないのか洋介は抱きつく菜々美をひとまず引き離し、菜々美を連れて外に出る。

「お前はしゃぎ過ぎ。無茶苦茶恥ずかしいだろうが」

顔を羞恥に赤らめた洋介は外に出るなり菜々美に苦情を申し出る。確かに柔らかくいい匂いのする菜々美の抱擁は男として至福であるに違いないが、女の子と初めて付き合った洋介には刺激が強すぎたようである。まして公衆の面前である。自分から抱きしめた先程とは違い全く覚悟が出来ていなかったことも余計に洋介を恥ずかしくさせていた。

一方、愛の抱擁を引き剥がされた菜々美は見るからに不満そうな表情をしている。こちらは顔を赤らめることもなく至つて普通である。むしろ公衆にもっと見せ付けてやればいいと言わんばかりの態度で洋介を見つめる。

「さっき自分もしたくせに……。それと洋介は周りを気にしすぎ。これぐらいよく街中で見かけるよ」

「あれは無意識だったんだよ。それに人もそんなにいなかったし……。まあ、ともかくせめてもっと慣れてからにしてくれ。初デートでこれはレベル高いよ」

「そんなことないのになあ……。じゃあこれならいい？」

「あっ……」

洋介が抱き合うことに難色を示していることを知った菜々美は代替案とばかりに洋介の手を握る。突然絡んできた菜々美の手の感触に洋介は驚くものの、それを離したり、抵抗したりすることはなかった。

「これぐらいなら初デートでも十分やるよね？」

「まあ、これぐらいなら……」

「それじゃ手を繋いだまま公園まで行こうか」

「……ああ」

これで歩くのも十分恥ずかしいと思った洋介だが、譲歩出来ないレベルでもないので受け入れることにした。出来る限り菜々美の望みを叶えたい。そう決めたのに早速菜々美の行動に難色を示してしまった以上、これも断るわけにはいかなかった。

どうやら菜々美はとかく二人だけの世界を築きたいらしく周りを一切気にしない。堂々と手を繋いだまま道を練り歩く。

だが、その相手の洋介といえば周りから見られていると、こちらは過度に周りを気にしていた。まだまだ菜々美のように二人だけの世界に浸れるほどには至っていないようである。

洋介にとって茹で上がる程恥ずかしい時間がようやく終わり、二人は中央公園に到着した。まだ朝早いためか人影はまばらで洋介にとつては望ましいことであつた。

公園に入ると二人は誰もいない噴水の近くにまでやって来る。そして噴水周りのベンチに腰掛ける。

「さあ、洋介。ここなら人の目も気にならないよ」

「まあ、しばらくしたら人来るだろうけどな」

「だからそれまではここでいちゃつきながら愛を語ろう」

「いちゃつくのはともかく愛は語りたくないな……」

菜々美のハイテンションについていけない洋介はともかく話の内容を考える。菜々美に先んじて話題を振らないと菜々美の意味の分からない愛を語るというテーマに巻き込まれてしまう。それだけはなんとしても避けたかった。

「それじゃまずは……」

「ああっ！　そういえば俺まだ菜々美のこと何も知らないよなあ。趣味とか聞きたいなあ」

いきなり語り始めようとする菜々美を遮るように洋介は話を繰り出す。だが慌てて持ち出した話題のわりには選択は間違っていないかつたらしく、菜々美は洋介の話題に食いついてきた。

「えっ？　私の趣味聞きたいの？　嬉しい！　私に興味を持ってく

れてるんだ」

「あつ、ああ、まあ俺の彼女だしな」

「いいよ、いくらでも答えちゃう。私の趣味は洋介です！ きゃあ、言っちゃった！」

「……」

恥ずかしそうに体をくねらせる菜々美を見て洋介はむしろ冷めていく。それどころか引いているような様子さえ見える。しかし頭の中が幸せで一杯の菜々美はそれに気付かない。それどころか更にその弾けぶりは加速していく。

「もう朝起きたらまず洋介のことを考えて、授業中にも考えて、夜にも妄想しちゃいます！」

「あ、あの……もういいから。わかったから」

このまま放っておくと危ないことまで口走りそうな菜々美に洋介はここまでとストップをかける。ストップをかけられた菜々美はまだ言い足りないとはかりに不満そうな顔を洋介に向ける。

「ここからが本番なのに……」

「ああ、そういうものは胸の中にしまっとけ。大事なことは滅多に表には出さずに秘めておくもんだ」

「洋介……なんかかつこいいこと言ってる……」

（こいつの中で俺はいつたいどれだけ美化されてるんだろう……）

洋介の行動にいちいち感激する菜々美を見て洋介はその頭の中を見たいと思った。恐らく自分とは似ても似つかない自分が住んでいることだろう。もしそうでないなら菜々美の目は節穴に違いない。少なくともかつこいい部類の人間ではないと自覚している

洋介は菜々美の反応にためらうところがあった。

（こいつは本当の俺をちゃんと見つめてるのか？）

洋介は少し不安になった。そもそも瞳の例を見てわかるように女の子に好かれる方でもないし、何かとりえがあるわけでもない。菜々美がここまで好いてくれること自体が稀有なことである。

（それにそもそもこいつはどうして俺を好きになっただろう）

そんなことを考え出すとどうしてもこういう考えに行き着いてしまう。しかし自分になかなか自信を持てない洋介にとっては大事なことであつた。

（愛を語るとか言ってるんだから聞いてもいいだら）

洋介は菜々美が提案したテーマにありがたく便乗し、聞きにくい質問を自然にするという作戦を取った。

「なあ、そういえばどうしてお前は俺に告白しようと思ったんだ？」  
「えっ？」

洋介の質問に菜々美はうつとりした顔から我に返る。それでも質問はちゃんと聞いていたらしく、難しい顔をして考え込む。

（そんなに考え込まないと答えられないのか……）

菜々美の沈黙に洋介は少し悲しくなってしまう。早く何か言葉を発してくれ。洋介は切にそう願った。

すると願いが通じたのか菜々美は顔を上げて、洋介を見つめる。

その真剣な顔をした菜々美に洋介は思わず見とれてしまう。

「……私が洋介を好きになったのはね、実は河野さんが絡んでるんだ」

「……瞳が？」

「うん。洋介ってすごい一途に河野さんに好意を表してたよね。結構目立つ光景だったから私も見てただけど、最初はみつともないって思ってたんだ」

「そうだよな。今思えばストーカーみたいだったな……」

「だけど洋介の真剣な顔を見てたらいつの間にか応援するようになってた。想いが伝わるといいねって」

「……」

「でもそのうちその真剣で一途な洋介に私惚れちゃってたんだよね。気が付けば反対に想いが伝わるなって思うようになってたんだもん」  
「そうだったのか……」

「今思えば応援し始めた頃にもう好きになっちゃってたんだと思う。やっぱり何かに一生懸命になってる人ってカッコいいもん」

菜々美は時には笑みを浮かべ、時には切ない表情で当時の心境を語っていく。洋介にとっては当然知らなかった事柄ばかりで菜々美の思いだけでなく瞳を追いかけていた時の周りの様子も知ることが出来た。当時の洋介にとっては周りの意見や胸中などどうでもいいことだった。ただ瞳だけを見つめていた洋介にとってその行動の意見をしつかりと受け止めたのは今回が初めてだった。

（そうだ、瞳といえば……）

洋介は菜々美の話から瞳という言葉が出てきて、菜々美に伝えなければならぬことを思い出した。恐らく菜々美を未だに不安にさせるであろう存在である瞳について最近起こった変化を洋介は菜々美に伝えようと洋介も改めて表情を引き締める。

「そつえば菜々美、お前に朗報があるぞ」

「えっ、朗報？」

「ああ、瞳が俺と絶交したいみたいなのを言ってきた。軽々しく近寄るなっさ」

「それ私にとっては朗報だけど洋介にとってはそうでもないよね？」

「いや、それを聞いてもう瞳に対する気持ちは消え去ったよ。これで菜々美にも不安を感じさせなくて済むと思うと俺もほっとしたよ」

「洋介……」

菜々美は感激に瞳を潤ませる。洋介の口からこうもはっきり瞳に対する気持ちは消え去ったと聞けるとは夢にも思わなかったのだろう。ゆっくりゆっくり洋介の瞳に対する想いを自分に対する想いへと移らせていけばいいと長期戦を考えていた菜々美はその願いがあったという間に成就したことに驚きを隠せない。告白成功に続き、洋介の心から瞳の影を取り去ることまであまりにもあっさり進み、これは夢ではないかと菜々美は自分の頬を抓ってみる。

「いつ、いたたたたたっ！ 夢じゃない……」

「お前……何やってるんだ……」

「だってこんなに私が願ったとおりになるなんて……」

「やっぱりけじめつけないと駄目だからな。口でいくらもう瞳なん

て関係ない、菜々美と付き合ってるんだからみたいに言っても不安は消えないだろうからな。実際に行動で示さないと……まあ正確には瞳に示されたんだけどな」

そう言って洋介は苦笑いする。だが、奈々美は真剣にその話を聞き、涙を次から次へと流している。完全に感極まってしまったようである。

洋介は嬉しさのあまり泣きじゃくる奈々美を抱きしめる。それはまさに愛を示す行動だった。奈々美が愛を語ると言っていたのよりも一層恥ずかしい行動だったが、こちらも感極まってしまっている洋介には恥ずかしいという気持ちはなかった。

朝の無人の公園で抱きしめ合う二人。それはまさに映画のワンシーンのように美しい光景であった。

朝から濃密なデートとなった二人はそれ以後は打って変わって穏やかなデートをしていた。ウィンドウショッピングをしたり昼食を食べたり、映画を見たりとデートを楽しむ。

だが楽しい時間が過ぎるのはあつという間である。辺りは徐々に薄暗くなってきた。

「もうだいぶ暗くなってきたな。そろそろ帰るか」

「うん……もつと遊んでたいけど次に楽しみをとっておくのもいいよね」

奈々美は残念そうな顔をするが、食い下がるのを堪えて自分を納得させている。ここで我が儘を言って洋介を困らせたくないという思いが奈々美を強く抑制していた。

「それじゃまた今度だね……」

「ああ、また今度」

奈々美はまるで今生の別れのように暗くなっている。先程まで明るく楽しさに満ち溢れていた表情をしていたというのに今の表情は泣きそうですらある。

そんな表情を見てしまっただけで洋介もここでそのまま宣言通り帰

ることは出来ない。洋介は照れ隠しに頭を掻きながら奈々美に提案をする。

「なあ……何だったらちよつと俺の部屋に上がってく？」

「えっ？」

洋介の突然の誘いに奈々美は驚きの顔を洋介に向ける。我が儘は言わない、そう心に決めて必死に自分を押さえ込んでいた奈々美にとっては思いもよらない言葉だったのであろう。

「……」

「奈々美？」

目を驚きに丸くしたまま奈々美は黙り込んでしまっている。その様子を見て洋介は何か間違ったかなと不安に駆られてしまう。（いきなり部屋に誘うなんて軽すぎたかな。それとも別れが惜しいように見えたのは俺の勘違いだったか？）

反応を返さない奈々美に洋介は段々不安が増してきていた。表情を窺っても呆然としていただけで判断がつきにくい。洋介はそのままにいるべきかすぐに提案を引つ込めるべきか悩んでしまう。（どうしよう……でもやっぱり初デートで部屋に誘うなんてまずいよな……）

洋介は悩んだ結果提案を引つ込めるべきだと決断を下した。

そうなるといち早くこの重苦しい空気を一掃させたい。洋介は改めて顔を奈々美に向ける。

「やっぱり今のなし。悪い、俺なんか頭がおかしくなってたみたいだ」

「えっ!？」

洋介の言葉に奈々美はまた驚く。しかし今度の驚き方は先程の比ではなかった。奈々美は今度は呆然とするのではなく慌てて洋介に詰め寄り始める。

「ち、ちよつと待って！ 私行きたい、洋介の部屋に行きたい！」

「ええっ!？ ちよつ、奈々美落ち着いて……」

激しい奈々美の反応に洋介は困ってしまう。あまりに激しい反



応の差に洋介は驚きと困惑に包まれていた。それでも今の様子を見ていると奈々美は行きたいようだとりあえず洋介はその点では安心した。

「それじゃ行くってことでいいんだな？」

「うん、私洋介の部屋に上がってみたい！」

「よし、それじゃ行きますか」

洋介は奈々美の意思を確かめてから自宅へと向かう。奈々美は道々洋介にどんな部屋かとか家族は何人かなど引つ切りなしに質問を浴びせ掛けていた。それに洋介も面倒臭がることなく答えていく。結局移動の間、奈々美は最初から最後まで質問をしていた。

だが、いざ洋介の自宅を正面に見る段になった今、奈々美はすっかり借りてきた猫のように大人しくなっていた。

「うん？ どうしたんだ？」

それまで質問攻めで賑やかだった奈々美が突然大人しくなったことに洋介は訝しがる。洋介が家の門を開けようと手を伸ばしたただけで体をピクッと反応させてしまう始末であるのだから訝しむのも無理はない。これではまるで嫌と言わんばかりの様子である。

「あ、あの緊張しちゃって……あははっ」

洋介が不審に思っていることは何とか感じとれたのか奈々美は理由を正直に話す。しかしその緊張の度合いは凄まじいようで場を和ませようとした笑いもかえって洋介に苦笑いを強いる結果になってしまう。

「ま、まあこうしても仕方ないし、入ろうか」

「う、うん。それじゃお邪魔します」

どこか動きがぎこちない二人は門を開けて玄関へと進む。特に奈々美のぎこちなさはここに極まれりといった様子で足と手が共に同じ方が動いていた。

「俺の部屋こっちだから」

「あ、うん……」

洋介の案内に従って奈々美は高梨家の中を歩いていく。玄関から

廊下を歩き、階段を昇る。そして二階にある一部屋で洋介が立ち止まった時、菜々美の緊張は頂点に達した。

「ここが俺の部屋。さ、入ってよ」

洋介は扉を開いて菜々美を招く。洋介の背後に広がる空間はまさしく自分の知らない洋介の日常が詰まった空間なのだと思うと菜々美はすぐにも飛び込みたい気分になったが、体が動いてくれようとしなない。菜々美は心とは裏腹に立ち止まったままだった。

だが、そんな態度をしていれば洋介としても不審さを感じずにはいられない。中に入るよう促しても動こうとしない菜々美に訝しげな表情を向けてこちらもそのまま立ち尽くしている。

「うん？ どうしたんだ？」

洋介は当然のように菜々美にそう尋ねる。洋介が不審に思っていると感じると菜々美としてはすぐにでも行動を開始するなり、言い訳を言うなりしたところだったが、体どころか緊張のあまり口さえまともに動いてくれない。結局菜々美に出来ることは目をパチクリさせながら慌てふためくだけだった。

「ああ、やっぱりリビングのがよかったか。それじゃリビング行こうか」

洋介は菜々美の態度から何かを悟ったのか突如部屋の扉を閉めて、再び下へ降りようと菜々美を先導する。洋介の部屋の扉が部屋が閉まると不思議に菜々美の体の緊張は緩和されていた。菜々美はようやく動かせるようになった体を叱咤し、洋介の後に続く。

（あーっ！ もう、何で私はこんな大事な時にあんなことになっちゃうってるのよ……）

階段を降りながら菜々美はいざ洋介の部屋に入る段になって緊張のあまり動けなくなった自分を呪った。夢にまで見たシチュエーションだったというのに自らそのシチュエーションを崩壊させたことに自己嫌悪に陥っていた。

それでもまだ汚名返上の機会は残されている。菜々美はこれからリビングでその失態を巻き返そうと息巻く。

「こつちがリビングな。それじゃ適当に座ってて。俺は何か飲み物でも持ってくるから」

「うん、わかった」

洋介は菜々美をリビングに通すと自らは飲み物を持ってくるべくリビングを出て行く。菜々美は洋介に言われたとおりにソファに座って洋介を待つ。

「さあ、これからどうしようかな……」

菜々美はソファに座ると辺りを見渡して作戦を練る。飲み物などすぐに持ってこれるだろうから猶予時間は少ない。

（ここはリビングだから洋介に直接繋がる要素は少ない。そうなる部屋を褒めるとかよりも今日の感想の方がいいかな）

菜々美はどうやって会話を盛り上げるかを考えていた。先程の失態のせいで微妙に二人の間の空気がぎこちなくなっている。やはり洋介の部屋に上がってみたいと思いはしても、覚悟がしつかり決まっていなと緊張に押し潰されてしまうようだ。菜々美は洋介の部屋に上がれるというイレギュラーの事態に簡単に飛びついた近い過去の自分を呪った。

（まあ、とりあえず部屋に入らなかったのは緊張しちゃったからって伝えないと。間違いなく洋介は誤解してるだろうし）

菜々美は冷静にまず自分が取るべき行動を計算する。恐らく誤解しているであろう洋介の考えを正しておかないと菜々美は洋介の部屋に上がれなくなってしまう。菜々美はそれだけは絶対に嫌であった。

（絶対に洋介、私が警戒して入らなかつたって思ってるよ……）

もし洋介がそう思い込んだままであったら菜々美が洋介の部屋に入れるのは何時になることやらである。ただでさえ上がれるチャンスを逸してしまったのだから、せめてものフォローが必要であった。菜々美がそう今後の方針を定めていると洋介がお盆を持ってリビングに入ってくる。お盆の上にはコップが二つ。中身はコーヒーであろう。横に置かれたミルクとガムシロップで分かる。

「お待たせ。これ菜々美の分ね」

洋介はお盆をソファの前にあるテーブルに置くと菜々美の前にコップとミルク、ガムシロップを置く。そして自らの前にもコップを置く。どうやら洋介はブラックで飲むらしくミルクもガムシロップも用意されていない。

「洋介はブラック派なんだ？」

「いや、特にそういうこだわりはないよ。今日は単にブラックで飲みたかったっただけ。そういう聞いてなかったけどコーヒーでよかったか？」

「うん。コーヒーでいいよ。ありがとう」

菜々美はそう言いながらミルクもガムシロップも入れる。とりあえず無難に会話を始められた菜々美は一先ず安堵しながらコーヒーを飲む。

だが問題はここからである。如何に自然に先程の状態の説明をして理解してもらうか。あまり深刻に話すと望ましくない方向に話が進みそうだし、軽すぎるとそれはそれで不満を感じさせるかもしれない。匙加減が重要であった。

「……ちよつとは落ち着いたか？」

「えっ？」

「さつき凄いガチガチになってたから」

まさか洋介の方からわざわざその話題を振ってくれるとはと菜々美は洋介の手を取ってお礼を言いたいぐらいだった。実際にそんなことはしないが、菜々美は有難くその話題を活用させて頂きますと心の中でお礼を述べる。

「うん……ごめんね、私凄い緊張しちゃって。それで固まっちゃった」

「俺もいきなりすぎたよな。ごめん」

「ううん、私だって洋介の部屋に上がりたいよ。だからまた今度そう誘ってほしいな」

「菜々美さえよければいつでもいいよ」

「ホント！？ 今度は私も今日みたいにならないようにするから」  
案外あっさり問題が解決したことに菜々美は拍子抜けした。だがそれでも話がこじれるよりは遙かにいいわけだから不満などない。精々振り絞った頭脳と勇気が思ったほど使われなかったぐらいである。ともかく望みどおりの結果に落ち着いたわけだから万々歳である。

（今度はとりあえず自分からお願いするようにしよう）

菜々美は次に洋介の部屋に上がる時には覚悟を決めるべく自分で日程を設定しようと考えて、思考を打ち切る。あとは洋介とのおしやべりに興じたかった菜々美は余計なことは考えずに洋介の一言一句に集中する。洋介もまた菜々美が聞きたがることは惜しげなく話し、菜々美の話にも真剣に耳を傾けた。

こうして洋介と菜々美はデートの締め括りに歓談を楽しんでデートを終了したのだった。

## 第七章

先日のデート以降、洋介と菜々美の親密さは更に度合いを増していた。登校、昼食、下校と自由になる時間はべつたりといった具合である。

「洋介……はい、あ〜ん」

「あ、あ〜ん……」

そして今日も二人は屋上で二人だけの世界を繰り広げている。菜々美にとっては至福そのものの、洋介にとっては至福と恥ずかしさの入り混じった昼食の光景は他者を屋上から遠ざけて止まない。屋上はまさしく二人だけの世界と化していた。

「どう？ 洋介、おいしい？」

「ああ、確かにおいしいけどこれは恥ずかしすぎるぞ……」

「誰もいないからいいでしょ。何が恥ずかしいの？」

「こんな光景誰かに見られたりしたら俺は次の日から学校に来れない」

洋介はそう恐ろしい未来を想像しては不安になるが、実際は何を今更といった話である。二人のただ甘なバカップルの光景は昼食だけに留まらずに登校時にも下校時にも繰り広げられ、周りをかえって赤面させる程であった。どうにも洋介の中の判断基準は先日のデート以来狂ってきたようである。

「洋介が学校に来れなくなったら困るなあ。それじゃこれぐらいで勘弁してあげよう」

そう言うとな菜々美は洋介に向けていた箸を引っ込めて自分の食事を開始する。ようやく気恥ずかしい悶絶地獄から開放された洋介はこちらも自分の弁当に箸を向ける。まずは菜々美が洋介におかずを食べさせて、その後それぞれの弁当を食べ始めるといってこの一連の行動は徐々に二人の昼食時の儀式と化しつつあった。

「本当だったら私も洋介にあ〜んってしてほしいのになあ」

「それやったら俺は再起不能になるな。うん」

その一連の儀式に更に追加事項を加えたがる菜々美に洋介は拒否の姿勢を見せる。ただでさえされるだけでも気恥ずかしいのが、逆にする側に回れというのだから拒否をするのも無理はない。

菜々美もその点はよく心得ているのか言ってみただけで、その話題を続けるようなことはしない。実に洋介の心を知ること菜々美の右に出る者はいないといった様子である。

「あつ、そういえば洋介に言わなきゃいけないことがあったんだつた」

「突然だな。まあ、いいけど。それで何？」

「今日、先生に呼び出しくらっちゃって放課後残らないといけないんだよね」

そう言うつと菜々美は悪戯そうに舌を出す。こうして空気を変えることは菜々美の得意とするところであった。少し不機嫌になりそうだった洋介の雰囲気を変えようと菜々美の取った対策であったが、その話題が洋介と下校出来ない旨であったことが菜々美には少し悲しい。表面上はおどけていたが、心中では完全にへこんでいた。

「そうか。わかった。それじゃ今日は先に帰るとするよ」

「ごめんね。本音を言えばすっぱかしたいんだけどそれやると私、進級も怪しいからさ」

「これからはもう少し真面目にやろうな……」

一応真面目な生徒をしている洋介にとつてはそんな進級がかかった呼び出しなど想像もつかないらしく、その表情からは呆れの様子が見て取れた。そんな洋介の様子に菜々美も気付いたらしく、おどけた様子でありながらも真剣さを足した表情で洋介を見つめる。

「洋介と離れ離れなんて嫌だからね。何とかして進級するよ」

「ああ、頑張ってくれ。俺だって、その……菜々美とは一緒に進級したいからな」

「洋介……」

洋介が顔を赤らめながら小さく呟いた言葉を菜々美は聞き逃さな

い。感激に目を潤ませながら洋介の手を握る。

「私、絶対に進級するから！ 見ててね！」

「ああ、信じてる」

こうして二人は誰もいない屋上で手を取り合いながら一緒に進級を約束するのだった。

放課後、洋介はここ最近では珍しく一人で学校を後にしていた。

菜々美は昼に言っていたとおり呼び出しを受けて残っている。洋介は菜々美の命運を祈りながら校門を出る。

「さて、どうするか。……たまには真つすぐ家に帰るか」

洋介は放課後の方針をそう決めて、家へと向かう。菜々美と付き合うようになってからは別れるのを惜しむ菜々美に合わせて寄り道を必ずしていた。そのため出費もそれなりにかさむ。洋介は節約できる時には節約しておこうと真つすぐ家に帰ることにした。

（今日は宿題も特になかったし、予習も大丈夫だな）

のんびりと歩きながら洋介はやるべきことはなかったか考える。

それなりの優等生をやっている洋介は復習こそしないが、予習はちゃんとする。授業で当てられた時に答えられないなんていう醜態は真つ平御免という洋介の見栄がそうさせるのであった。逆に復習はテスト週間にやればいい。それで今のところは問題なかった。

「菜々美は一体どうしてるんだろっなあ」

洋介は思わずそう呟いてしまう。進級が危ぶまれる程の成績。いや、出席だったり授業態度だったりするのかもしれないが、どうみても真面目に勉強をしそうな人間ではない。

「あいつ夜もメールばっかしてるもんな」

洋介は毎晩メールを送ってくる菜々美を思い出す。普通のメールだけでは飽き足らず、入浴中だったり着替え中だったりの写真を添付して送りつけてくるところを思うと勉強など絶対にしていないと想像出来る。

「勉強見てやった方がいいかな」



洋介は密かにそう決心し、本気で勉強会のプランを考え出す。

（休みの日だとちょっと酷かなあ。放課後に教室に残ってやるか？）  
洋介がそういったプランを考えながら歩いているとあつという間に家に着いてしまう。考え事というものは恐ろしく、どうやって歩いてきたか洋介は全く覚えてなかった。

「俺、信号ちゃんと確認してきたよな……」

下手をしたら信号無視をしているかもしれないことに洋介は身震いをする。こんな状態では車に咄嗟に反応するなど無理であろう。

洋介は自己の行動を戒めながら家へと入っていく。

「ただいま」

洋介は靴を脱いで家へと上がる。そして洗面所で手を洗ってから二階へと上がっていく。そして自分の部屋に入ると制服を脱いで私服に着替えた。

「……俺って菜々美と付き合う前って帰ったら何してたんだっけ？」

洋介はベッドに座り込むと首を傾げる。完全に手持ち無沙汰になつてしまった洋介だったが、以前は帰ったら何をしていたか思い出せない。それほどここ一週間程の菜々美との付き合いが濃厚だったのだろうか。とにかく洋介は暇で仕方なくなつてしまっていた。

「これならゲーセンか本屋辺りでも寄ればよかったな……」

洋介はそう呟きながら時計を見る。時刻はまだ四時半。今から出かけても夕飯まで十分時間があつた。

「よし、本屋にでも行くか」

洋介はそう決めるとベッドから立ち上がり、部屋を出る。

洋介は一階に下りると出かける旨を母親に伝えて玄関へと向かう。そして近くにある本屋数軒から行く場所を絞って家を出た。

「なんか新刊って出てたかなあ」

特に目的もなく出てきたため、新刊などの情報は調べていない。だが、せっかく真つすぐ帰って来て節約を心掛けたのだから無駄な出費は控えたい。そうなるとやはり立ち読みかなと洋介は苦笑するのだった。

時刻は午後七時半。洋介は暗くなった道を走っていた。

「やっべ、立ち読みだけにしとけばよかった……」

結局本屋だけでは飽き足らず、色々見て回ってしまったため帰る予定時刻を大幅に過ぎてしまっていた。洋介はこのままでは夕食を片付けられかねないと急いで家へと走る。

「間に合えばいいけどなあ。親父が俺の分まで食ってたら最悪だ」

洋介は父親の胃袋が自分の分だけで満足しますようにと祈りながらひたすら走る。もうだいぶ家には近付いている。あとは目の前の角を曲がれば家の前の道路だ。洋介は角ということで安全上、速度を緩めながら曲がる。

「よし、多分もう大丈夫だろ……って、ぐあっ!？」

「きゃあっ!」

洋介が角を曲がりきると、そのすぐ後に思いがけない障害物があった。洋介は家が間近に見えた安堵から足元がおろそかになっていたためその障害物に思い切り躓き、そのまま転倒してしまう。

一方でその洋介を転ばせた障害物も悲鳴を上げてそのまま横倒しに転がってしまう。

「いつてえなあ。何なんだ一体……」

洋介は体を手で払いながらゆっくりと起き上がる。そして転倒した場所を見遣って障害物を確認しようとする。

ちょうど街灯の下ということでの障害物は案外はつきり見えた。それは見慣れた制服を着た少女だった。

「うわっ、人だよ。だ、大丈夫ですか？」

「いたたた……だ、大丈夫です。一応」

洋介が躓いて蹴ってしまった少女も体を擦りながらだが、大丈夫と返事を返す。それに安心した洋介は手を差し伸べて少女を助け起こそうとする。

「手、掴まってください。本当にすみませんでした」

「あつ。いえ、私こそあんなところに座り込んで危ないですよね。」

すみませんでした」

そう謝って少女は洋介の手に掴まり、体を起こす。そして少女が顔を上げて洋介を見た瞬間、二人は固まってしまった。

「ひ、瞳……」

「洋介……？」

## 第八章

「ひ、瞳……」

「洋介……?」

二人はお互いに顔を確認した瞬間、そう呟いて固まってしまった。絶交宣言以来、顔を合わせてこなかっただけに二人の気まずさはこの上ない。あるうことが手まで握っているのである。

「……」

洋介はようやくフリーズから立ち直り、黙ったまま瞳を助け起こす。そして起こすとすぐに握っていた瞳の手を離れた。

「あつ……」

すると瞳は何を思ったのか引つ込めた洋介の手を名残惜しそうに目で追う。その反応に洋介はどう対処したらいいのか困り、視線を落ち着かなく移動させる。

すると洋介の目に異変が飛び込んできた。今の今まで気が付かなかったもおかしいが、瞳の制服は所々が破れていたり、汚れていたりした。もしかして先程の転倒のせいかと洋介は途端に申し訳ない顔つきになる。

「服をこんなにしちまって悪いな。弁償はするから……」

「……これは洋介のせいじゃないわ」

「えっ?」

「私、さっき彼氏達に暴行されかけたのよ」

「ええっ!?!」

あまりのことに洋介は跳ね上がりかねない程驚く。そしてすぐに瞳を心配してうるたえ始めてしまう。

「だ、大丈夫なのか?」

「うん。思いきり抵抗して逃げてきたから……」

「でもこんな所に座り込んでたらそいつらが追い掛けて来るんじゃない?」

「……」

「未遂で済んだんだからあいつらも逆にホッとしたみたいよ。まあテンション下がって冷静になったんだろうね。誰にも言わないから今後私に干渉するなって言っておいたわ」

「お前強いな……」

洋介は瞳の気の強さに半ばは呆れながら、だがそれと同時に感心しながら瞳を見つめる。暴行されかけたというのにここまで凜としていられる瞳はやはり魅力的だなと洋介は改めて思った。

だがそんな思考の中、洋介は一つの疑問に思い至った、というよりも先程も思ったが瞳の返事に方向を変えられた形だったのだが、洋介はとにかく瞳に問い掛ける。

「でもなんで家に帰らないんだ？」

「こんな格好で帰ったらお母さんとかに心配かけるでしょうが」

「だからって帰らないのも心配かけるんじゃない……」

「だからここで作戦を考えてたの」

瞳はそう言うと言と難しい顔をする。絶交どころか会話が続いていることに瞳は疑問を感じていない。やはり気丈に振る舞っても恐怖や不安を感じているのだろう。瞳は洋介に辛く当たることもなく、むしろ安心を感じているかのように楽しそうに話す。その様子を見ては洋介もこのまま放っておくわけにはいかなかった。

「でもいつまでもここにいたら今度は変なのに絡まれるかもしれないな。とにかくどうにかしないと」

「どうにかってどうするのよ」

「とりあえず俺の服着ておけばいい」

「制服はどうするのよ？」

「替えぐらいあるだろ？　しばらくそっち着といて片方なくしたって言っとけ」

「はあ……相変わらず無茶苦茶……」

洋介の提案に瞳は呆れてみせるもののその表情には笑顔が戻ってきていた。ようやく本当に安心し、落ち着いてきたのだろう。  
「それじゃまず俺の家行くか」

「私は？」

「素早く廊下歩けば格好なんて見られないよ」

「でも上がる理由が……」

「漫画借りに来たとかでいいだろ、そんなの」

洋介はそう瞳を説得すると自宅に向かって歩き出す。それを見て瞳もゆっくり洋介の後に続く。

これまでは洋介が瞳の後ろ姿を見つめてその度に途方に暮れるのだったが、今は後ろに瞳がいる。その変化に洋介は変な感覚を感じていた。

「そ、それにしてもいつからあそこに座り込んでたんだ？」

落ち着かない感覚を紛らすように洋介は瞳に話し掛ける。必死に笑顔を作るが、引き攣っている。それを見て瞳は思わず笑みが零れる。

「そこまで長い時間じゃないよ。大丈夫」

「そ、そうか。それならよかった」

「それより洋介の部屋に上がるなんて久しぶりだね」

「そ、そうだな」

そんな風に洋介と瞳が話しているとあつという間に洋介の家に着いた。元々あとは直線を残すのみであったのである。それほど時間がかからない。

「ただいま」

「お邪魔します」

洋介と瞳は一応そう声を家の中にかけるが、そのまま一気に家の中を移動し、二階の洋介の部屋までやってくる。

「とりあえず誰にも見られなかったか。さすがに漫画借りに来たで済まないもんな、今の格好じゃ」

「うん。よかった……」

一先ず安心した二人は落ち着いて洋介の部屋に入る。奈々美は洋介の部屋に入るのに異常な程緊張し、入ることが出来なかったが、瞳はなんら緊張することなく部屋に入る。

「へえ、あまり昔と変わってないね」

「それでも少しは変わってるよ。それよりも早く着替えをしないと」

洋介はそう言うと言筒から服を取り出す。サイズが合わないかもしれないが、ずっと着るわけではないから構わないだろう。

「それじゃこれ着て。大きいかもしれないけど」

「うん、ありがとう」

洋介は服を手渡すとすぐにドアへ直行する。そして部屋から出て、階段に座って着替え終わるのを待つ。

「あいつ絶交しようみたいなこと言ってた割りには素直についてきたな」

洋介は座りながら瞳の行動について考える。

気軽に話し掛けないでと言ったが、今も仕方なくついてくるという感じではない。会話にも応じ、実に和やかな雰囲気である。

「やっぱり不安だったからかな」

洋介はそう結論づける。彼氏に襲われて不安だったから一人になるよりも安心出来たのだろう。例えばそれが絶交宣言をした相手でも。

「……そろそろいいかな」

洋介はそう呟くと部屋に向かう。自分の部屋なのにノックをするのが、洋介にとっては変な感覚だった。

「おーい、もういいか？」

「うん。着替えたよ」

その返事を聞くと洋介は特に何も気にすることなく部屋に入る。大丈夫という返事を受けて入るのだから当然だろう。

だが洋介が部屋に入るとそこには着替え途中の瞳がいた。

「いやーん、エッチい」

「なっ!？」

洋介の目の前には下はジーンズを履いているものの、上半身が下着姿の瞳がいた。シャツは手に持ったままで未だ着ていないようである。

絶句し、固まってしまう洋介を瞳は悪戯そうな顔で見つめている。そして洋介をからかったことに満足したのか何事もなかったかのようにシャツを着始める。

「こうしてお世話になっちゃったからサービスしとかないとね」

明るくそう言いながら瞳は着替えを今度こそ完了させる。

その一方で目の前で生着替えを見せられた洋介は固まったままである。

「ちよつと洋介には刺激が強すぎたかな？」

瞳はそう言うのと微笑みながら洋介の頬を突く。その感覚に我を取り戻した洋介は一気に顔を真っ赤にしてしまう。

「お、お前！ 何やってるんだよ！」

「何って、洋介の目の保養？」

「目の保養って……。お前そんなことしてるから勘違いしたやつが襲ってくるんじゃないのか？」

洋介は呆れた顔になってしまう。男をそんな風にかからええ、気があるんだとか誘ってるのかとか勘違いしてしまうであろう。洋介は瞳の行動に危うさを感じてしまう。

「こんなこと……洋介にしかないよ……」

「えっ？」

「助けてくれて嬉しかった。本当は私、あそこで座ってる間は不安だった。……怖かった」

「瞳……」

「家に帰ってもこのままだと大事になりそうで怖かった。当たり前だよ。娘が乱れた格好で帰って来るんだから」

「……」

「でも私はもう忘れたかったの。だから誰の所にも行けなかった。それで途方に暮れてた時に洋介がぶつかってきたの」

瞳の独白は続く。洋介も余計な口は挟まないで話を聞くことにした。

「不思議だよ。誰にもそんなこと言いたくないはずだったのに洋



介にはするりと言えちゃうんだもん。……勢いで言っちゃったころもあるけど」

「……」

「それで洋介が力になってくれるって言った時、私すごい嬉しくて……。気が付いたら洋介を喜ばせてあげたいって思っちゃって。それでさつきみたいなことを……」

「そうだったのか……」

瞳の独白が終わると洋介は自分の考えが間違っていることに気が付いた。

瞳は強がっていただけなのだ。何事もないように振る舞うその中で実は必死に不安や恐怖と闘っていたのだ。

そう気付くと洋介はさつきまでの態度は失礼だったなと反省してしまう。瞳が明るく振る舞っているためつい洋介も配慮に欠けてしまっていた。

「変なこと言ってごめんな。でもやっぱり男の前ではあまりあんなことはしない方がいい」

「でも私、洋介に何かお礼がしたくって……」

「そんなのいいって。困ってたり苦しんでたりしたら助けるのは当たり前だろ」

「洋介……」

その瞬間、瞳の眼から涙が零れ落ちる。前にあれだけ辛く当たってしまったというのにこうして助けてくれる洋介に瞳は感謝の念で一杯だった。

「でも何かお礼しないと気が済まないよ」

「今は自分のことだけ考えてればいいんだって」

「……うん」

洋介の優しさに触れた瞳は穏やかに頷いた。瞳に配慮してくれている洋介の言葉を遮ってお礼などとまだ言うのは違うと思ったのだろう。

そうしてしばらく静かな落ち着いた時間を過ごしていたが、い

つまでもそうしているわけにもいかない。そう知らせるかのように瞳の携帯が鳴った。

「あつ、お母さんからだ……」

どうやら瞳の母からのメールだったらしく瞳は文面を読んで、何やら返信を打っている。そして返信し終わったのか携帯を鞆にしまい、顔を上げる。

「おばさんからだろ？ 帰って来いって？」

「うっん。うちは割りと理解あるからそこまでうるさくないよ。ただどこにいるのかとかいつ頃帰ってくるのかは知らせないといけないけど」

「そうなんだ」

「それじゃ迷惑かかるといけないし、もう帰るね」

瞳はそう言うつと鞆を持って帰る準備をし始める。どうやら母にも今から帰ると連絡したのだろう。

「ああ、隣だけど送ってくよ」

「……本当に何から何までありがとうね」

「何言ってるんだ。幼馴染だしこのぐらい当たり前だろう」

「……幼馴染か……」

「うん？ 何か言った？」

「うっん、何でもない」

瞳は洋介の返事に不満そうな顔をしたが、それも一瞬のことですぐに笑顔に戻る。洋介は瞳の様子に疑問を持ったものの、特に気にせず瞳を伴って玄関まで歩いていく。

「洋介、本当に今日はありがとう。洋介のおかげで助かった」

「いや、そんなたいしたことはしてないよ」

「私にとつてはたいしたことだったの」

瞳は靴を履きながら洋介にもう何度目かわからないお礼を言う。洋介は感謝され過ぎて逆に恐縮している始末である。

「まあ、とりあえず元気が出たみたいでよかった」

「うん、元気出たよ。……でももっと元気になりたいから一つだけ

お願いしてもいい？」

「お願い？」

「そう、お願い」

瞳は少し俯きながら辛そうな顔をしている。洋介はそんな瞳の心境が全くわからないので、黙って先を促す。

「この前私すごい酷いこと言っちゃったよね。そんなこと言っておいて今更何だっっていうことなんだけど……」

「ああ、あれか」

洋介は以前瞳に言われた絶交宣言を思い出す。今、目の前の瞳よりももう少し背伸びした大人なキヤラを作り、冷たい接し方であり馴れ馴れしくすると言われた時には流石の洋介も腹が立った。だが今更それを蒸し返して何か言うほど洋介は空気の読めない男ではない。洋介は大丈夫だからと瞳を安心させ、続きを話せる雰囲気を作る。

「怒るかもしれないけど、あの言葉を取り消してもいいかな？」

「前みたいな関係に戻ろうってことか？」

「ううん、それ以前も私って洋介に酷いこと言ったりしてたから。」

「……だから新しい関係になりたいなって」

「新しい関係？」

瞳の言いたいことがよく分からない洋介は首をしきりに傾げる。瞳自身も上手く言葉に出来ないようで四苦八苦している。

「うん。……そうだね、例えば小さい頃みたいな仲のいい関係……かな」

「要するに仲良くしようってことだな？」

「そう。せっかく幼馴染なんだから仲良くしたいなって。まあ、私が言えた義理じゃないんだけど」

そう言って瞳は苦笑する。自ら関係を壊すようなことをしたのに、その張本人が仲良くしようと言ってくるのだから確かに都合のいい話ではある。

「いいよ。俺だって仲が悪いよりも良い方にこしたことはないんだ

から」

だが洋介は笑顔で瞳の願いを聞き入れた。その洋介の言葉に瞳はまず驚きの表情に、そして次には零れんばかりの笑顔になった。嬉しさが爆発したのか瞳は洋介の手を握ってぶんぶん振り始める。

「ありがとう、ありがとう。洋介、私嬉しいよ」

「お、大袈裟だなあ」

「だって私あんなに酷いこと言ったのに……」

「もうそれはいいから」

「本当にごめんなさい……何で私あんなこと言っちゃったんだろう」  
しきりに過去の言動を悔いる瞳を見て、洋介も過去の自分の気持ちを振り返っていた。

絶交宣言をされた時には瞳への愛想が尽きたと思った。どうして瞳なんかを好きだと思ったのかと自分の心を疑いもした。

だがそれでも今日、道端で瞳が座り込んでいた時、洋介はそんなことには構わず瞳を助けた。そこに洋介は自分の瞳に対する本心を見つけたような気がした。

（あれだけ言われても結局嫌うことは出来なかったんだな……）

洋介は仮に今日瞳から言い出さなくても何かきっかけがあったら自分から仲直りをしようとしたかもしれないと思った。結局このような展開にはいずれたのだらう。

「もついいから。それよりも早く家に入った方がいいぞ」

「そうだよな。お母さんに今から帰るって言っちゃったもんなあ」

「仲直りしたんだからいつでも喋れるさ」

「うん。……それじゃ洋介、明日からは昔みたいに仲の良い幼なじみでよろしくね」

「ああ、分かった」

洋介がそう答えると瞳は満面の笑みで家に入っていく。扉が閉まり、瞳の姿が見えなくなるのを確認すると洋介も自宅へと入る。  
「仲直り出来たんだな……夢みたいだ」

洋介は玄関で一人そう呟く。

瞳の態度は最近の余所余所しいものから昔のような飾らない様子に戻っていた。それが洋介にはなお嬉しい。

瞳との仲直りが奈々美にどんな影響を与えるのか。そんなことには今は考えが回らず、洋介は幼なじみとの仲直りの満足に浸るのだった。

## 第九章

瞳と洋介の仲直りが実現した次の日、洋介は朝食を食べようと入ったキッチンで想像もしていない光景を目の当たりにしていた。

「あつ、洋介。おはよう！」

洋介に元気よく挨拶をする一人の少女。それは瞳だった。キッチンにあるテーブルでコーヒーを優雅に飲んでいる。

洋介はどういうことと今度は母親に顔を向けた。

「瞳ちゃん、洋介と一緒に学校行きたいんだって。それであんたが起きてくるのを待ってたのよ」

「一緒に学校に行く？ 何で？」

洋介は疑問の表情をして首を傾げる。確かに仲直りはしたが、洋介には奈々美という彼女がいる。その彼女を差し置いて瞳と登校など出来るわけがない。洋介は却下しようとした。

だが洋介の表情から次に出てくる言葉を読んだのか瞳はテーブルを離れて洋介の側に寄る。

「洋介、ちよつとこつち来て」

「お、おい、俺は……」

「いいから」

瞳は洋介の言葉を遮って洋介をキッチンの外へ連れ出す。突然腕を掴まれて引つ張られた洋介は瞳の強引な行動に驚き、それ以上何も言えない。完全に瞳のペースであった。

「洋介、私昨日彼氏達に襲われたって言ったよね？」

洋介を廊下に連れ出して洋介に向き直った瞳はそう話し出した。瞳のペースに巻き込まれている洋介は文句を言うことも忘れて瞳の言葉に頷く。

「そのせいか分からないけど一人で外を出歩くと……不安なのよ」

「……そうか」

「だから……悪いんだけどこんなこと洋介にしか頼めないの。お願い

い、私と一緒に学校まで行ってくれないかな？」

「……」

瞳の要請に洋介は悩んでしまう。今の洋介には奈々美という彼女がいる。その奈々美を差し置いて他の女の子と、それもかつて洋介が想いを寄せた相手、瞳であるとなれば奈々美にいらぬ心配を与えかねない。

だが瞳がこうして自分を頼ってきている以上、それを放って置くこともまた洋介にとっては出来ない。まさに板ばさみ状態である。洋介は様々な考えが頭を巡って身動きが取れなくなってしまった。

「……駄目かな？」

悩む洋介に対して瞳は不安げな顔つきでそう尋ねる。これは強力だった。そんな瞳の仕種に洋介はこのまま放っておけないという使命感を感じてしまった。

「分かったよ。一緒に行くよ」

「ホントっ！？　ありがとう洋介！」

「うおっ、おい抱き付くなよ」

結局承諾した洋介に瞳は嬉しそうに抱き付く。その柔らかい感触に洋介は慌てて瞳を振り払う。その顔は真っ赤になっており、瞳には洋介の心境は丸分かりであった。

「柔らかかった？」

「う、うるさい！　準備してくるから待ってる！」

瞳にからかわれ洋介は顔を更に赤くしてキッチンへと入っていく。そんな洋介の様子に満足したのか瞳は洋介の部屋へと向かい、洋介の部屋で待機することにした。勝手知ったる幼馴染の家である。仮に誰かに見つかったても何にも問題はない。瞳は堂々と二階へと上がり、洋介の部屋に入る。

「洋介の部屋……洋介がここに帰ってくるまで十分はあるはず……」

瞳は息を荒くしながらも冷静に洋介の行動を計算する。洋介は着替えよりも朝食を優先したのか寝間着の格好でキッチンへと現れた。そのため食事を終えればここへと戻ってくる。その短い時間に気を

付けながら瞳はこの好機を逃すまいと手を制服のスカートの中に差し入れて下着を脱ぎ始める。

「これをベッドの下に入れてと……」

瞳は脱いだ下着を洋介のベッドの下に投げ入れた。そして次には鞆から取り出した予備の下着を装着する。

「まあ、こうしておけば洋介へのプレゼントにもなるし、上手いけば……」

瞳は怪しい眼光でベッドの下を見つめる。そして今度は鞆の中から瞳のトレードマークであるポニーテールを纏めるリボンを取り出してそれをベッドの上に投げる。

「とりあえずすぐには洋介に気付かれないようにしないと……」

瞳はそう言うのと鞆をその上に置いてリボンを隠した。これで洋介が下校するまでは隠せる。やるべきことを済ました瞳は一つ息を吐くと鞆の横に腰掛けた。

「いつもここで洋介が寝てるのよね……。どうしてだろう……。そう思うだけでドキドキしてくる」

瞳はともすればベッドに顔を押し付けてその染み付いた洋介の匂いを嗅ぎたい衝動に駆られた。しかしいつ洋介が戻ってくるかわからない。瞳はその恐れから湧き上がった衝動に身を任すことは避けた。

「やっぱり好きになっちゃったんだよね……」

瞳はそう独白を続けながらベッドのシーツを人差し指で弄る。そして制服が皺になることも厭わずにベッドに寝転がった。

「今思うともしかしたら昔から好きだったのかも知れない。それが照れくさかったから逆にあんなに避けちゃったのかなあ……」

瞳は過去の自分を思い返して新たな発見をしたような気がした。今の自分だからこそ分かる昔の思い。それを知った瞳は無性に悔しい思いが込み上げてくるのを感じた。

「しまったなあ……。好きって素直に認められたらもつと前から洋介と一緒にいられたのに」



瞳は過去の自分を叱ってやりたかった。あんなに洋介に対して酷い態度を取り続けたことは間違いなくマイナス要因だった。それをこれから挽回していかないといけない。余計なことをしたもんだとため息をついてしまう。

「とりあえずまずはあの女をどうにかしないといけないわね。小山田菜々美だったっけ？」

それまで物思いに耽っていた瞳の眼光が菜々美の名前を出した瞬間、鋭く光る。まさにその目は獲物を見つけた狩猟者の目だった。自分に立ち塞がる敵は全て排除するという決意がその目には込められている。

「まあ、それでも直接何か危害を加えちゃ駄目ね。そしてあっちの方から動いてもらわないと」

そのために工作をしたのだと瞳は視線をベッドの下に向ける。これで菜々美が疑心暗鬼に囚われてくれれば重畳と期待を込めて自らの下着に軽く拝む。よくよく見れば滑稽な姿である。

瞳がそのように工作をしていると階段を昇る音が聞こえてきた。恐らく洋介であろう。瞳はすぐさま立ち上がって本棚へと向かう。そして適当なマンガを一冊見繕い、それを持つと再びベッドに腰掛ける。その瞬間、洋介がドアを開いて部屋の中へと入ってきた。

「おっ、ここにいたのか。どこ行ったかと思ったぞ」

「ごめん、勝手に入ってる。それにマンガも借りてまーす」

「自由だな……。まあいいけど」

洋介は勝手気ままな瞳の行動に呆れながらも特に小言も言うことなく筆笥へと向かう。そしてカッターシャツとTシャツを取り出すと瞳の方へと顔を向ける。

「なあ、俺着替えるんだけど」

「うん、どうぞ」

「いや、部屋から出てもらいたいんだが……」

「私なら気にしないよ。今、いい所だから読んでたいの」

「そっすか……」

これは何を言っても無駄だと悟った洋介はそのまま寝間着を脱いで着替えを始める。その瞬間、マンガに向けていた瞳の視線は洋介へと素早く移った。洋介に悟られぬようベッドに横たわり、マンガで視線を隠しながらチラチラと着替えを凝視する。

「ああ、私変態だ……」

小さくそう呟く瞳はその時だけ覗き魔の気持ちがあったような気がした。ただ違うのは誰でもいい彼らとは違い自分は洋介しか駄目だということである。覗き魔の醜い欲望とは違い自分ののはあくまで純粋な愛ゆえの行為。瞳はそう自己弁護しながら覗きを続行する。その何も見逃さないという目つきは純粋という言葉が似合わない程ギラついていた。

「小山田菜々美もまだここまで見たことはないでしょ。洋介の初脱衣シーンは私のものよ……。はっ、でもあの子遊んでそうだからもう洋介を襲っちゃってるかも……」

ぶつぶつ呟いている瞳は洋介が見つめていることに全く気が付いていない。洋介は微かに聞こえてくる声に反応して瞳へと視線を向けていたのだった。

（瞳ってこんなキャラだったか？）

一人で呟いては一喜一憂し、その場で悶えたりにやけたりしている姿は洋介が知っている瞳の姿ではなかった。

洋介が知っている瞳は明るい少女ではあったが、こんなハイな子ではない。そして中学校終わりあたりから高校にかけて少し大人ぶったキャラを作っていたが、こんな姿はやはり見たことはない。新たなキャラの出現だった。

「おい……何ぶつくさ独り言言ってるんだ？」

「えっ？ な、何でもないよ……？」

初めて洋介が自分を見ていることに気が付いた瞳は如何にも怪しい態度で誤魔化そうとする。洋介としては色々突っ込みたいところではあったが、貴重な朝の時間を無駄に費やすことは出来ない。洋介はそれで納得したふりをして手早く着替えを済まし、登校の準備

を続ける。

「時間は……まだ余裕あるな。いったい家には何時から来てたの？」

「洋介の起きてくる十五分前ぐらいかな」

「それで俺が起きてくるまでコーヒー飲んでたってわけか」

「うん、それに久しぶりにおばさんと話して楽しかったわよ」

「……母さん変なこと言っただろうな？」

「さあ、どうでしょう？」

瞳はすました笑みを作りながら洋介をからかう。その様子は昨日に比べて更に元気になったように見える。

（だけど確かにダメージは残ってるんだよね……）

洋介はそう考え出すと瞳が健気に思えてならない。力になってやらなくてはと改めて使命感に燃える。

「そんじゃ準備も整ったし、行くか」

「うん。行こう」

二人は連れ立って玄関へと向かう。時間はちょうどいつも家を出る時間。思わぬ事態が起こったが、いつもどおりに家を出るあたりが洋介らしい。

「二人で学校に行くのってどれぐらいぶりだろうね」

「中学の最初あたりじゃないか？ お前が一緒に行くのを嫌がったから」

「そ、そうだった？ 私そんなこと言っちゃった？」

「ああ、はつきり断られた」

（何やってくれちゃったんのよ、過去の私！）

瞳は過去の自分にまたまた文句をつける。確かに自分がやったこととはいえ、どれだけ不安材料を準備してきたのかともう呆れるしかなかった。

しかし瞳はそのままでは終わらない。過去の失策を埋めるべく積極攻勢に出る。

「それじゃ行こう、洋介！」

「お、おいっ！ 腕を絡ませるな」

「どうして？ もし私が連れ去られそうになったらどうするの？」

「その時も何とかしてやるから。それよりも……む、胸が……」

玄関を出るなり洋介の腕にしがみついた瞳は自慢の胸を洋介の腕に強く押し付ける。何のことはない。瞳の挽回策は色仕掛けであった。

しかし恐らく多くの男に有効であろうこの策は未だ初な洋介には逆効果であった。洋介は顔を真っ赤にし、辺りを忙しく見回しながら何とか瞳の体を離そうと奮闘している。

「何でそんなに暴れるのよ。嬉しいでしょ？ 気持ちいいでしょ？」

「そ、そういう問題じゃない！」

「あつ……」

洋介はそう一喝すると腕を瞳から引き離す。

（こ、これじゃ奈々美が二人に増えたみたいだ……）

洋介は朝からハイテンションな瞳に奈々美がオーバーラップしたように見えた。二人は全く違う印象の女の子だと洋介は考えていたが、意外にそっくりだということが身を以って分かった。

そうなると次に瞳が起こすであろう行動も予測がつく。恐らく

グチグチと嫌味を呟きながら後ろからついてくるであろう。

洋介はその機先を制しようと直ぐさまフォローに入る。

「ごめんな。やっぱり俺、あんなの恥ずかし過ぎて……」

「あつ……うん。私も少し悪のりしすぎちゃった。ごめんなさい」

こういう時は素直に謝るに限る。洋介は下手に強がったり、相手の非を訴えるようなことは泥沼だとよく分かっていた。実際に奈々美でそういう事態を招いたことがあるからだ。これが果たして奈々美や瞳限定なのか広く使えるのかは分からないが、とにかく洋介は場を収めることに成功した。

「それじゃ今度こそ行こうか」

「うん……」

二人は改めて登校を開始する。過剰に近付くことはなく、かといって過剰に離れることもなく二人は並んで歩いていく。

歩き始めてからの瞳は先程の様子が嘘のように静かにしている。洋介と喋りながら歩いてはいるが、大人しく騒がず歩いている。

そうなると元々が美人なだけにまた違った魅力が瞳から滲み出す。そんな瞳を見て、洋介は鼓動が速くなるのを感じていた。

（しかし大人しくしているとガラッと印象が変わるな。さっきまでは可愛い感じだったのに今はどっちかという綺麗だもんな）

自分で気付かない内に洋介を魅了してしまっている瞳はとにかく大人しくしようと努める。これ以上洋介の心象を悪くしたくないという消極策だったが、実際には効果覲面であった。

そしてそれに気付いてない故に調子に乗った暴走をしてしまう恐れもない。瞳は知らず知らずの内に下手に考えるよりも効果的な作戦を実行していた。

互いに口数は少なくなったが、それでもいい雰囲気のまま二人は登校する。まるで幼い頃に戻ったような仲のいい光景なのだが、その時間も長くは続かなかった。

「あつ、やばっ」

「ちょ、ちよつと急にどうしたの？」

（そついや奈々美のことすっかり忘れてた）

洋介が思い出したのは奈々美との登校の約束だった。いきなり朝から不測の事態が起こったのですっかり忘れてしまっていたのだった。

洋介は時計を見る。隣に瞳と一緒に歩いている分、時間はいつもより遅めになっている。それは即ち先に奈々美が待っていることだった。

（このままだと奈々美に誤解されかねないな……）

洋介は背筋に冷や汗が流れるのを感じた。今までの経緯から他の女の子ならともかく瞳と登校というのは間違いなく奈々美の疑心を煽るだろう。そうなった後はもう想像もつかない。ただ積極的な性格だから、恐らく直接糾弾されるだろう。

「ひ、瞳！ あっちから行かないか？」

怯えた洋介は瞳に進路変更を提案する。奈々美と瞳を鉢合わせるのは何としても避けたかった。

「何で？ こっちのが近いじゃない。このままでいいでしょ」

しかし洋介の提案を瞳は即座に却下する。当たり前だろう。時間のない朝にわざわざ遠回りをする道理などない。瞳は洋介の手を掴んでそのままの道へと進み始める。

「ひ、瞳！ こっちの道でいいから。いいから手は離して！」

「そんなこと言って置き去りにされたら堪らないわ。離さない」

「ちよつ、おまつ」

瞳は尚も洋介の手を掴んだまま突き進む。その力は凄まじく、洋介はなされるがままに連れていかれる。こうなっては洋介に出来ることは奈々美が遅れてくるのを願うだけだった。

「ああ……あの角を曲がると……ああ」

「何呻いてるの？」

「俺の命運が今まさに決まろうとしているのだよ……」

「はっ？」

全く事情が飲み込めない瞳は疑問の表情を隠せない。そして洋介の嘆くところが分からないまま運命の角を曲がる。

（ええいつ、ままよ！）

洋介を意を決して瞳に引きずられるのではなく自ら足を踏み出す。その視界には。

「あ、あれっ？」

誰もいなかった。いつもの待ち合わせ場所には奈々美の姿はなく道が広がるだけである。拍子抜けした洋介は思わず腰砕けになってしまう。

「ちよつ、洋介！ 重いつ！」

「あ、ああ。すまん」

洋介は直ぐさま力を入れ直し瞳に加えてしまった負荷を取り払う。

そんな洋介の挙動により一層の不審さを感じた瞳はおもむろに

洋介の頭を掴む。

「えっ？　ちよつと瞳さん？」

「さつきから洋介おかしいよ。熱でもあるんじゃない？」

「えっ？　何を……うわあっ！？」

洋介が戸惑うのに構わず瞳は洋介の額に自らの額をつける。眼前に瞳のアップが迫った洋介は一瞬の内に顔を紅潮させてしまう。

「ほら、やつぱり熱い」

「いや、違う。これはお前が……」

「洋介！　ごめんね、ちよつと遅れちゃった！」

何ともない朝の挨拶だが、洋介にとって不穏な声が聞こえてきた。待ち合わせ場所に駆け込んでくる一人の少女。それは言うまでもなく奈々美だった。走っているため視界にはつきりと瞳の姿が見えていないのか特に不審な様子はない。だが、それも直ぐに自分の思い描いた光景になるだろう。洋介はそう覚悟を決めた。

「はあはあ……待たせちゃってごめんね。それじゃ行こう……か？」  
息を切らしながら近付いてきた奈々美は洋介に寄り添うように立つ、それどころか額を押し付けている瞳にようやく気が付いた。まるで見知らぬ世界に飛び込んでしまったかのように目を剥く奈々美。驚きのあまりそれ以上言葉が出てこないようである。

「な、奈々美……これは、その……違うんだ」

「洋介。その言葉は怪しすぎだよ」

一瞬にして顔を紅潮から蒼白へと変化させた洋介を不憫に思ったのか瞳は一先ず額を洋介から離す。それでも寄り添うように洋介の隣に立つことはやめない。うろたえている洋介はそんなことにも気が付かない。

「……洋介。隣にいるのは誰なのかな？」

「お、俺の幼馴染の瞳だよ……？」

「うん、そんなことは今更言われなくても知ってるよ。私が聞いたのはそうじゃなくて……」

「そうじゃなくて……？」

洋介は思わず生唾を飲み込む。未だこんな奈々美は見たことがない。それだけに恐ろしくて堪らない。洋介はまるで破裂寸前の風船を押し付けられているような心地であった。

「私が聞きたいのはその子が友達かそれとも……浮気相手かってことだよ」

「ひいっ！」

そう静かに凄むと奈々美は洋介の胸倉を掴む。それだけで洋介は竦みあがってしまう。下手な不良に絡まれるよりも余程怖い。洋介は女の恐ろしさを身を以って実感していた。

「さあ、どうなの？ 洋介！」

「事情も詳しく聞かない内からそんなに洋介を脅かすなんて酷い彼女ね」

「……河野さんは黙ってて。これは私達の問題なの」

口を挟んできた瞳にも奈々美は容赦しない。冷たい視線を投げかけ、蚊帳の外へと追いやるうとする。だが瞳も負けていない。奈々美の腕を掴むと洋介の胸倉から奈々美の手を引き離す。

「何するのよっ！」

「少しは落ち着いたら？ 洋介が怖がつてるじゃない」

「うるさい！ 泥棒猫の癖して何説教してんのよ！」

「洋介のこと信用してないんだ。洋介が可哀そうね」

「信用してるわよ！」

「だったら別にそこまで怒ることないんじゃない？」

「うっううううっうっ！」

奈々美は齒噛みして口惜しそうに唸る。興奮しきった奈々美は到底瞳の敵ではなかった。そんな女二人の争いに洋介は黙って見ているしかなくただ立ち尽くしている。

（情けねえな俺……）

そうは思っても余計な口を挟もうものなら更にこの場を加熱させるだけである。ここは静観するが上策と洋介は成り行きを見守る。

「とにかくっ！ 洋介の横からどいてよ！」



「痛っ！……乱暴ね。何も突き飛ばすことないじゃない」

「うるさい！早く消えてよ！」

「はあ……埒が明かないわね。どうせこのままじゃ遅刻だし、それに小山田さんも大人しく授業受けれるようには見えないし、今日はもうサボっちゃいましょ」

「はあ？サボるってお前、何を考えてるんだよ」

瞳の提案に洋介は呆れた顔をする。奈々美も全く意図するところが見えず、すっきりしない表情である。

「ホントに何考えてるの？サボりたいならあんた一人でサボつてれば？」

「今の私と洋介の状況。詳しく知りたくないの？」

「……知りたい」

「だから学校なんかサボって洋介の家でゆっくり説明しようってことよ」

瞳の説明に奈々美は成る程といった様子だが、洋介は瞳の言葉の中に出てきた自分の家というところに納得いつていない様子である。

だが二人はそんな洋介など構いなしに話を続けていく。

「でも何で洋介の家なの？ここでもいいでしょ」

奈々美はここだけが分からないといった風に質問をする。確かに洋介と瞳が二人で朝から仲良く登校している事情などここでも説明出来る。問題など何もないはず。奈々美はそう思ったが、瞳はそれは駄目だと首を横に振る。

「また小山田さんに喚かれたらいい晒しものになっちゃう。私はそんなの嫌」

「うっ……」

瞳の言は真実をついているだけに奈々美は何も言い返せない。徐々に冷静になってきた奈々美はさっきまでの自分の様子を思い返して顔を赤らめてしまう。

明確な返事こそないが、納得したと判断した瞳は直ぐに行動に

移る。体を洋介宅方面へと向けると、未だ一人で話の展開についてこれていない洋介の手を握る。

「さあ、帰るわよ。目指すは洋介の部屋！」

「よ、洋介の部屋かあ……今度こそしつかりしないと」

「おい、こらっ。部屋の主は許可してないぞって、おわあっ!？」

大勢は決したが未だ渋る洋介は抗議も虚しく無理矢理に引つ張られる。片手は瞳に、そしてもう片方にもいつの間にか奈々美がしがみついている。見た目は両手に華だが本人は困惑してしまっている。

「家に戻ったら母さんに何て説明するんだよ」

「ああ、おばさんなら私達が出て少ししたら出掛けるらしいよ。朝聞いたんだ。もう家出るくらいぐらいじゃない？」

「くっ……」

「ふふん、他に何かある？」

「……はあ」

どんな策を持ち出しても看破してしまいそうな瞳の前に洋介はとうとう屈した。

瞳と奈々美はこの瞬間だけは意見を一致させて行動を共にする。目指せ洋介宅。三人は学校を尻目に道をひたすら突き進んでいくのだった。

## 第十章

高梨家の前で不審な光景が繰り広げられている。本来登校しているはずの時間帯に家へと入っていく三人の学生。それも男一人に女二人という何とも怪しい組み合わせであるから余計に不審だった。

そう聞くと男が女を家に連れ込んでいる様に感じるが、この例の場合は女二人に引つ張られてきた拳句に急かされてドアの鍵を開けている。明らかに男の方が無理矢理連れてこられた観である。

「ほら、開いたぞ」

その連れてこられた男である洋介はうんざりした表情で開錠の旨を報告する。全く本人が望んでいない展開だけに傍目から見れば羨ましい限りの状況でも洋介は何も喜びを感じていない。

「お邪魔します」

「お邪魔します。もうおばさん出掛けちゃったかな？」

憂鬱そうな洋介とは正反対に瞳と奈々美は楽しみといった様子で洋介の家へと上がっていく。先程までいがみ合っていたとは思えない程平和な様子だけが今のところ洋介を慰めている。しかしその平和も長続きしないであろうことははっきりしているので虚しい慰めではあったが。

相変わらず陽気な瞳と奈々美が洋介を連れていく構図で家の中も進んでいく。階段を上がり、洋介の部屋の前まで来ると又も奈々美はやや緊張をし始める。それを敏感に察したのはそれを事前に見ている洋介ではなく瞳であった。

「どうしたの？ 男の部屋は初めて？」

「うっ……悪い？」

「別に。だけど入りたくないなら入らなくてもいいのよ」

「だ、誰もそんなこと言っていないでしょ！」

「それじゃ入りましょ」

「あっ！」

瞳は躊躇している奈々美の手を掴み、部屋の中に引っ張り入れた。あまりに無理矢理な瞳の行動に奈々美はバランスを崩してしまう。

「ちょ、ちよつと！ 危ないじゃない！」

奈々美は勉強机の椅子に手について、ようやく体勢を整えた。そしてすぐさま瞳に対して抗議を開始する。

だが、奈々美を部屋に放り込んだ瞳は心外だと言わんばかりに不満そうな顔を奈々美に向ける。

「踏ん切りつかなさそうだったから手伝ってあげたんじゃない。どう？ 洋介の部屋に入った感想は」

瞳の言葉でようやく自分は洋介の部屋に入ったのだと実感した奈々美は部屋をぐるっと見回す。

「これが洋介の部屋……」

奈々美の目に洋介の部屋の様子が次々と映る。ベッドに勉強机、本棚に筆筒。それら全てが洋介の生活の一部だと思いと奈々美は躊躇していた先程とは違って興味深そうにじっくり観察する。

（意外に片付いてるんだ……）

まず奈々美が洋介の部屋に対して持った感想はそれだった。高校生の男子の部屋にしては綺麗に片付いたその部屋は奈々美の想像とは大いに異なっていた。奈々美は感慨深いように洋介の部屋に見入っている。

奈々美が部屋を観察している間に洋介も部屋に入ってきた。自分の椅子には奈々美が手について呆けているため洋介は仕方なくベッドに腰掛ける。そしてそれに倣うように瞳も洋介の隣に座った。

「おい、小山田さん？ いつまでも見入ってないでこっち来なよ。話聞きたいんじゃないの？」

「はっ！？ あ、当たり前でしょ！」

瞳の言葉で我に返った奈々美は急いで洋介の隣に座りに来る。こうしてベッドに三人並んで座る格好になったが、ベッドに三人並んで座るのは話がし辛い。洋介はそう判断し、立ち上がったテーブルを出そうとする。

「ちょっと洋介！ 私が座ると同時に何でもくのよ」

「はあ？ いや、テーブル出そうと思って」

「本当に？」

「本当だつて！」

あまりにしつこく詮索してくる奈々美に洋介も思わず語気が強まる。いちいち自分の行動に理由を求められてはストレスが溜まる。

洋介は先程からの奈々美の行動や言動に苛立ちを隠せなくなっていた。

「ほら、テーブル出したからここで話し合おう」

「うん、ありがとう。三人一直線に並んでたら話し辛いもんね」

瞳はそう洋介の考えに同調すると洋介の正面に座る。奈々美も空いている場所に座り、こうしてようやく話し合う準備が出来上がった。

「それじゃ訳を話してもらおうかな。私が納得いくようにしっかりと話してよね」

「わかってるわよ。でも、洋介が話すと言いつ訳がましく聞こえるかもしれないから私が話すわ」

「おい、言いつ訳がましいって何だよ」

「洋介はとりあえず黙つてて！」

「……はい」

瞳から強く言いつけられた洋介は不甲斐なくもあつさり引き下がつてしまう。それほど今の瞳は真剣になっていた。だが、その真剣さは洋介が考えている方向とは別な方向へと向かっていた。

（ここで上手くやれば二人の仲は険悪になる）

瞳の真剣さは二人の仲を裂くことに注がれていた。洋介を奪い取るための策略。これからする説明は全てその策略のために用意された小道具だった。

「それじゃ話すわよ。心の準備はいい？」

「いいに決まつてるでしょ。何にもないっていう説明を聞くんだから」

「わかった。じゃあ、始めるわよ」

瞳はそう言つとまずは一度深呼吸をする。奈々美は一言一句も聞き逃さないとはかりに瞳を見据える。こうして異常な緊張感が場を包む中、説明が始まるのだった。

## 第十一章

「なるほどね……そういうことがあったんだ」

一通り事情を聞いた奈々美はそう感想を漏らす。彼氏に襲われたことから何から何まで包み隠さず話した瞳の説明は要領を得やすいように纏められており、奈々美も事情を直ぐに飲み込めた。確かに止むを得ないと客観的には言える。

しかし、感情としては奈々美は納得出来ていなかった。色々突っ込みたいところがあるのである。そして話が終わった今、奈々美は瞳に質問をぶつけようと考えを頭の中で纏める。

（このまま納得しちゃったら洋介はずっとこの女に取られかねない。何とかしないと……）

奈々美が納得出来ない要因は全てこの点に注がれていた。納得してしまった場合なし崩しの洋介を取られてしまうかもしれないという恐れである。決して考えられないことではない。

奈々美はそんな可能性を潰すために必死に頭を働かせ、瞳が洋介から離れるように話を持っていくとする。相手が相手だけに必死である。

「でもさあ、別に一緒にいるのが洋介じゃなくてもいいんじゃない？ 男だから不安だったりするんじゃないの？」

奈々美はここが一番不審だと瞳に回答を求める。男に襲われたんだから男が二人きりで隣にいるのは不安じゃないのかという話である。

だが、そんな奈々美の考えが読み取れたのか瞳は迂闊なことはいえないと顔を引き締めて奈々美の質問に対処しようとする。

「でも話を打ち明けた唯一の人だったし、それに昔から知ってるから安心出来るのよ」

「そ、そうかもね……」

奈々美は幼馴染という説得力の前に二の句が継げない。更に昔か

ら人柄をよく知っているという瞳の言葉にジェラシーを感じるのも否めなかった。

「それに女の子と一緒にいたら、私のせいで犠牲になるかもしれない。それも防げるから最適な判断だと思うけど？」

「うぐぐぐ……」

更に根拠を並び立てる瞳の前に奈々美は完全に劣勢になっていた。言い返すことも出来ず、ただただ唸ることしか出来ない。このままではかえって奈々美公認で洋介を護衛として使えることになってしまふ。そうなっては非常に不味い。奈々美は焦り始めていた。

「何か反論はある？　ないならこれから洋介には一緒にいてもらおうと思うけど」

「……」

（何か閃け、私の頭脳よ！）

奈々美は黙ったまま、ただ頭をフル回転させることだけに徹する。早く反論をしないとこのまま結論として決定してしまう。そうなっては後から何か言っても彼女だからって洋介を拘束し過ぎなどと言われてしまふ。とにかく縋るような醜態では説得力は生み出せない。スマートにこの意見交換の場で決着をつけるしかないのである。

だが、そう分かっていてもなかなかいい考えは浮かんでこない。いや、それどころか焦っているために余計にその頭脳は鋭さを失っていた。

（やばいやばい。何にも浮かんでこない。このままじゃ……）

「ねえ、もういいでしょ？　反論ないんだから」

「ちよ、ちよっと待ってよ！　まだ誰もいないなんて……ううん？」

考えが行き詰まり、視線を忙しく動かしていた奈々美の目に不審な物が映った。瞳の後ろにあるベッド、その下に白い何かがあるのである。それは布のように奈々美には見えた。そして更にその布には奈々美は思い当たる節があった。

「うん？　どうしたの？」

瞳は不思議そうに奈々美を見つめる。反論を止め、それまで忙し



なく動かしていた視線を突然一点で止めたのだから確かに不審だった。しかしそれを仕掛けた本人の癖にそ知らぬふりをする辺りが実に食えない。瞳は心の中ではし済ましたりとほくそ笑んでいた。

そうと知らない奈々美は瞳の狙いどおり徐々にベッドへと体が近付いていつている。そしてとうとう我慢ならなくなったのか露骨に行動を開始する。

「ねえ、そのベッドの下に何か怪しい物があるんだけど見てもいい？」

奈々美は洋介にそう尋ねる。特にベッドの下に疚しいところがない洋介は何かあったつけと思いがながらも首を縦に振って肯定の意を表す。

許可を得た奈々美は解き放たれた猟犬の様にベッドの下へと手を突っ込む。そして件の怪しい布を掴むと一気に引つ張り出した。

「……ねえ、洋介。これ何？」

「はあ？ 何って……うおっ！ こ、これってパンツ！？」

「だよな？ しかも女の子の。どういうことかなあ？」

「し、知らない。俺は何も知らないぞ！」

思わぬ展開になった洋介は狼狽しながらも必死に無実を主張する。しかしそのうろたえぶりがますます奈々美に疑心を抱かせる。奈々美は冷たい表情のまま洋介にその下着を突きつける。

「これは私の下着ではありません。ではどうして彼女以外の下着がこの部屋にあるんでしょうか？」

「だから何も知らないんだって！」

「この部屋で下着が脱ぎ捨ててあるって時点で怪しいよね？ 何したの？」

「何もしてないよ……」

奈々美の表情はごく穏やかだが、それがかえって怖い。これならまだ激しく罵られた方が分かりやすくいい。こんな表情ではまるで心の奥底が見えなかった。それが洋介には恐ろしかった。そのために洋介は徐々に声が小さくなってしまふ。まるで蛇に睨まれた蛙

状態である。

そしてそんな恐ろしい状況に更に拍車をかける事態が巻き起こった。なんと横から瞳が出てきて奈々美から下着を引っ手繰ったのである。

「あつ、これ私のだ。ここにあつたんだ」

「えっ？」

横から下着を掠め取られた奈々美は呆氣にとられた表情で瞳を見る。しかしそれでもその可能性を考えていたのか呆氣にとられたのは一瞬で直ぐに表情を冷静で冷酷な笑みに変化させる。

「へえ、それ河野さんのだったんだ。どうしてこんな所で脱いだりしたの？」

「それは言えないわ。恥ずかしいから」

「へ、へえ……人様に言えないぐらい恥ずかしい理由があるんだ」

……

「そう。だから想像にお任せするわ」

瞳は肝心なところを曖昧にし、奈々美の疑心を煽り立てる。確かに洋介に喜んでもらおうと思っただけという理由は恥ずかしくて話せない。そういった意味では嘘は吐いていなかった。しかしそんな事情は瞳にしか分からず、一般的には怪しい淫らな想像しか出来なかった。

そして奈々美はその一般的な想像へと思考が向かっていた。あまりに衝撃的な瞳の言葉に顔を赤らめ、怒りに打ち震えている。もう冷静な顔をしてもらえないのは明らかだった。

とうとう火山が噴火するという事態を悟った洋介は瞳に文句を言えればいいのか、まずは奈々美に誤解だと言えいいのか分からず、ただあたふたしているだけであった。この場で最も可哀そうな人間といってもいいだろう。訳の分からぬまま浮気者に仕立て上げられてしまっているのだから。

だが、そんな可哀そうな人間に容赦なく追及の手は向かう。興奮した奈々美は瞳の言葉をすっかり信じ込み、洋介を厳しく睨みつけ

る。

「洋介？ やっぱ裏切ってたの？」

「何でそういう風に考えちゃんだよ……」

全く信用してもらえない洋介は悲しそうにうな垂れる。しかしその仕種も今の奈々美には恐れ入ったようにしか見えない。もう猜疑心は否応なく奈々美を支配していた。

そんな二人の様子を見て瞳は喜悦の笑みを隠し切れない。自分の策が思った以上に上手くいっている様は例えようがない程爽快なのであろう。このままいけば二人は大きな溝を開けることになる。そうなれば後は瞳の自由である。ゆるりゆるりと洋介の気持ちをこちらに向ければいい。

もはや勝利を確信した瞳だったが、ここでトドメとばかりに洋介に近付き、洋介の肩に手を乗せてしな垂れかかった。

「洋介は私に優しくしてくれたもんね。嬉しかったなあ」

「なっ……」

火に油を注ぐような瞳の行動に洋介は驚きを隠せない。このままではより一層奈々美の怒りが増してしまう。それを恐れた洋介は恐る恐る視線を瞳から奈々美へと移す。するとそこには鬼がいた。もはや怒りというよりも憎しみすら抱いたような鋭い目つきで奈々美は洋介を見据える。

そして奈々美は怒りや悔しさなど様々な感情のためにぶるぶる震える体を叱咤し、洋介の前に立つ。その威圧感の前に洋介は身動きすら出来ず、ただ奈々美を見上げることしか出来ない。

「な、奈々美……落ち着いて話を……」

「洋介の……馬鹿っ！ 最低！」

「ぐあっ！」

洋介の前に立った奈々美は怒りに任せて洋介の頬を拳で殴りつけた。平手ではないところが容赦出来る限界を超えていたことを如実に語っていた。殴りつけられた洋介は唇が切れたのか口の端に血を滲ませながら呆然としている。

洋介を殴りつけた奈々美は息も荒いまま、視線を横に移す。そこには未だ洋介に似た垂れかかっている瞳がいる。瞳を視界に映した瞬間、奈々美の形相は洋介に向けていたそれが生やさしく思える程憎しみに歪んだ。

だが、そんな形相で睨まれても瞳は全く臆することなく奈々美を見据える。挑戦的にすら見えるその態度に奈々美は辛抱堪らず、拳を振り上げた。

「死ねっ！ お前なんか死ねばいいのよっ！」

「きゃああああっ！」

瞳に対して奈々美の振るった拳は洋介を殴った時よりも更に苛烈だった。あまりの衝撃に瞳は洋介から引っぺがされて横倒しにされてしまっている。殴り飛ばされた瞳の頬にははっきり痕が付いてしまっている。おまけにこちらでも口のどこかを切ったのか血が唇から垂れてしまっている。

感情のままに二人を殴りつけた奈々美は息も荒く、その場に立ち尽くしている。暴力を振るって少し気が晴れたのか冷静さをやや取り戻したようであるが、それでもまだ瞳に対する憎しみは消えないのか横倒しにされたままの瞳の顔を足蹴にする。

「あはははははっ！ どう？ 痛い？ でも自業自得だから仕方ないよね。あはははははっ」

狂気に支配されたように奈々美は高笑いをしている。瞳の顔に足を乗せ、ぐりぐりと踏み付けているその様はまさに悪鬼そのものである。

奈々美に顔を踏み付けられている瞳はここにきてようやく苦悶の表情を顕わにする。その様子が奈々美にとって更に快感をもたらすのか高笑いはいますます大きくなる。

しかし高笑いもその直後、呆気なく消え去った。奈々美のあまりの所業にとうとう怒りを爆発させた洋介は奈々美の肩を掴み、奈々美の上半身を洋介の方へと向かせる。

「いい加減にしろよ……。人も話もちゃんと聞かないし、暴力も振

るう……。お前こそ最低じゃないか」

「洋介……」

奈々美は初めて見る洋介の本気の怒りに怯える。先程までの憎しみや怒りに支配された昂揚状態はすっかり醒め、今度は恐怖に体を震わせる。

だが、洋介はそんな神妙な様子の奈々美にも躊躇はしない。瞳の顔の上に足を乗せたままの奈々美を引っ張り、瞳からその体を離れさせる。

そしてそのまま奈々美を扉まで連れて来て、扉を開ける。無言ではあるが、何を言わんとしているか悟った奈々美はとうとう涙を流し始める。

「帰れよ……。もうお前なんか見たくもない」

「洋介！ そんな、酷すぎる！」

「どつちがだよ！ 確かに誤解させるような行動をとったことは悪かった。瞳も少し悪ふざけが過ぎた。それも悪かった。だけどだからって何も暴力を振るうことはないじゃないか！ それも女の子の顔を思いっきり殴りつけた上に足で踏むなんて……」

「あの女が悪いんだよ！ 私の洋介を盗ろうとするから……だからっ！」

「それだって俺を信じてくれれば何も問題ないだろう？ だけどお前はこうして俺を信じないで暴拳に走った……」

「だって……」

「もういい、帰ってくれ。そして……別れよう」

「！？」

洋介は奈々美にとって最も残酷な言葉を告げた。付き合ってたただ僅かな間しか経っていない。これから幸せな日々が続くんだと信じた奈々美の夢は今、儚くも消え去ろうとしていた。

それでも奈々美はそう簡単に諦めるわけにはいかない。みつともなくても構わないとばかりに泣きながら洋介に縋りつく。

「いやっ！ 別れるなんて嫌だよ！」

「駄目だ。そんな簡単に暴力を振るうような人と付き合いたくなくてない」

「いやああああ……。洋介え……。嘘だって、冗談だって言うてよお」

縫りつかれた上に泣きじゃくられると洋介も流石に良心が痛んだ。しかしそれでも洋介を信じようとせず、あくまで疑って掛かった態度と暴力を振るうという行動が許せないのも確かだった。洋介は必死にこれでいいんだと自分に言い聞かす。

「くっ……。ほら早く帰ってくれ」

本当はこんなことを言いたくない。それでも中途半端が一番良くないと洋介は心を鬼にして奈々美に帰るよう促す。しかし、奈々美は必死に洋介にしがみ付いて離れようとしない。

他方でこんな修羅場を見せ付けられている瞳は呆然とした表情を作っている。ここで喜びを表しては疑いが掛かる。ここが勝負所だと瞳は全力で名女優になりきる。自分はあくまで修羅場に巻き込まれた可哀そうな女だと演技をする。既に余裕をなくしている洋介だけに疑いを持つことは全くなく、瞳の作戦は思いどおりに実行されていた。

（早く退場しちゃえばいいのに。洋介も遠慮せずにもっときつく追出しちゃいなよ）

瞳が心の中でそう毒を吐いているとその願いどおりに洋介は奈々美を引きずって部屋から追い出した。そして素早くドアを閉めて、鍵をしてしまう。外からは奈々美の悲痛な泣き声とドアを激しく叩く音が聞こえてくる。

「開けてよっ！ 洋介、嘘でしょ！？ 本当に私を追い出す気なの？」

「嘘も何も俺はもう別れると言った筈だ。早く帰ってくれ」

「そんなあ……。謝るから、ちゃんと謝るから許してよお……」

激しくドアを叩いていた音は止み、泣き声だけが外から響いてくる。洋介は自分が酷いことをしていると良心の呵責に駆られたが、

それでも洋介はおるか瞳の、それも顔を殴りつけてその上踏みつけるといふ暴挙に及んだことは許しがたかった。洋介がここまでの決断に至ったのは勿論衝撃を受けたことで冷静さを欠いていることも影響しているだろうが、奈々美がまさかこんな行為をするとはというギャップも少なからず影響していた。

様々な要因が重なり、絶縁に等しい状態になった二人を見ていた瞳はここで自分まで嫌われるわけにはいかないと行動を起こす。洋介に近寄り、心配そうな表情を浮かべる。

「洋介……あの……大丈夫？」

「瞳……お前こそ顔の怪我、大丈夫か？」

「うん、でもこれは私が悪ふざけし過ぎたこともあるし……仕方ないかな」

「確かに悪ふざけが過ぎたかなとは思うけど、だからって殴るなんて……」

「ううん、私も悪かったんだよ。ごめんね、洋介。こんなことになっちゃって」

「瞳……。俺こそごめん。殴られる前に俺が止めればよかったんだ。なのに俺ときたら口も挟めないで……」

洋介は奈々美に向けていた表情とはまるで違う瞳を労わる優しい顔をしていた。瞳も本来ならば洋介につまみ出されて説教をされても当然なことをしていたわけだが、あまりにも奈々美の暴挙が酷かったのでその扱いは百八十度違うものになっていた。瞳が殊勝な態度を示していたことも影響しているのだろう。

二人がそう互いに謝りあっていると部屋の外から足音が聞こえた。どうやら奈々美が諦めて帰り始めたようである。洋介は一先ず奈々美が帰ってくれて安堵した。このままドアの前に居座り続けられてはまた酷いことを言ってしまうそうだった。

「洋介……小山田さん帰っちゃうよ。いいの？」

「ああ、それに今はまだ冷静になれる自信がないから」

「本当にごめんね。私が原因で別れることになっちゃって……」

「いや、お前のせいなんかじゃないよ。気にするな」

「洋介……ありがとう。洋介って優しいね」

「……全然優しくなんてないよ」

洋介はそう小さく呟く。現にたった今一時の怒りに駆られて奈々美を部屋からつまみ出してしまったばかりである。その上泣いて絶える奈々美に別れを一方的に告げてしまったのだから。

瞳は自己嫌悪に苦しむ洋介の頭を優しく撫でた。突然の行動に洋介は驚いて瞳を見るが、その優しさが堪らなくなったのか洋介は涙を流しながら頭を撫でられている。瞳はそんな洋介をあやす様に撫で続けた。

（これで洋介の心に占める私の存在はまたかなり大きくなった。作戦大成功ね）

瞳は表面上では洋介を労わり、優しい顔を崩さない。しかし内では陰険な策士の表情を浮かべていた。作戦は思いの外上手くいき、なんと二人を別れさせるといふ成果を得た。瞳はもし一人であつたら飛び上がりたい程の喜悦を感じていた。

（あとは洋介の心を奪っていくだけ。ゆるりゆるりとね）

思わずいやらしい笑みが浮かびそうになった瞳は洋介を優しく抱きしめた。洋介もまたそれを気にする余裕すらないのか涙を流し続けている。

全てが上手くいき、最高の展開が目の前にお膳立てされた瞳は洋介を抱きしめながら背中を擦る。据え膳は遠慮なく頂かないとね。

瞳は望どおりの展開に舌なめずりをしていた。



## 第十二章

視界が真っ暗になった。

部屋を追い出された奈々美は堅く閉ざされた扉を前にへたり込み、呆然としていた。涙は止め処なく流れ、床に水滴を次々と落としている。

信じられない事態に奈々美はこれが夢じゃないのかと自らの頬を抓む。

「……痛い」

残酷にも痛みははつきりと奈々美に感じられ、これが紛れもない現実であると認めざるを得なかった。もはや自分は洋介の彼女ではなくなってしまった。そんな悲しい現実には奈々美は更に涙が零れ落ちるのを感じた。

「どうして……」

悲しみに暮れる奈々美にはもう疑問の言葉を口にするしか出来なかった。何がいけなかったのか。何がこうさせたのか。疑問は尽きない。

だが、それでも洋介を怒らせてしまったことは確かなのである。奈々美は無意識の内にこれ以上洋介に嫌われないようにと行動を始めていた。

「帰らなくちゃ……」

このままいつまでも留まっていたでは洋介を更に怒らせてしまう。

奈々美はふらふらと立ち上がって廊下を歩き始める。不確かな足取りではあるが、着実に洋介の部屋から遠ざかる。

「何か……嫌だな……」

廊下を歩き、階段までたどり着いた奈々美は階段を見てそう呟く。まるで奈落に落ちていくような感覚が奈々美を襲う。だが、それでも洋介に次に見つかれば更に不愉快にさせてしまう。奈々美は意を決して階段を下り始めた。

徐々に見えなくなる洋介の部屋。それは奈々美に安堵を与えつつも寂しさをも与えていた。初めて入ったその日が別れの日になるなんて。悲しい記憶に奈々美はまた顔を歪ませる。

「嫌だよ……こんなの嫌だよ……」

子供の様に目を手で擦りながら奈々美は玄関まで歩いていく。いくら嫌だと言ってももう遅い。奈々美は歩かざるを得なかった。

徐々に玄関が近付いてくる。ここを出てしまえばもうこの家にかかることがなくなってしまうかもしれない。奈々美はそう思ったが、立ち止まることは許されない。そのまま足を動かし、靴を履く。

「これで……終わりなのかな……」

乾いた笑みを浮かべながら奈々美はドアノブを握る。儚い夢が今終わろうとしている。短い間だったとはいえ思い出はいくつもある。アプローチを続けた日々、落ち込んだ洋介を励まして距離が縮まったこと。そして想いが届いた時。恋人同士になった後はデートもした。それらの光景が奈々美の頭を駆け巡る。

「まだまだやりたいこと……一杯あったのに……うううう」

全身を震わせながら奈々美はこれから体験するはずだった未来を思う。しかしそれらはもう来ることはない。全ては幻想へと変わり果ててしまった。

「……さようなら、洋介……」

奈々美はドアノブを回して扉を開ける。そこは太陽が照らす日中の光景のはずだが奈々美にとっては光の差さない闇の世界に思えた。これから先自分には希望はない。奈々美は重苦しい足取りで高梨家を後にする。その後姿はまるで亡者の様に頼りないものであった。

## 第十三章

「はあ……何かどつと疲れたな……」

洋介は一人しかいなくなつた自室でぐったりとベッドに寝転んでいる。奈々美を追い出した後、直ぐに瞳も洋介を慮って帰っていった。一人になつて考えたり、休んだりしたいだろうと判断してのとだろうと洋介も悟り、その配慮が嬉しかった。

そしてその配慮に甘え、洋介は今まさに主に頭を休ませている最中である。ヒートアップした頭の中の火を消して回るのに相当苦慮したのか疲労は色濃かった。もはやそれを隠すことも出来ていないのは瞳があつさりと帰つたことでも分かる。

「もう破局か……。早かつたな……」

頭は休むことを欲しているが、その欲求に反して洋介の頭は働くことを止めない。色々考えが頭の中を駆け巡って止まない状態に洋介は自分のことながら苦笑する。

「これじゃ瞳の配慮も台無しだな」

洋介はそれでも何とか頭を休ませようと目を瞑る。だが、目を瞑ると余計に先程のシーンが色濃く頭の中で再現されてしまう。どうやら当分、本格的に休ませることは不可能な様である。

「まだ午前中だしなあ……」

眠気など一向にやってこない。疲れてはいるのだが、眠ることが出来ない洋介は休息を諦めていつそのこと頭の中を整理しようとする。

「とりあえず瞳はいいとして問題はやっぱり奈々美なんだよなあ……」

洋介は奈々美への対処に頭を悩ませる。きつぱりと別れを宣言したとはいえ、どうみても奈々美の方はそれを受け入れたとは思えない。最後の最後まで縋り付いてきた様子を見ると今後接触を図つてきそうな気がする。洋介はそんな予感がしていた。

「あれだけ酷いこと言って、酷いことしたから愛想尽かしてるかも  
しれないけどな」

いっそそれだったらどれだけ楽か。洋介は出来ればそちらの方向  
でお願いしたい気持ちだった。奈々美が縋り付いてくる度酷いこと  
を言わなければならぬ。愛想を尽かし、別れを告げた相手とはい  
え女の子をそう何度も泣かせたくなどない。

「まあ、こればかりは明日以降にならないと分からないし、考え  
てても仕方ないか。それよりも問題なのは瞳か……」

そう言っていると洋介は瞳の家の方を見る。洋介の部屋から見える瞳の  
部屋には現在瞳の姿はない。リビングにでもいるのだろうか。洋介  
は主のいない部屋を見詰めながら一つため息をつく。

「引き受けたからには明日からも瞳と登校するわけだけど、そこに  
奈々美が来たら……」

また厄介なことになる。洋介はそう考えてまたため息をつく。現  
状のところそれが一番の問題だった。奈々美が接触をしてこなければ  
何も問題はないが、また二人が顔を合わせたら何が起こるか想像  
もつかない。下手をしたら掴み合いの殴り合いになりはしないだろ  
うかと洋介は戦々恐々としてしまう。

「奈々美はともかく瞳も腹に据えかねてるところがあるだろうしな  
あ……」

何せ殴られた上に顔を踏み付けられたのである。怒らない方がど  
うかしている。洋介が間に入って奈々美を叱り付けたものの、それ  
だけで瞳の心が晴れたとは思えない。いざ切欠が出来れば報復をし  
ようとしても不思議ではない。

「それも遠慮願いたいなあ……」

そうなるとやはり奈々美がこれ以上接触をしてこないことが一番  
なのである。接触をしてきても奈々美が心身両方の点で傷つくのは  
目に見えているだけにそこを悟って欲しい。

「はあ、俺って最悪だな……」

好意を寄せてくることを迷惑に思う自分が洋介は嫌だった。現実

には一方通行の好意は迷惑でしかないことはまああることだが、洋介にはそんなことを考える余裕がなかった。とにかく好意を拒むことに苦しんでしまうのである。

洋介は苦渋の表情を滲ませながら寝返りをうつ。制服を着たままであることなどはや気にしていない。とにかく頭の中の悩み事でいっぱいである。より疲れが溜まった洋介は無理だとは思ったが、悩みを抱えたまま再び目を閉じた。

## 第十四章

「ご苦労様、私のショーツよ」

瞳はリビングのソファに寝転がりながら自らの下着を称えている。手に握られたその下着は先程洋介の部屋に仕掛けた下着だった。洋介と菜々美を仲違いさせる原因となった物に瞳は抱き締めたり、口付けをしてあげたい程感謝していたが、流石にその物が下着だけにそれは避けた。それでもこの下着は格別大事にしようと一人心に誓っていた。

「それにしてもあそこまで上手くいくなんて思わなかったなあ」

瞳は下着を丁寧に畳んで横に置いておくとそう呟いた。自分の願いを見事成就させてくれた功労者に労いの言葉をかけながらもそのあまりの成果に瞳は戸惑いもしていた。

「私としては二人の間をグクシャクさせるだけでも十分だったんだけど、まさか別れるまでになるとは」

確かに菜々美の反応は瞳の予想の範疇だった。殴られることも計算の内ではあった。しかし、菜々美が洋介を殴り、更にその洋介が注意だけに留まらず、別れを告げるところがまさに想定外の展開だった。

瞳としてはふざけた自分が注意を受けながらも菜々美にも洋介から注意が入り、その結果口喧嘩ぐらいしてくれればいいなと思っていたのだが、成果はその遥か上となっていた。

「まあ、とにかく別れたんだから結果はよしね」

瞳は予想とは違った展開ではあるが、自分にとってはよい結果ではあるのでそれ以上は気にとめない。問題はこの後なのである。

「とりあえず洋介とは約束があるから毎日登下校を一緒にしてもらう。そしてそこで仲を深めていくと」

瞳は洋介と結んだ約束を利用し、洋介との仲を深めていく作戦を考えていた。本当はそれと洋介と菜々美との仲を裂いていくことも

考えていたのだが、既に別れてしまったので自分のことだけに専念出来る。願ってもいない展開である。

勿論瞳としてはこのまま菜々美が大人しく引き下がるとは思っていない。その点でも洋介と引っついていいることは効果的なのである。洋介を監視し、菜々美の干渉を防ぐ。ただし二人は同じクラスであるため授業中などはそれが出来ないが。

「登下校を一緒にして過去の悪い印象を払しょくする。まずはそれが肝要ね」

瞳の何よりのネックとなっているのはこれまでに洋介に対して与えていた悪印象である。いくら洋介が瞳に接してきてもこれまで瞳はそれを歯牙にもかけずに無視してきた。そんな態度のせいで洋介は菜々美に取られてしまったという現実がある以上、ここは無視出来ない。いきなりのステツプアップは望めない。瞳は徐々に徐々に洋介の悪印象を取り除いていこうと考えていた。

「洋介は私に対して好意を持っていた。これは事実なんだから溝を埋めるのだって出来るはず」

かわいさ余って憎さ百倍というが、洋介の態度は少なくとも嫌っているようには見えなかった。それでもすぐに気持ちを打ち明けても洋介にだってわだかまりがあるだろう。その気持ちを和らげるためにもやはり時間は必要だった。

「すぐに洋介がよりを戻したり、他の誰かと付き合うことはないはず。焦らない焦らない」

瞳はとりあえず今後の方針を打ち出して一人作戦会議を終了した。そして終了するや否や一つため息をつき、小さく笑みを浮かべる。

「それにしてもこれまで男のことを深く考えたことなんてなかったなあ。いろんな人と付き合ってきたのに……」

これまで何人もの男と付き合ってきた瞳だが、その付き合いはテキトーなものであった。一種のステータスのような付き合い。校内で人気のある誰々と付き合った。何人と付き合ったという魅力を表すステータスを求める材料のような付き合い。そんなものでは当然

のように長続きはすることなく別れは早かった。相手のことを思ったりなどということも一切なかった。

「もしかしたらこれが私の本当の初恋なのかもしれない……」

瞳はそう思うと同時に頬が赤く熱くなるのを感じた。昔から抱いていた、しかしようやく今気付いた初恋。そう思うと何だかロマンティックな運命的なものを感じずにはいられない。

瞳は洋介のことを思い浮かべてみる。笑う洋介、怒る洋介、心配してくれる洋介。様々な洋介が思い出とともに頭の中に浮かんでくる。それと同時に瞳の頬はますます赤くなり、胸が高鳴る。

「ああ、ダメ。なんか恥ずかしい」

瞳は身悶えながら想像を振り払うように手をブンブンと振る。これ以上想像したら恥ずかしさに耐えれそうになかった。

「これが初恋の気持ち……。私にもまだ初恋を楽しめるんだ……」

瞳はこの機会を設けてくれた神様と気持ちに気付かせてくれた洋介に感謝しながら、この初恋を楽しみ、成就させようと一人気合いを入れるのであった。



## 第十五章

洋介が菜々美に別れを告げた翌日、洋介は憂鬱そうに学校へ行く準備をしていた。シャツを着る動作もノロノロとしており、行きたくないという心情が如実に表れている。

（菜々美と顔を合わすのが嫌だな……。あんなことがあったんだもんなあ）

洋介の学校へ行きたくない理由はまさにその一点に集約されていた。学校へ行けば菜々美と嫌でも顔を合わさないといけない。まして同じクラスなのだからその頻度は比較的多い。

（だからって休めないしなあ……。瞳と一緒に行くって約束しちまってるし）

一人で登下校をすることに不安を感じている瞳を安心させるために登下校を共にする約束をしている以上、それをすっばかすことは許されない。それにそんなことをして瞳に万が一が起きたりしたら悔やんでも悔やみきれない。結局のところ洋介は登校せざるをえないのだ。

（ああ、憂鬱だ）

洋介は時間をかけて着替えを終えると鞆を持って部屋を出る。そして階段を下りてキッチンへ向かうと朝食を取り始めた。

「どうしたの洋介？ 今日は何なかだるそうにしてるわね」

「いや、そんなことはないよ」

洋介に朝食を出した母は敏感に洋介の表情と様子を読み取る。さすがに肉親は鋭いといったところだが、洋介は極端に自分の様子を気にしてしまう。実際には本当になんか違いでしかないのだが、朝一番に会った人物にそう言われてしまうと不安になるようである。

洋介は努めて明るく振る舞おうと気を入れ直して朝食を取り始める。しかし無理に微笑んだ顔が引き攣ってしまっている。余計に不審な様子になった息子を訝しがりながらも息子を信頼する母親はそ

れ以上何も言わずに家事に専念する。芝居が上手くいったと勘違いした洋介はそのままの感じを維持することにした。

（瞳に余計な心配かけるわけにいかないもんな。守る側の俺がこんなじゃ瞳も不安になるだろうし）

引き攣った笑みを維持しながら洋介は一人使命感に燃える。真剣な目に引き攣った笑みという組み合わせは違和感しか呼び起さないが、当の本人はそんなことには全く気が付かない。もはや笑いを取ろうとしているのかという程おかしくなった顔つきにとうとう耐え切れなくなつた母親は洗濯物を干しにキッチンから消えた。

母親が去つて静けさが支配するかと思われたキッチンだったが、またそこに新たな人間が現れた。それはいつの間にかやら家に入り込んできた瞳だった。瞳は恐る恐るキッチンに入ってきて洋介に声をかける。

「お邪魔しまーす……。洋介、インターホン鳴らしても返事なかったから勝手に入ってきたやつだよ。よかったかな？」

「うおっ！？ ひ、瞳か……。誰が入ってきたかと思ったよ」

「おはよう、いきなり入ってきてごめんね。それで今日も一緒に行つてくれるんだよね？ 迎えに来たよ」

「ああ、わざわざ悪いな。本当なら俺が迎えに行く立場なのにな」

「うっん、私が我が儘言つて付き合ってもらつてるんだからこれぐらい当たり前だよ」

瞳はそう喋りながら洋介の向かいの椅子に座り、洋介の食事を見守っている。じつと見詰められて居心地の悪い洋介は先程の引き攣つたようなおかしいな笑みを思わず忘れてしまつていた。もつとも恐らく忘れた方がよい代物ではあつたが。

「す、すまん。今すぐ食うからちよつと待っていてくれ」

照れ隠しもあるのか洋介は猛烈な勢いで朝食を口の中に詰め込む。食べては飲み、食べては飲みとまるで飲み物で流し込んでいるかのような食事に瞳の表情は暗くなってしまう。

「ちよ、ちよつと。そんなに慌てなくていいから！ 喉に詰まっち

やうよ!？」

「大丈夫だつて、んぐうつ!？」　「ごほごほつ!」

「ほ、ほら、だから言ったのに。大丈夫?　はい、お茶飲んで。ゆつくりね、じゃないとむせちゃうよ」

「ごほごほつ、ああ、ありがとう」

喉に食事を詰まらせた洋介は咳き込みながら瞳から受け取ったお茶を飲み干す。そんな洋介の様子を瞳は半ばは呆れた様な、そしてそれでいて幸せそうな表情で見詰めている。何気ない日常の一場面しかしそれはこれまで洋介と疎遠になっていた瞳にとってかけがえないものであった。

(中学校時代もこうして朝から一緒に過ごしたかったなあ……)

瞳はここ最近こんな風にもし中学校時代にこうだったらと考えることが増えていた。小学校高学年から疎遠になっていったためにその間の思い出はほとんどない。あつたとしてもそれは洋介に辛く当った記憶しかない。それが瞳にとつては取り返しのつかない後悔となっていた。

(もうあの時代は帰つてこない。だから今度こそ後悔はしたくない)

瞳のそうした決意は朝から洋介に接触するという行動に表れていた。もう何一つ無駄に行動をしたくない。中学校時代の分を取り返そうとしているように瞳の接触は積極的だった。それこそ本人の意思としては許されるのならば朝昼晩と常に供にいたいと思う程である。

瞳がそう決意を定めているとその間に洋介の食事は終了していた。既に洋介は支度は完了しているためそのまますぐに二人は玄関へと向かう。

(こうして二人で揃つて家から出る。何だか一緒に暮らしているみたい)

瞳は頭の中で幸せな妄想をしながら玄関を出る。その緩んだ顔つきは普段の彼女を知る者からしたら信じられない様子であろう。学内屈指の美人として名高い瞳の呆けた表情。それは学内の彼女のフ

アンからすれば新たな魅力として持ち上げられるかもしれないが、今日の前の人間、洋介にとっては違和感しか呼び起さない。不審に感じた洋介は徐に手を瞳の額に近付ける。

「どうしたんだよ、ボーっとして。熱でもあるのか？」

「えっ……？ ひううううううっ！？」

突然の洋介からの接触に瞳は体を一瞬にして沸騰させる。顔も真っ赤にし、体温も急上昇してしまっている。嬉しさ、恥ずかしさ、驚きが一気に瞳の全身を駆け巡っている。

「お、おい。何か熱いぞお前。本当に大丈夫か？」

「う、うん。大丈夫大丈夫。ぜ、全然平気だよ！」

これ以上触れられたら失神しかねない。そう感じた瞳は洋介を振り払ってその場で元気に腕を振ってみせる。明らかにわざとらしい元気の示し方だが、洋介はあっさりそれを信じ込んでしまう。もっともこの場合はそれで間違いではないのだが。

洋介が引いたことで少し冷静さを取り戻した瞳は深呼吸をし、体の火照りを冷まそうと努める。朝からこんな具合では今日一日もたない。洋介の気を引くため密着マークを志した瞳としては初日から飛ばしすぎは避けたい。そんなことをすれば間違いなく瞳はオーバ―ヒートしてしまう。自らの調子としても洋介への心象としても程々が肝心である。深呼吸によって心を落ち着かせた瞳は洋介と適度な感覚を空けて隣に立つ。

「それじゃそろそろ行こうか」

「ああ、行くか」

二人はそう言うのと並んで歩き始める。手を繋ぐでもなく密着するでもなくという微妙な並びではあるが、その雰囲気はまさしく恋人同士のように感じられる。

そしてそんな二人の光景を見つめ、浮かない表情をする者がいた。物陰から顔だけを出して食いつくように二人を見つめる少女。それは菜々美だった。

「洋介……」

菜々美は物陰から姿を現すことも出来ず、ただ二人を見つめることしか出来ない。そしてその寂しそうな菜々美に追い打ちをかけるように洋介の姿は菜々美の視界から消える。角を折れたのだろう。ただそれだけのことなのに菜々美にとってはそれが心を締め付ける。まるで瞳に洋介が連れ去られたかのようにすら映ってしまう。

「洋介……」

菜々美はそれしか言葉を知らないかのようにただただ洋介と呟く。その姿は哀れな捨て猫のようであった。

## 第十六章

（あー、居心地悪い……）

洋介は机に突っ伏しながらそう心の中で呟いた。その表情はまさに疲れ切ったと口よりも雄弁に物語っていた。

時は既に放課後、確かに一日の授業が終了して気が抜ける時間帯ではあるが、洋介の抜け殻っぷりはそこらの生徒の比ではない。本当に魂が抜けてしまったのではと思える程である。

（今日はとにかく精神的に疲れた……）

洋介の疲労の原因は気の病と言えた。心が滅入って体までだるくなってしまうているのである。洋介は病は気からという言葉をまさに身をもって知った心地だった。

（……まだ見てるよあいつ）

洋介は何かに怯えるようにこっそりと後ろを見る。すると洋介の目には一人の少女の姿が映る。それこそが洋介を精神的に疲労させてしまった要因、菜々美だった。菜々美は今日一日中洋介のことをずっと目で追っていたのである。そしてその行為は隠れて行っ気など全くなかったようで洋介には簡単に察知出来てしまったのが悪かった。まるで監視されているかのような視線の張り付き方に洋介は疲れ切ってしまったのである。

そしてその行為は放課後になった今現在でも続いている。菜々美は帰り支度をのろのろとしながら視線を洋介に向け続けている。その行動の鈍さは明らかに洋介が先に帰るのを願っていた。洋介が教室を出た後、その後ろを追ってくる気が透けて見えている。そう思うと洋介は突っ伏した体勢から動く気を失ってしまう。

しかしそれでも洋介は動かないわけにはいかない。帰りは瞳を送っていかねばいけないのである。菜々美の視線のことを考えると瞳と帰ることはより菜々美の行動をエスカレートさせそうであったが、洋介は深く考えないことにした。

（まあ、菜々美も今は振られたことで未練があるだけだろ。その内もつといいやつを見つけるはず。何だかんだで人気者だしな）

菜々美が魅力的であることから洋介の考えは深みにははまらなかった。自分よりもいい男などいくらでもいる。菜々美ならそれらの男を捕まえることが出来るどころか向こうから寄ってくる。自分のことなどその内忘れるだろうとややネガティブな思考で自分を安心させた洋介はようやく重い体を起こす。いくら菜々美がいつか自分への未練を断ち切るだろうと考えても、今現在注がれている未練の視線は止むことはないしそれを受け続けるのも疲れる。洋介としては罪悪感を呼び起させるその視線から逃げ出したかった。放課後となり自由の身になった洋介は鞆を持って教室から出る。そこでやっと視線から解放されたものの安心はまだ出来ない。

もしかしたら後から付いてくるかもしれない。そういった考えから洋介の足取りは早足になっていた。

ぐんぐんスピードを上げて昇降口まで向かう。もはや走っているような速度に周りの視線は訝しげだが、洋介としてはそんな視線など問題にはならない。もつと厄介な視線が迫ってくるかもしれないのだ。洋介はまるで競歩のような足取りで昇降口に駆け込んだ。

「あつ、やつと来た。おーい洋介！ こっちこっち」

昇降口にやって来た洋介の目に飛び込んできたのは既に靴を履き替えて待っていた瞳だった。洋介が教室で突っ伏している間にもう昇降口までやって来ていたのであろう。洋介は瞳の姿を確認すると何故だか無性に安心出来たような気がしていた。

「すまんすまん。だからしたら時間が経つちまつた」

「まあいいんだけどね。私は送ってもらう立場だし」

そう言つて苦笑する瞳を見ていると洋介にもようやく笑顔が戻ってきた。それでも焦る気持ちが残っているのは確かで洋介は会話もそこそこにすぐに靴を履き替えた。そして瞳を促すと昇降口を出る。「どっか寄る用事はあったりするか？」

洋介は校門までの道を瞳と並んで歩きながらそう尋ねる。家の外

を歩くのに抵抗が残る瞳のことを思うと用事があるなら自分が付き添っている間に済ませてやりたい。洋介はそう思い遣って瞳に尋ねたつもりだったが、どうやら瞳は違うように受け取ったようで何やらにやにやと笑っていた。

「何？ 寄り道デートのお誘い？」

「ば、馬鹿、違うっつーの！」

からかわれた洋介は顔を赤らめながら必死に否定する。その慌てぶりに瞳は満足そうに笑う。洋介はからかわれてはいるものの、心休まるやりとりによりやく体の重たさや心の憂鬱さが取れた気がした。表情も徐々に和らいできていることが洋介自身でも感じ取れる程である。

（何だか逆に俺が瞳に元気付けられてるな）

洋介としては瞳を安心させるためにこの役目を担っているのだが、今日に関して言えば洋介の方が安心させられている有様だった。情けなくもあるが、持ちつ持たれつのような関係に一方的な庇護という意識が和らげられていた。

瞳との会話で足取りも軽くなったこともあって二人はあつという間に道程の半分までやってきてしまう。普段の洋介であれば押し付けられたこの役目が面倒で解放の時が近付いてきたと気が抜けるところであつたが、今日は違っていた。どこか一人になりたくないという感情が洋介に湧き上がってきていた。

「なあ、瞳……。ちよつと俺の家に寄つてかないか？」

洋介は考えるよりも先にそう言葉を発してしまっていた。瞳といふことで得られた安心感。それを本能的に求めていたのだらう。洋介は言ってしまったから自分の発言に驚いている有様である。

「えっ？」

瞳は洋介が突然口走った言葉をよく飲み込めなかったのか首を傾げる。瞳のその動作を見て洋介は今更ながらに後悔をしていた。

（お、俺は一体何を口走ってるんだ！？ 恥ずかしっ！）

ようやく自分の言動に頭が追いついた洋介は顔を真っ赤にして慌



てふためく。そして自分の言動をなかったことにしようと手を左右に大袈裟に振りたくる。

「い、今のは違う、違うんだ！ 何言ってるんだろ、俺。あははは……」

空虚な笑いでその場を誤魔化そうとする洋介。しかしその努力も虚しく目の前の瞳は目をぱちくりさせている以外動きが完全に止まっていた。その顔は放心状態で洋介から見たら呆れかえっているように見えた。

（俺は馬鹿か！？ またこんなんじゃ疎遠になっちまうんじゃ……）

瞳の反応に最悪の未来を想像してしまう洋介。もはやパニック状態に陥っている彼の思考は徐々にネガティブな方向に動き始めていた。勝手に最悪な想像をしてそれに忙しい洋介はすっかり目の前の瞳から意識を離して、想像の中の瞳に絶望を感じていた。

だが、現実の瞳は決して洋介が思うような反応をしていなかった。悲嘆に暮れる洋介を見て穏やかに微笑み始めたのだ。そこには愛想笑いといったようなわざとらしさはなく純粹に洋介に微笑みかけていた。惜しむらくは洋介がそんな瞳の反応を見ていないことである。

「いいよ。私、洋介の家に寄ってく」

「……えっ？」

瞳の反応の過程を一部見逃していた洋介は瞳の返答に目を丸くしてしまふ。彼からしたらそんな返事が返ってくることが予想外だったのだ。苦笑いされるか警戒されて離れていくかといった辺りのことを想像していた洋介は先程までの瞳のように動きを止めて放心状態になってしまふ。

そんな洋介の様子に焦れたのか瞳は洋介の手を取り、自ら先導する。

「ほら、そう決まったなら早く行こう？ 時間がもつたいないよ」

「……あ、ああ」

未だ信じられないといった表情の洋介は瞳に引張られてようやく歩き始めた。瞳を送っていく立場のはずがこれでは逆転してしま

っている。

「……よし、それじゃ行くか」

洋介は気を取り直して改めて瞳の横に並び、自らの足で歩く。瞳に引つ張られて歩くというのは格好が悪いと洋介は変な意地で今度は瞳よりやや前を歩き始める。そんな洋介のこだわりに瞳は苦笑しながらも可愛いといった表情で洋介を見つめる。しかしその後、瞳はその視線を後ろに向ける。その眼光は洋介を見つめていた時とは正反対で鋭く、相手を射抜くような威圧感を感じさせた。

「ひっ！」

洋介と瞳の背後数十メートル、壁の角から僅かに見える人影が小さく悲鳴を上げる。瞳の視線を感じ取ったのであろう。その人影はさつと角に隠れて姿を消す。瞳はそれを見届けると視線を前に戻し、洋介に気取られないよう取り繕う。その表情の変わりっぷりは名女優と言って差し支えない程である。

その一方で角に隠れた人物はその怯えた表情を未だに元に戻すことが出来ない。あまりの緊張感に息が切れ、壁に手をつきながら呼吸を必死に整えている。

「くっ、あの女……なんて目するのよ。それに私に気付くなんて……」

そう悪態をつくのは今日一日洋介を悩ませた張本人、菜々美だった。逃げる洋介を追って菜々美はこっそり後をつけてきていたのだが、とうとう気取られてしまった菜々美はもうその尾行を断念せざるを得なかった。

「あの女さえいなければ……」

憎悪の籠った声でそう呟く菜々美は負のオーラに包まれていた。ぎりぎりど爪を齧り、苛立ちが表に表れてしまっている。

「とりあえず今日はもう無理ね。これからどうするか考えないと」怒りに包まれながらも冷静さを保とうと努める菜々美は燃え上がる怒りの火を消して回りながら今後の対策を考え始める。どうやって洋介に話しかけるか、どうやって瞳を洋介から引き離すか、その

ことを考え始めると菜々美の表情には明るいものが表れ始める。しかしその明るいものにはどこか凄惨な要素も含まれていた。

## 第十七章

「それじゃあ、私そろそろ帰るね」

下校時に洋介の部屋に立ち寄った瞳はしばらくお喋りを楽しむと、時計を見て腰を上げる。外も既に暗くなっており、じきに夕食の時間になることを考慮したのだろう。

瞳が鞆を持ち、部屋から出るのに続いて洋介も見送りのため、一緒に部屋を出る。階段を降りていくと瞳が考慮したように夕食の匂いがしてくる。区切りにはまさにちょうどいい時間だった。

「何だか悪かったな。いきなり誘っちゃって。やらなきゃいけないこととかなかった？」

洋介は自分の方から誘っておいて未だに瞳に気を遣っている。優しいのだから卑屈なのはつきりしないが、瞳は前者と受け取ったのだろう。表情は柔らかくご機嫌であった。

「うん。特にやることないからどうやって時間潰そうかなって思ってたぐらいだし」

「そうか。それならよかった」

瞳の返事に洋介はようやく安心したといった様子で脱力する。思わぬ発言からの流れだっただけに心の準備など何もしていなかったことが要因だろうが、洋介はやや気を張っていたようである。洋介は思わず零れ出た言葉に振り回された格好だが、それでも楽しかったことは事実なので緊張が解けた今、その無意識の言葉に感謝していた。

「それじゃまた明日ね」

「ああ、じゃあな」

瞳が帰っていくと洋介は何となく寂しい感覚を感じていた。少し前までは自分の言葉に全く振り向いてくれない憎く、それでいて気になる相手だったが今は自分の言葉に向き合ってくれる。洋介はようやく長い間願ったことが実現しつつあると満足感を感じていた。

だが、それだけにその念願の時間が途切れるのが寂しい。出来るならばいつまでも瞳と喋ったりして一緒にいたかった。その時間は緊張もするだろうがさぞ楽しく幸せなものだろうと予想が出来る。しかしそれはどこまでも夢物語でしかない。

「瞳と昔みたいに遊べるようになったけど……あくまで友達、幼馴染の関係なんだよなあ」

今の洋介にとってはその関係があまりに対処に困る関係となっていた。幼馴染という近すぎる関係故に中々踏み込めない。それが仲直りしただけ余計に重くのしかかっていた。塵芥のような扱いのこの前までならともかく今の関係はあまりにも洋介にとって幸せな関係だった。それをもう一段と欲を出して再び壊れるのが怖い。洋介は完全に臆病風に吹かれていた。

「まあ今は一緒に登下校とかして関係を完全に修復するのが精一杯かな。今日は誘って家に呼べたし、満足しとかないと」

洋介はそう自分を納得させて思考を打ち切る。これ以上ならなら考えていると深みに嵌まりそうだった。洋介は瞳を見送った玄関から踵を返してキッチンへと向かう。

「飯でも食って気を取り直しますか」

誰に言うでもなく洋介はそう呟いて顔を両手で軽く張る。これを切っ掛けに気分を切り替えようとしたその時、背後の玄関からインターホンの音が鳴った。

「うん？ 誰だろう？」

洋介はインターホンに答えるように軽く返事をしながらドアへと向かう。最も近い位置にいるのだからそれは必然の行動だったが、それ以外の思惑も洋介を動かしていた。

（もしかしたら瞳かもしれない。忘れ物とかあったりして）

洋介の行動の裏にはそういった考えも含まれていた。もし瞳ならそこで少しお喋りしてみようかなどと洋介の頭の中には期待が渦巻いていた。

「はいはい、どちら様で……なっ!？」

ドアを開けた洋介は期待感から上機嫌だった表情を一転して驚きと陰しさを含んだ表情になった。あまりに予想や期待とかけ離れた目の前の現実には驚愕が隠せなかった。

なかなか二の句を發せない洋介に代わって目の前の訪問者が洋介に口を開く。

「よ、洋介……こんにちは」

「な、菜々美……どうして……」

## 第十八章

「よ、洋介…… こんにちは」

「な、菜々美…… どうして……」

訪問者は今朝から洋介に執拗に視線を向けていた菜々美だった。不安そうに曇った表情や俯きがちなその様子はかつての菜々美とはまるで別人のようだった。

洋介はそんなまるで馴染みのない菜々美の様子やその不意の訪問に混乱しているのか未だに口を利けない。ただただどうしてと呟くだけである。

「わ、私どうしても納得できなくて、諦められなくて…… それで……」

菜々美としても考えての行動ではなかったのなかなか明確に言葉が続けられない。つかえつつかえ話すその様子は実に弱々しく儂い印象を与える。かつての菜々美からは信じられないような様子である。

「…… 自分勝手に本当にすまないけど…… でも俺は確かに別れるって言った。だからもう……」

洋介は表情を曇らせながら、苦しそうに言葉を紡ぎだす。罪悪感に締め付けられたその言葉の先は最後まで言わなくても想像が出来た。菜々美は最後まで言わせないとばかりに慌ててその言葉を遮りにかかる。

「待つて！ 私本当に反省してるの。事情もよく聞かずに手を出したことは本当に悪かったって。だから許してよ……。ねえ洋介……」

洋介からの別れの言葉は手を出したことが原因だと考えていた菜々美は洋介の言葉を遮って謝罪に努める。誠心誠意謝ってこれからそんなことしないと約束すればまた元の鞘に収まれる。菜々美はそう考えていた。

しかし実際には洋介の心は既にその前から徐々に瞳によって惹き

つけられていた。元々は瞳に強い想いを抱いていた洋介なので一度瞳の方に傾けばそれはもう止めようがない。菜々美の謝罪を聞いても洋介の表情はただただ曇るだけであった。

「菜々美……正直に言うけど俺の気持ちは瞳に向ってる。瞳が襲われた日、久しぶりに瞳と親しく話せて凄く楽しかった。そして次の日、瞳が護衛を頼みに来た時も面倒だと思ったけどやっぱり嬉しい、楽しみっていう気持ちの方が強かった。もうその時にはまた瞳に惚れてたんだと思う」

「……」

淡々と気持ちを語る洋介に対して菜々美は特に遮ったりもせず大人しく聞いていた。しかしその手は小さく震えている。そして洋介は自分の気持ちを整理しながら話すことに集中していたのかそんな様子には全く気が付いていなかった。

「本当に自分でも最低な男だと思う。菜々美が手を出したことも切っ掛けではあったけど……でも菜々美に別れを告げたのは俺の浮気からだ。本当にごめん」

「……」

「だから俺はもう菜々美と付き合えない。自分勝手に本当にすまないけどこれからは……って菜々美！」

別れを改めて告げようとし、俯いていた顔を菜々美に向けた洋介は目の前の状況に驚愕した。それまで大人しく話を聞いていると思われた菜々美の眼から涙が流れている。嗚咽さえも漏らさずただただ虚ろな瞳で涙の目を溢れさせている状態は洋介でなくとも混乱させるのに十分だった。

「お、おいっ！ 大丈夫か菜々美！？ 一体どうしたんだよ？」

「……ダメ、嫌だ……。別れたくないよ、洋介……」

菜々美は壊れたラジオのように途切れ途切れ自分の意思のみを流し続ける。全く洋介の言葉に反応しようとしないうちに菜々美に洋介はどうすべきか対処に困った。

「まさかこのまま帰すわけにもいかないし、だからといって部屋に



上げたら今度はそれが原因でいざこざが起こりそうだし……どうすりゃいいんだよ」

洋介は頭を掻き篋りながらあたふたと対処を考える。家族に女の子を泣かせている現場を見られたくないし、かといって泣いている女の子を連れて外など歩きたくもない。そのまま外へ出してもこのままでは家の前で泣き続けるだろう。自分の家の前で泣き続ける女の子。それを想像したら洋介は自分が外道にしか見えなかった。「うおおお、どうすりゃいいんだよ」

「洋介……許してよ……」

依然として涙を止める気配などなく何事かを呟き続ける菜々美を見ているとこれはシヨックでどうにかなくなってしまったのかと洋介は新たな恐怖に駆られた。

自分のせいで精神が病んでしまったなどというのは遠慮願いたい。洋介は徐々に追い詰められていった。

「こうなったらとりあえず落ち着かせるしかないか……」

洋介は決断した。注意を払えば問題はないだろうと一先ず菜々美を自分の部屋に連れて行き、慰めるなりなんなりしてとりあえず菜々美を落ち着かせようと考えた。

洋介はそう決断するとすぐに菜々美の手を引き、自分の部屋まで連れて行く。ここで家族に見られるのが一番厄介だとその行動は迅速かつ慎重だった。菜々美も明らかに正常ではないが、洋介に合わせしっかりと動いていた。

「はあはあ、部屋までがこんなに遠く感じたことはないぜ……」

洋介は菜々美を連れながら自分の部屋までなんとか誰にも遭遇せずに来ることが出来た。ただ部屋まで移動しただけなのにその息は切れて、かなりの疲労を感じていた。

「とりあえず早く部屋に入れないと……。ここで母さんとかに見つかったら意味がないし」

洋介は扉を開けて菜々美を中に招き入れる。さっきまでここに瞳がいたのにすぐその後には違う女の子がいる。形だけ見たら非常にだ

らしい男だが、実際はそうかと洋介は自分の行動に落ち込んでしまう。

「さて、部屋まで連れてきたはいいけどこっからどうすればいいんだろう？」

洋介は当然ながらそんな人の心理をどうこう出来るような技術などない。ただ体裁上不味いのでここに連れてきただけである。その後のことなど何も考えてはいなかった。

「頬を張ったら目が覚めるかな、いやいやそれは最終手段だな。となるとまずは慰めてみりゃいいのか？」

それでも出来ることを何かしようと洋介は菜々美の覚醒に取り掛かる。洋介は菜々美の手を握って目を見つめる。

「おい、菜々美。目を覚ませよ。聞こえてるかー？」

「ごめん……許して……お願い」

「やべえな、目が完全にイツちゃってるよ……」

次から次へと涙を生産している虚ろな瞳を見て洋介は菜々美の状態が容易ならぬものだ改めて感じた。もうこれはどんなに呼びかけても駄目だろうと判断した洋介は早くも最終手段に踏み切った。

「すまんが、許してくれい。……おらっ！」

軽い気合いの声とともに洋介は菜々美の頬を張った。流石にあまり強くしては駄目だろうと加減した一撃ではあったが、決して痛くないというものではない。それでも菜々美はまるで痛みを感じていないかのように悲鳴すら発せず、依然として同じ状況だった。

「こ、これは厄介だな……。今でさえうつすらと赤紅葉が頬に出来るのにこれ以上強くやったら完全に暴行の跡として証拠が残るぞ……」

涙を流し続け、頬に手形が浮かんでいる女の子と男が部屋に二人きり。どう見ても暴行現場だった。洋介にはこれ以上踏み切ること出来ない。

「さあ、どうしよう。もう俺に手札はない。完全に行き詰った」

降参とばかりに両手を上げる洋介だが、実際もうそんな風におど

けでもしないと気が狂いそうだった。一人の精神をおかしくしてしまっただけという現実が洋介に重くのしかかる。洋介はもう泣きだしたくらいだった。

「どうしたら元に戻ってくれるんだよ……頼むよ、何でもするからこつちに帰ってこいよ……」

もう何にでも縋りたいとばかりに洋介は菜々美に話しかける。完全に弱気な不安定な状態になってしまっていた。

「このままだと俺もおかしくなりそうだよ。頼むよ菜々美……」

そう言っていると洋介は疲れ切ったのか菜々美にしな垂れかかりながら脱力する。もう洋介はパニック状態になる気力さえ失ってしまっていた。

「……」

洋介が菜々美にしな垂れかれ、視線が菜々美から離れたその時、それまで虚ろな瞳をしていた菜々美の眼に光が灯った。そして意思が戻ったその瞳は邪悪な色に染められていた。

「……洋介？」

一瞬邪悪な色に染まったその瞳を菜々美は困惑の色に染め直した。そして洋介に声をかけると平静に戻ったように辺りを見回す。

「な、菜々美！？ 元に戻ったのか！？」

菜々美の声を聞いた洋介は顔を菜々美に向き直し、慌てて肩を掴む。その表情は希望や不安など様々なものを内在して複雑な心境を感じさせた。

「も、元に戻ったって？ 私一体どうして……」

「いい、もういいんだ。元に戻ったならよかった。本当によかった」

洋介はこれ以上複雑なことを考えなくていいとばかりに首を横に振る。どうやら本当に元に戻ったようだと思っている様子である。

「そっさいばここは……」

「ああ、俺の部屋。仕方ないからここに連れてきたんだけど……あつ、言つとくけど何もしてないからな」

「……でもなんかほっぺが痛いんだけど」

「そ、それは……」

「私が知らない間に何をしたのかな？」

「そ、それはやむを得ずそうだっただけで、その……」

頬の痛みを追及されて洋介は言葉に詰まってしまふ。暴力の跡が残っていたら誰でも不穏なことを想像するだろう。洋介は背中に嫌な汗が滲んでくるのを感じた。

「……ねえ、ここで私が今悲鳴を上げたら洋介どうなっちゃうかな？」

「……えっ？」

「涙の跡に殴られた跡、証拠は十分だよな？」

「お、おいつ」

「もう洋介は私の彼氏でもないんだから、どうなろうと関係ないしなあ」

「な、菜々美さん？」

「捨てられた恨みもあるし、どうしよっかなあ」

「……本気で言ってるのか？」

洋介は目の前で不穏な言を吐き続けている菜々美に恐怖と不快感を感じ始めていた。どう見ても脅迫をしているとしか考えられない。確かに菜々美を自分勝手な理由で振ったがそこまですることか？と憤りが湧き上がってきた。

「本気だしたらどうするの？ どうにか出来る？ 押さえつけてもする？ そしたら本当に暴行だよな」

「くっ……何が望みだ」

こんな手段に屈するのは本意ではないがやむを得ないと洋介は苦渋の表情で要求を尋ねる。今のところそうするより他になかった。

一方で洋介からその言葉を引き出した菜々美は得意満面である。その満面の笑みから一体どんな要求が飛び出すかと洋介は怒りの気持ちの一方で戦々恐々ともしていた。

「私の望み？ そんなの決まってるよ。洋介、私と付き合いなさい。それだけ」

「はあ？」

恨みだとか言ってるからてつきり何か高価な物を買わされるかサ  
ンドバックにでもされるかと思っていた洋介はその要求に思わず間  
抜けな声を出してしまう。理不尽に振られ、さらに自らの

知らない間に部屋に連れ込まれて殴られているというのにまだ付き  
合つてと言うその考えが分からなかった。

そんな洋介の疑問の声と表情に菜々美はもう一度要求とともに自  
身の考えを洋介に突き付ける。

「私と付き合つて。嫌だというならすぐに私は悲鳴を上げて助けを  
求める。さあ、早く決めて」

「ちよ、ちよつとお前……」

「いいから早く。それとももっと簡単に決心できるようにしてあげ  
ようか？」

菜々美は困惑する洋介にそう言うと言つて自身の着衣を乱し、胸元や太  
腿を大胆に曝け出す。その姿はいよいよどう見ても乱暴されたよう  
にしか見えなくなっていた。

「お、お前……何考えてんだよ……」

ある意味先程よりも厄介な状況に追い込まれた洋介はもう次から  
次へと続く想定外の事態の前に氣力を失っていた。もう何も考えず  
に逃げ出したかった。しかしそれをすればすぐさま菜々美は悲鳴を  
上げるだろう。そうすれば自分は一瞬の内に菜々美を襲い、逃げ出  
した暴行魔になってしまふ。疲れ切った頭でもそれは容易に想像出  
来た。もう洋介には逃げ場などないのである。

「さあ、もう決めた？ それとももっとしないと決断出来ない？」

高圧的に洋介に決断を迫る菜々美は更に着衣を乱し、とうとう下  
着姿同然になってしまっている。

完全に制服を脱いでしまった上半身にスカートが足首に引っ掛か  
った状態の下半身。もうどこからどう見ても如何わしい想像しか出  
来ない。言い訳不可能な状態にとうとう洋介は白旗を上げた。

「……分かった。付き合ふ……付き合ふから助けてくれ……」

「付き合うつて言ったね。言ったよね？」

菜々美は確認とばかりに耳を洋介の方へ向ける。その仕草に腹が立った洋介だったが、今の菜々美には逆らえない。大人しく菜々美に交際宣言を告げる。

「俺は菜々美とまた付き合います。彼氏彼女の関係になります。……これでいいんだろ？」

投げやりそうにそう言った洋介だったが、菜々美の方はそんな態度は関係なくその言葉を言わせれば十分だと上機嫌だった。その上機嫌の菜々美の様子を見ている洋介は逆に怒りに震えていた。

「洋介が素直になってくれて嬉しいよ。それじゃ次は付き合うにあつての注意点を言うね。忘れないでよ？」

「はあ？ 注意点？ 何だそりゃ」

全く意味の分からない菜々美の言葉に洋介は不機嫌そうに聞き返す。ただでさえ不本意ながらも交際宣言を言わされた洋介の怒りは今にも噴火しそうであつた。

「私と洋介の付き合う上でのルールだよ。もう二度と別れたりしないようにこういうことはきちんとしとかないと」

「……おい、いい加減にしとけよ」

とうとう我慢ならなくなつた洋介は菜々美の胸倉に手を伸ばし胸倉を掴もうとするが、そこには衣服の胸倉などなく下着と素肌しかなかった。それに気が付いた洋介は手を引つ込めようとしたが、その前に菜々美にその手を掴まれ、菜々美の胸にまで伸ばされた。

「お、おいっ！？ 何して……」

「話の途中で私の胸を触ろうとするなんて酷いよね。叫んだらどうなるかな？」

「なっ！？」

「ルール。まだ言つてないけど……呑むよね？」

菜々美の胸を掴んだまま固定されている手がある以上洋介には首を縦に振るしか道はない。洋介はここまで来ると怒りよりも恐れの方が大きくなつていた。幾分か蒼白になつた表情で大人しく首を縦

に振る。

「うん。物分かりがよくて助かるよ。それじゃルールを言うね」

「……ああ」

「普通にしてれば簡単なことだからね。まずは他の女の子と話しちゃ駄目。特に河野さん」

「お、おいっ！ そんな勝手な……」

「警察行く？」

「うっ……」

先程から反論しようとしても最後まで言う前に押え込まれる形が続いている洋介は不満一杯だが、菜々美の恫喝はあまりに効果覿面だった。洋介はすぐに言葉に詰まり、何も言えなくなってしまふ。もうこの場合は菜々美の独壇場だった。

「話しちゃ駄目。見ても駄目。私がいるんだから必要ないでしょ？」

「それじゃ瞳の護衛はどうするんだよ。不安に思ってる人を放っておいていいのかよ」

「あんなの建前に決まってるじゃない。本音はもっと洋介と親しくなりたいうところよ。別に不安になんて思ってないよ、あの人は」

「お前！ そんなの勝手にお前が言ってるだけだろう。襲われたんだぞ。不安に決まってるだろうが！」

「……夜、河野さん見張ってみて。多分何も問題なくコンビニとか行ってるから」

「そんなわけないだろ！」

「言い切れるの？ だったら様子を見てその兆候が全くないって証拠を出してみて。多分一週間見てれば結果が自ずと出るから」

洋介の反論に淡々と対応する菜々美の様子はもう洋介の知っている菜々美ではなかった。先程の打ちひしがれ、弱々しい菜々美も初めてながら、今の高圧的な邪悪とさえ言える菜々美もまた洋介の知る菜々美ではなかった。こんな本性が隠れていたとはと洋介は今更ながら菜々美と付き合ったことを後悔していた。

「それに言つたよね？ 吞めないなら……」

「ああもう分かった！ 分かりました！」

投げやりそうに同意した旨を吐く洋介。それでも同意したとの答えを得た菜々美は満足そうだった。

「分かったならそれでよし。次は……」

それ以降延々と菜々美と付き合う上でのルールを叩き込まれた洋介は嫌々ながらもどうしようもないので逐一同意していった。洋介からすれば正直どうかしてるという内容ばかりだったが、言っている本人は大真面目なので迂闊に愚痴すら吐けない。洋介は鬱になりそうだと心中はため息で一杯だったが、その時一つの考えが頭に浮かんだ。

（そう言えば確かに今なら逆らえないけど、ここを乗り切ったら平気じゃないのか？）

洋介は頭の中に浮かんだその考えに希望を見出した。確かに涙の跡に頬を張られた跡、着衣の乱れた姿に、男の部屋。疑う余地のない暴行の現場と化しているが、ここを乗り切って菜々美を帰してしまえばその証拠など何もうなくなる。そもそも証拠も何も全て菜々美の捏造ではあるが、それらは全て菜々美の脳内証拠になり下がる。

（仮に明日以降、菜々美に絶縁宣言してそこで脅されてももう証拠はない。むしろあいつの方も脅迫という犯罪をしてるわけだしな）

そう希望を見出した洋介は一気に気が楽になった。ここで菜々美の要求を吞んでも明日以降はそれを強制する力はない。破棄してしまえばいい。仮に菜々美が暴行の件を持ち出してもこちらは脅迫罪だと言つてやれば対等に渡り合える。洋介は考えを改めた。

（今の内は快く要求を吞んであいつを早く家に帰す。そして明日になれば……）

戦略を定めた洋介は以降、菜々美の出す様々な要求を潔く吞んでいった。急に態度が変わった洋介だったが、菜々美は特に疑問を持つこともなく要求を吞ませると上機嫌で帰っていった。そこで洋介はようやく体の力を抜いた。



「はああああ…… すぐえ疲れた。もう何もしたくない」

ベッドに寝転び、脱力する洋介はまさか自分が脅迫されるとはと考えたこともない状況を思い出して今更ながら身震いする。今回は菜々美の策に粗があつたため切り抜けられるが、これがもつと完成された脅迫だつたらと思うと気が気ではない。

「もつと慎重に生きてかないと何があるかわからないな……」

あまりの出来事に人間不信になりそうだと思いながら洋介は夕飯も食べる気にならず、そのまま眠ってしまうのだった。

## 第十九章

翌朝、洋介は起きるなり朝食も食べずに自室の机に向かっていた。格好も寝間着のままというまさに起きたばかりという出で立ちである。

「さて……今日は重要な日だ。上手いこと菜々美の企みをかわさないと……」

洋介は前日、菜々美が仕掛けてきた策略をどうやって切り抜けるかという問題に立ち向かっていた。方針こそ菜々美とのやり取りの最中、菜々美の帰宅後に考えてはいたが、具体的な手段については寝て忘れないように次の日にと回していたのだった。

「とりあえず菜々美の脅迫のネタはもう通用しない。そうなるこそを指摘して諦めさせるっていうのが一番平和で簡単だけだな」

洋介は案を出してはいくが、基本的には菜々美の反応次第でその後の展開は変わっていつてしまうため、やはり出だしとその後のために数個対策を練るぐらいなので割と早く脳内会議は終了する。しかしその簡単に片付きそうな気配がかえって洋介を不安にさせる。

「えーと脅迫を無理だと諭して、それでそこで納得すればよし。だけどそこで抵抗するなら脅迫罪を仄めかして黙らせる。万が一暴れたらこっちも力で訴える……。これぐらいだろうけど」

……何か見落としとかあるかなあ」

頭の中で状況をシミュレートしながら洋介は立ち上がって部屋を出る。一階に下りてキッチンに入り、朝食を食べる。普段通りの振る舞いをしながらも頭の中ではずっと対策を練るという一連の作業を止めない。洋介の行動はもはや無意識の状況で行われていた。

しかしその無意識で行っているという状況のため洋介には目の前にあるイレギュラーに気付くことが出来なかった。どこか遠くを見ているかのような虚ろな目をしている洋介を見つめる一人の少女の姿があるということを。

「……」

「……おい？ 起きてる？」

「……」

「洋介？ 聞いている？」

「……」

「……えいつ！」

話しかけても反応を示さない洋介に苛立ったのか洋介の向いに座る少女は身を乗り出して洋介の頭を軽く小突く。それでようやく意識をはつきりさせた洋介は何事かと言わんばかりに顔をキョロキョロと左右に忙しく動かす。

「まったく……朝からそんなボーっとしてどうしたの？ 夜更かしでもした？」

「あつ、瞳……。どうしてここに？」

「いつも送ってもらってるからね。感謝の気持ちに朝食を作りに来たのよ。それ私が作ったんだから何か反応が欲しかったのに、洋介ってばボーっとして何も反応してくれないし」

「ご、ごめん。ホントにボーっとしてて気付かなかった」

きまり悪そうに洋介は頭を掻きながら頭を下げる。その反応を見て瞳は少し機嫌を直すと今度は心配そうな表情で洋介を見つめる。

「まあそんなことはどうでもいいとして。それで洋介ホントにどうしたのよ？ どうか調子悪いの？」

「い、いや大丈夫。まだ眠たいだけだ」

洋介は軽く笑いながらそう誤魔化す。しかし目の前の瞳は同じように笑うことはなく未だ真剣な表情で洋介を見つめ続けている。その視線に気圧された洋介は笑っていた顔を横に向けて視線を瞳から逸らす。

そんな洋介の反応を見た瞳は真剣な表情を崩して一つため息をつく。その様子は完全に洋介の胸中を見抜き、それを誤魔化そうとした洋介に呆れているかのである。

「洋介ってば昔から変わらないよね。隠し事があると笑いながら誤

魔化して頭を描く。そしてそれでも見つめ続けると気まづくなつて顔を逸らす。パターン通りだよ」

「そ、そんな癖があつたの、俺？」

「知らないわよ、そんなの」

「えっ？　だつてお前……」

「知らないけど何か悩みがありそうだっていうのはいつもと様子が違うから感じた。……でも洋介に問い詰めても優しいから何も無いよつて言うだけでしょ？　だからちよつと……ね」

「嵌められたつてわけか」

「人聞き悪いこと言わないでよ。素直にさせてあげたのよ」

そう言つと瞳はさて本題に入ろつかとばかりに乗り出した身を引き、椅子に腰を落ち着かせる。体は遠ざかったというのに逆に増すばかりの瞳の威圧感洋介に否応なく理由を話させようという空気にさせていた。観念した洋介は箸を置いて茶を一口飲み、乾ききつた喉を潤す。

「ふう……」

「話す気になつた？」

「ああ。そこまで心配してくれてるのに何も話さないわけにはいかないからな」

「そうこなくつちゃ。お世話になつてるし力になれることなら何でもするわよ」

気合い十分とばかりに瞳は真剣な顔つきで洋介を見据える。洋介は今度は覚悟が決まつているからかその視線から逃れることはせず、こちらも瞳を見据えて真剣な表情になる。

「……そういえば母さんと父さんは？」

「おばさんは外でうちのお母さんと近所の奥様連中を集めて井戸端会議。おじさんはもう出掛けたわ。だから安心して話せるよ」

「よし……それじゃどこから話せばいいかな……」

時間もまだ余裕があるし他人の目も大丈夫と判断した洋介は話の取っ掛かりを考える。時間はあるといつても登校を控えている身、

極力簡潔に話したいというのが二人の考えだった。洋介はそれでもいつまでも悩んでいる場合ではないととりあえず話を始める。

「……昨日、瞳が帰った後に突然菜々美がうちに来たんだよ」

「ふう……そんなことだろうと思った」

洋介の言葉に瞳は一つため息をつきながら頷く。

「何で？」

「気付かなかった？ 昨日、一緒に帰ってる時にあの子、後ろから付けてきてたのよ」

「マジで！？ そこまでするなんて……」

洋介は驚くものの、それをあつさりと信じる。確かに学校にいた時から視線が常に洋介に向けられていたことからありそうだと感じたのだろう。洋介は菜々美の執念に身震いをしてしまう。

「それで？ 家に来てどうしたの？」

「あ、ああ。家に来てもう一回付き合おうって言うてくるんだよ。諦めきれないって」

「はあ……。あんたもんだ地雷を踏んだわね。それで？ 何て言っただの？」

「前に言ったとおりもう付き合う気はないって。だけどそう言っただけ泣き出して何か様子がおかしくなっただんだよ」

洋介の言葉に瞳は首を傾げる。腑に落ちない所があったようで瞳は手を前に突き出して洋介の口を制止する。

「ちよっと待って。様子がおかしくなっただって？」

「ああ。何か全然会話にならなくなっただんだよ。許してとかぶつぶつ言っただけ涙を流してるんだよ」

「そ、それはおかしいわね……。っていうか怖い」

「だろ？ だから俺、もう焦っちゃって。それでとりあえず部屋に連れてどうにかしようって」

「まあ、そんなのをほっとく訳にもいかないもんね」

「ああ、それでとにかく目を覚まさせないと思って思ってた色々したんだけど……」

「色々って……何かやらしい」

茶化す場面ではないのだが洋介の言葉に瞳は反応せざるを得なかった。もう必死の洋介はそんなからかいを含んだ言葉にも余裕を持つて対処することが出来ない。

「し、してねーよ!」

「それじゃ何をしたの? 具体的に」

「うーんと……まあ呼び掛けるなり手を握るなり……頬を叩くなり

……」

「頬を叩くって……最悪」

「そう! それが問題になっちまったんだよ!」

瞳の言葉に洋介は頭を抱えながら絶叫する。そこにはどうしてそんな行動を取ってしまったんだという無言の後悔が込められていた。「それが問題って言うつまあ、脅されたとか?」

「分かるの!？」

「だってそれしかないじゃん。これを問題にされなくなかったら私と付き合え。みたいな?」

「そう、それ! まさしくそれ!」

全てを見透かしている瞳に感心したのかやや興奮気味の洋介は声が徐々に大きくなっていつていた。瞳に期待しているという様子が見て取れる。

「……本当に地雷ね」

「そうなんだよ。それでまあ一応対策は練ったんだけど上手くいくなかって心配で……」

「それで様子がおかしかった訳ね。これで納得いったわ」

「一応もう現行犯じゃないから証拠はないと思うんだけど……」

意見をもらおうと洋介は自分の見解を話し始める。ここまで色々見透かしてくれる瞳の冷静な頭脳に期待しての行動だった。洋介はもう瞳に心配はかけないとしていた先程の態度はすっかりなくしていた。

「うーん、どれくらいの力で殴ったのか私にはわからないから何と

も言えないけど。傷痕はどうなってるんだろうね？」

「それは大丈夫。もう手の平の跡は消えてると思うから」

「それなら大丈夫でしょ。逆にあっちが脅迫してると指摘すれば反論出来ないでしょ。後はあっちの暴走に気を付けるだけね」

「やっぱりそうか」

自分の考えたとおりだと洋介は自信を持つ。洋介の表情から不安の要素は消えつつあった。

「だけどその暴走に気を付けないと後悔するかもよ。油断しないでね」

「ああ。上手くやるさ」

その言葉を締め括りとしたのか洋介は立ち上がり、食べ終えた食器を流しに運ぶ。時間も気が付けば危ない時間帯。締めに対応しい状況だった。

「ありがとう。自信が出てきたよ」

「いえいえどういたしまして」

「それと朝食ありがとう。美味かったよ」

「うん。そう言ってもらえてよかった」

「それじゃ俺支度してくるからもう少し待っててな」

そう言つと洋介は二階に急いで上がっていく。着替えに歯磨きとやることはまだ残っている。瞳を待たせている以上、急がねばならなかった。洋介は二階に駆け上り、急いで服を着替える。

「時間自体は……こっちもあまり余裕はないな」

時間を確認した洋介は瞳を待たせている上に時間も余裕がないと悟り、支度の速度を緩めることはせずに急ぎに急いで今度は一階に下りてくる。

そして洗面所に向かい、歯を磨く。これさえ済めば最低限の支度は完了する。洋介は口を漱ぐと踵を返し、キッチンへと向かう。

「はあはあ……お待たせ」

「そこまで急がなくても……」

「朝から瞳に走って登校させたくないしな……まあ、これで登校は

歩いて行けるだろ」

「……うん、そうだね。ありがとう」

洋介の気遣いに頬を緩ませた瞳は笑顔を洋介に向ける。洋介は急いだ甲斐があつたところらも頬を緩ませる。

「よし、それじゃ行くか」

「うん。折角余裕作つてくれたんだから無駄にしちゃ駄目だよね」

二人は揃つて玄関に向かい、家を出る。家を出ると隣の河野邸玄関前に数人の奥様連中と共に話に興じている母親の姿を発見した洋介はそのまま家を離れる。

「鍵は母さんがあそこにいるからいいな……よし、行くか」

「うん」

そう言つと二人は並んで通学路を歩く。二人の距離は当初から比べると明らかに近付いていて肩や指が触れ合いそうな所にあつた。

それもこれも洋介が瞳に向ける感情が変わつてきたことが大きな要因だつた。

「……」

「……」

二人は無言で歩いて行く。しかしそこには気まずい雰囲気はなく、ごく自然な落ち着いた雰囲気満ちていた。昔の幼馴染として仲の良かった頃とも少し違った二人の間の空気。それは実に心地よく洋介には感じられ、これから先に控える菜々美との対峙への不安を和らげる。

（やつぱり瞳には敵わないな。守ろうと思つても逆に守られてるんだから）

洋介はそう思つても、そこには劣等感や卑屈な開き直りもなく心地よいまでの信頼感に溢れていた。瞳に不安を悟つてもらえてよかった。洋介はそう感じながら学校への道程を瞳と並んで歩いていくのだつた。



## 第二十章

「それじゃ、頑張つてね」

学校に到着すると瞳は洋介と別れ、自分の教室へと入っていく。それを廊下で見送った洋介は否が応でも勇気を振り絞らないといけない。

洋介は目を閉じ、深呼吸をして心の準備を整える。下駄箱には既に菜々美の靴があったことを洋介は確認していた。そうなる教室内には菜々美がいる可能性が限りなく高い。そしてその表情は恐らく満面の笑みになっているだろう。前日、洋介を追い詰めて自分の言うことを聞かせたのだから楽しみで仕方ない筈。洋介はそう睨んでいた。

（まずは朝の内に菜々美に話があることを伝える。そして昼休みに勝負に出る）

洋介はそう作戦を立てていた。とにかく勝負に出るのは日中がいい。下校時刻後は人氣が少なくなるので危険が増す。そこだけは絶対に避けたかった。

（最悪授業をサボることになってもいい。とにかく菜々美が無茶をしにくい状況に持っていけないと）

頭の中で手順を確認していると洋介の横を幾人もの生徒が通り抜けていく。いつまでもここに立ち尽くしていても仕方ない。洋介は意を決して教室内に踏み込んだ。

（やっぱりいる）

教室に入るなり強烈な視線を感じた洋介は即座にその視線の持ち主に目を遣る。するとそこには予想通り満面の笑みの菜々美がいた。恐らく教室の扉が開く度に今の強烈な視線を向けていたのだろう。そしてすぐにその入ってきた人間が誰かを判断し、場を取り繕っていたに違いなかった。余りに強烈な菜々美の目力は誰にでも察知できるほどでそれを向けられた方からしたら何事かと思ってしまう。

そして今、目標の人物を察知した菜々美は満面の笑みで洋介を出迎えているのだ。菜々美の誤魔化しが通じなかった幾人かの生徒はその表情を訝しげに見ていた。

「おっはよー！ 洋介！」

とうとう笑みだけでは物足りなくなつたのか菜々美は席を勢いよく立ち、扉付近で立ち尽くしている洋介に近付いてくる。洋介にはそれが獲物を見つけた飢えた禽獣のように見えていた。油断すれば一気に捕食される。洋介は気を引き締め、菜々美を迎え撃つ。

「……おはよう」

「元気ないよ、どうしたの？」

「……」

洋介はその原因が何を言うかと言ってやりたかったが、ここで菜々美とやり合うには人目が多すぎると自重し、だんまりを決め込む。そうすると菜々美は勝手に洋介の腕を取って寄り添い、心配する様子を見せる。

「くそつ、朝からいちゃつきやがって」

「よそでやれよ、よそで」

濃密な二人の世界を築き始める洋介と菜々美に、いや洋介に対して主に男子からの敵意の籠つた視線が突き刺さる。優れた容貌に抜群のスタイルを誇る菜々美は当然のように男子からの人気が高い。そんな菜々美といちゃつけるのだからさぞ洋介は幸せだろうという周りの考えとは裏腹に洋介の機嫌は徐々に悪くなる。

（我慢だ我慢。昼休みになれば全て片付く。だけどそうすると周りからは菜々美を捨てた酷いやつだとか、あんな美少女を捨てた愚か者とか思われるんだろうなあ）

今の菜々美は危険だと切り捨てたい一方でその後の周りの反応が気にかかる。洋介は何故菜々美一人のためにここまで自分がかき回されねばならないのかと憂鬱になるが、振ったとはいえ一度は彼女にした以上自分にも責任はあると思い直した。

（ここで中途半端にしたら菜々美のためにも俺のためにもならない。

きちんとしないと)

洋介は恋人気取りの行動を取る菜々美に対して憤り始めた心を無理矢理落ち着かせて菜々美に視線を向ける。

「うつん？ 何？」

洋介の視線を敏感に感じ取った菜々美は可愛く首を傾げながらこちらもまた洋介を見詰める。そんな二人の行動に周りの反応もヒートアップし始める。

「あいつら……いい加減にしろよ……」

「消えろ……高梨よ、永遠に消えろ……」

洋介は先程考えたとおり菜々美に昼休み、時間を取ってもらおうとしたのだが、流石に周りがかうでは言い出しにくかった。そのため、菜々美の手を取り、外に出るしかなかった。

「菜々美！ ちょっと来てくれ！」

「えっ、えっ？ ちょ、どこ行くの！？」

「屋上だ！ 話があるんだ」

洋介は今自らが放った言葉に後悔をした。完全に段取りが違って怒りや焦りといったイレギュラーな感情に洋介の予定は狂わされてしまった。しかしその一方で勢いがついたと言えないこともない。この不測の行動が吉と出るか凶と出るか。それは今の段階では全く見えなかった。

「お、屋上で何をするんだろ……もしかして私、洋介に食べられちゃう？」

勝手なことを想像しては顔を赤らめて身悶える菜々美を見て洋介の頭に余計に血が昇る。自分の方が食べられる寸前なんだよと洋介は心で叫ぶ。菜々美の策を看破したらどうなるのだろうか。そういつた不安がある洋介にはやはり菜々美は恐ろしかった。

(けどまあ、明るい内でよかった。言い出すタイミングがなかったとか時間が合わなくてとかで夕方になるよりもマシだ)

洋介は不安を増す予測外の行動にメリットを見出して心を落ち着かせる。それに菜々美に考える時間を持たせなかったことで凶器の

類も準備していないだろう。とにかく洋介にとって一番不安なのは逆上した菜々美の行動だった。

湧き上がる不安とそれを打ち消す論破。その一連の脳内作業を繰り返しているとうとう勝負の間が見えてくる。

屋上。普段は何も感じない鉄製の扉に洋介は物々しく禍々しい雰囲気を感じてしまう。

「……」

洋介は不安からか黙りこくったままその鉄製の扉を開く。今、何かを話せば不安な心境を曝け出してしまいそうだった。

「……いい天気だ」

鉄製の扉を開き、足を踏み込んだその先には登校してきたばかりなのでわかりきったことだが、青空が広がっていた。わかりきっていたことなのにそんな明るい青空が洋介をこの上なく安心させてくれる。

「うん、いい天気。……周りから見られないかな……？」

一体何を考えているのか菜々美は屋上に出るなり、辺りをきよろきよろと見回す。だが、今の洋介にはそんなことを突っ込む余裕はない。

「話があるんだ」

単刀直入に用件に入る洋介。これ以上のイレギュラーはもう勘弁だった。

そんな洋介の意思が感じられたのかどうか。菜々美はその考えの読めないはにかんだ笑顔で洋介の方を見る。

「は、話って何かな？」

「……まず言っておくけどお前にとっていい話ではないから期待するような目で見な」

「えっ？」

「まあ、簡潔に言えば昨日のお前の要求は却下するってことだ」

「えっ？ ええっ!？」

洋介があまりに淡々と話すので菜々美は反応に困った様子で目を

パチクリさせる。洋介の穏やかな様子と話している内容がどうやら菜々美にはすぐ合致しなかったようである。

菜々美は時間をかけながら反応を戸惑いから驚愕、そして怒りへと変化させていく。その過程までは洋介の想定していたとおりである。後はこの先の菜々美の出方が問題であった。

「ちょ、ちよつと洋介。何言っちゃってんの？ そんなに警察のお世話になりたいの？ 暴行犯だよ？」

「お前の頬見てももう何も残ってないぞ」

「うつ……うつうつ」

洋介の冷静な指摘に菜々美は悔しそうに唸り声を上げる。どうやら言った当人も後で苦しい理屈だと気付いたのだろう。ここでもう脅迫は無理だと引き下がってくれば万々歳なのだがと洋介は思うが、目の前で悔しがつている菜々美の様子を見るに折れるという状況には向かわないだろうなと思わざるをえない。

「だからもう馬鹿な真似は止める」

「止める？ そんなことで止めるぐらいなら脅迫なんかしないよ」

洋介の言葉を聞き入れる様子など露ほども見せず、菜々美は血走った目で洋介を見据えると徐に懷に手を入れる。その動きだけで洋介には嫌な予感がひしひしと感じられた。

「な、何をする気だ？」

洋介は尋常じゃない様子の菜々美に危機感を抱き、徐々に逃げ道を確保し始める。それでも先に屋上へと出てしまった以上、唯一の退路である扉は菜々美の背後にある。まだ襲い掛かる準備をしていないだろうと高を括った故の絶体絶命であった。

「ねえ、何を怯えてるの？ これがそんなに気になる？」

洋介の不安そうな様子を見て取った菜々美は懷に入れた手をゆっくりと外に出す。その手には予想通り刃物が握られていた。

（カッターか……）

菜々美の手にあるカッターを見て洋介はやや安堵していた。ナイフや包丁のような物と比べれば殺傷力は低い。それでも刃物には違

いないため用心は必要だが、その気になればへし折ってやることも可能という点では対処はし易い。

「そ、それで今度は脅す気か？」

それでも刃物は刃物である。どうか無事に切り抜きたい洋介は菜々美の油断を誘おうと弱気に振る舞う。震えた振りをしながら洋介は弱々しく腕で身を守る体勢を取る。

その洋介の様子に菜々美はにやけながらゆつくりと歩き始める。

一步、二歩。元々話し合いをするつもりだったのだから二人の距離はさほど離れていない。すぐに菜々美は洋介の目の前に来るが、決して菜々美は洋介に密着したりはしなかった。自棄になった洋介が襲い掛かってくる可能性を考慮してのことだろう。

（狂気に囚われているようで案外冷静だな。何とかして隙を作らな  
いと）

洋介は間に一人分程の距離を置いて対峙する菜々美を見据えて対策を練る。菜々美の手にはカッターナイフ。もしくは他にも凶器の類を隠し持っているかもしれない。

対して洋介は丸腰。元々朝は菜々美に屋上に来るよう告げるだけのつもりだったので、身を守る武器はまだ鞆の中だ。ここで鞆を開ける素振りなどすればすぐに襲い掛かってくるだろう。洋介にはもはや逃げるという選択肢しか残されていなかった。

「洋介……」

菜々美はそう呟きながら洋介の一挙一動を漏らすことなく見詰めている。これでは逃げるといふ選択肢もなかなか難しくなりそうだった。

（逃げる以外となるとここは一時菜々美の要求を聞いておいて、人目のある所で拒絶するなりなんなりするという手段になるか。……  
ただどあまり騙すような真似は

これ以上したくないな）

洋介は昨日、菜々美の言うことを聞き入れておいて今日それを拒絶するという行動に出た以上、更に騙すような真似はしたくなかつ

た。あまりに形振り構わない策のため後味がよくない。それにあまり度が過ぎると菜々美の方も更に過激になりそうで怖かった。

（そうなるやっぱりは逃げて人目のある所に向かうことを……）

「はあはあ……洋介……さあ、私の言うことを聞きましょうね……」

洋介は突如息が荒くなり始めた菜々美の様子に思考を一時中断し、菜々美の挙動を見守った。するとそこには信じられない光景が広がっていた。

（ナ、ナイフ!?）

菜々美は再び懷に手を入れると今度はナイフを手にしていた。折りたたみ式のナイフを操り、刃を出した時点で洋介の脳内会議は意見が変わった。

（……騙すか）

そう結論を出した洋介は一つため息をつき、菜々美に向けて優しい表情を向ける。そして両手を上げて降参の意を表した。

「参ったよ。そこまで思われてるなんてな。俺の負けだ」

「それじゃもう一回私と付き合ってくれるの？」

「ああ」

「……また後になって裏切る気でしょ」

「そんなことないって。その証拠に……」

疑いの眼差しで洋介を見詰める菜々美に洋介はゆっくりと近づく。それに警戒していた菜々美だったが、動揺から何も出来ずに洋介の接近を許す。

すると洋介は徐に菜々美を抱きしめた。突然の抱擁に菜々美は目を丸くして洋介に包まれている。

「ほらな。菜々美をこうして抱いてやれるし」

「よよよ、洋介!? い、いきなりこんなことしたら……は、恥ずかしいよ」

顔を真っ赤にした菜々美はそう言いながらも抵抗することなく洋介の胸の中で抱きしめられている。その様子は先程までの殺気を纏った姿からは信じられない様である。

（こうしてりや可愛いんだけどな。如何せん嫉妬が激しすぎるし、行動も過激すぎる。ここで揺らいじや駄目だな）

洋介は己の胸の中で大人しくしている菜々美を見て心が揺らぎそうになるものの、心を強く持つて鬼になろうと決心した。そしてその決意を外に表そうと行動を開始する。

「なあ、その刃物。危ないから捨ててくれないか？ 怖くて思いつきり抱いてやれないよ」

「ご、ごめん！ すぐ捨てるから！」

洋介の言葉に応じて菜々美は手に持ったナイフとカッターをその場に捨てる。まずは第一段階成功と洋介は心の中で達成感に酔いしれる。

しかし、まだこれで終わりではない。最終的には菜々美と決別を宣言した上でここを脱出しないといけないのである。ここまで自分を信じて言うことを聞いてくれる菜々美のことを思うと心苦しいが、ここで下手な情けを持てば自分の身を滅ぼす。洋介は鬼になる必要があった。

「菜々美……」

「うん？ 何？」

洋介の呼びかけに首を傾げる菜々美。その仕草に心揺さぶられる洋介だったが、決意は萎えさせない。洋介は思い切った。

「すまん」

「えっ？ …… ひぐうっ！？」

洋介の呼びかけに不思議そうに首を傾げていた菜々美の顔が突如苦痛と驚愕に支配された。一瞬、目を丸く見開き、その後は片目を瞑って苦痛の表情になる。そして身体の方は力を失くしたようにずるずると洋介の腕から滑り落ち、地面に四つん這いの状態になる。

「かはっ…… ぐうううう……。い、痛い…… 痛いよお」

更に菜々美は四つん這いの状態も苦しくなったのか上半身を地面に突っ伏せさせ、尻を上げた状態で悶えている。その様子を洋介はこちらも辛そうな表情で見詰めていた。



（いくら助かりたいからって菜々美の股間を蹴り上げるなんて最低だな、俺。だけどあれだけ密着してるとこれぐらいしか出来ないし。それにすぐに動けると逆に俺がナイフの餌食になっちゃうからなあ）  
洋介は己の凶行に自己嫌悪しながらも正当防衛だと自己弁護する。生き延びるためには仕方なかったのだ。そう結論付けて洋介は菜々美から離れ、扉へと向かう。

「こ、これが洋介の愛なんだね……。い、いいよ。洋介がしたいならいくらでも私を痛めつけて」

「……」

股間を両手で押さえて上半身を地面に突っ伏し、尻を上げるという屈辱的な格好をしながらも洋介に文句や恨み言を言うのではなく、それを愛と受け取ってしまう菜々美に洋介は啞然としてしまう。つい足の方も止めてしまっていた。

「ふ、踏んでもいいし、叩いてもいいよ？　こ、心の準備が出来れば絞められても折られても……」

どんどん過激な発言をする菜々美に洋介は眩暈がしてきた。一体自分がどんな人間だと受け取られたのだろうかと不安になってくる。洋介は今後のためにも危険を冒して再び菜々美に接近する。

「菜々美……あのな」

「な、何かな……早速したいの？」

「い、いや違うし。それにそもそも……」

「そもそも？」

「さっきの負けたって言ったの嘘だし」

「……えっ？」

信じられないといった様子で菜々美は洋介を見上げる。その表情に洋介は少し心が痛む。

「いや、だってああでも言わないとお前ナイフ放してくれなさそうだったし」

「ひ、酷い。嘘ついてしかも暴力振るうなんて」

「ホントだよな。でも仕方なかったんだって……よいしょっと」

洋介は菜々美と話しながらも一方でポケットからハンカチを取り出してナイフとカッターを押収する。

「な、何してるの？」

「証拠品回収。お前の指紋べったりの凶器」

「あっ」

「殺人未遂」

「あう……」

「もうこつから先はわかるな？」

洋介はナイフとカッターをハンカチで包むと鞆の中にしまう。これで凶器を奪っただけでなく菜々美の行動を奪ったことになる。完勝だった。

「それじゃ俺行くから」

「ちよ、ちよつと苦しんでる彼女ほつとく気？」

依然として股間の痛みに苦しむ菜々美はどうにか洋介を引き留めようともがく。しかしもう菜々美には何も引き留めることの出来る材料がなかった。当然洋介の足は止まらない。

「す、すごい痛い。ねえ、洋介。ちよつと見てくれないかな？」

「お前の本性を知る前だったら喜んで診察するんだろうけどなあ」  
もはや洋介は振り返りすらしない。扉に到達し、今にでも屋上を出ようとしていた。その状況を見て菜々美は焦り始める。

「も、もう嫉妬したりしないから。何でも言うこと聞くから。行かないでよ！」

「じゃあな」

菜々美の絶叫を無視して洋介は屋上を出て、扉を閉める。任務完了となった。

「……はあ」

作戦は成功し、身の危機を脱した洋介だったが、思わず出たのはため息だった。そこには安堵したといった様子はなく半ば落ち込んだ様子が含まれていた。

「何かすごい悪いことした気分だ……」

確かに身を守るために必要だったとはいえ女の子に暴力を振るったことは心が痛む。そのせいで達成感も台無しだった。

「あー、もっと上手くやれてればなあ……。まあ、でもこれで菜々美はどうか出来たな」

少々の後悔はあるとはいえ、とにかく懸念だった菜々美の脅迫を解決出来た洋介は行きよりも軽い足取りで来た道を戻っていく。屋上から昇降口へ。もう洋介には今日一日授業を受ける気力はなくなっていた。

「ナイフとカッターもあることだし。今日はサボっちゃうかな」

菜々美の報復があるかもしれない。それを恐れた洋介は自分の身と証拠物件を守るべく家へ向かう。とりあえず今日は切り抜けたが、まだ菜々美が諦めたわけではない。そう気を引き締めて洋介は学校を後にするのだった。

## 第二十一章

「甘い！」

現在午後五時。洋介は自室にて瞳に説教をされていた。ベッドの上に正座する洋介の正面に仁王立ちする瞳の姿はまさしく鬼神の如き形相である。瞳の容姿が優れた美貌だけにその怖さは比類ないものになっている。

「刃物出して脅されたんでしょ？ もう完全に犯罪じゃない。警察に突き出せばいいのよ」

「いや、それはちよつと可哀想だし」

「だからそれが甘いつて言ってるのよ。何かあつてからじゃ遅いのよ？」

瞳の言うことはいちいち尤もで洋介としても反論はし辛い。結果として洋介は説教をされる格好になる。何とも情けない状態であった。

「もう小山田さんは普通じゃないわ。脅迫をしてくる時点でもうちよつとおかしいけど、今度は刃物まで持ち出した。このままだと洋介、死ぬかもよ」

「うっ……」

瞳から突きつけられた死という言葉に洋介は反応を示す。普段であればそんな馬鹿なと笑い飛ばすところだが、現実にはナイフを構えられた以上笑い飛ばすことは出来ない。今や死はごく身近に迫った概念と化していた。

「証拠物件を押さえて、このままお終いつてことにはならないかな？」

「そうならないつて感じたから洋介は授業出ないで家に帰ってきたんでしょ？」

瞳はもつため息をつきながら洋介を諭している。洋介の楽観的観測に呆れているようである。そんな瞳の態度に洋介も事態の深刻さ

を感じずにはいらなくなってきた。

「いい？ 犯罪っていうのはね、自分に降りかからないって思ってたら大間違いなのよ？ 思いがけなくいつかやってきたりするんだから」

瞳は真剣な顔で洋介に持論を述べ始める。そこには自身が男達に乱暴されそうになったという苦い経験が入っているためにかなりの説得力があった。洋介もそこは余計な口を挟まずに神妙に聞いている。

「特に小山田さんの場合は誰でもいいっていう行動じゃないんだから、必ずいつか仕掛けてくるわ」

「やっぱりそうかな……？」

「今はかなり危険な状態にあると思う。だって形振り構わず特攻してそれが失敗に終わったんだから」

「今度は今回以上のが来ると？」

洋介は些か蒼白になった顔色で瞳にそう尋ねる。洋介としてはそこまではいかないと否定をしてもらいたかったが、その希望に反して瞳は静かに頷く。なまじ瞳が冷静に真剣にしているために洋介の落胆も激しい。今後自分の身边を警戒しなくてはならないと思うと洋介は家から出たくないと思っただけだ。

「下手したら……本当に殺されるかな？」

「さあ、そこまではどうだろうね？ だって彼女からしたら洋介を手に入れたいわけだから殺しちゃったら意味ないじゃない」

「えっ？」

洋介は瞳の言葉に訝しがる。さつきは死ぬかもなどと言っていたくせに今度はそこまではどうだろうと言い出す。洋介は途端に瞳の言葉に説得力を感じなくなった。

「さつき瞳、殺されるかもよとか言ってたよな。なのに今言ったことまるで逆だぞ」

「心構えの問題よ。あまりにも洋介が楽観的なこと言ってるからちよっと脅したのよ」

そんなこと何でもないと言わんばかりに瞳はあっさり洋介の疑問を一蹴する。そんな重箱の隅をつつくようなことを言うなと瞳の視線は鋭く洋介を貫く。その視線を感じて洋介の態度はますます矮小になる。

「まあ、脅しただけとは言ったけど完全にも言っていないわよ？　行くとこまで行ったら最終的には殺されると思う」

「さ、最終的って？」

「今すぐ小山田さんが殺すってことは多分ないと思うけど、どうにも手に入らないってなると話は別」

安心させられたり不安に突き落とされたりと洋介は反応に忙しい。特にその顔色はさつきから蒼白になったり晴れたりと変化に暇がない。洋介の疲労は著しく蓄積されていた。

「それで俺はどうすればいいんだよ」

いい加減疲れた洋介は結論を求めようと瞳にくっつく。もはや洋介には自分でどうすればいいのか考える余裕をなくしていた。菜々美の暴走、瞳のあまりに真剣な説教と今日一日はハードすぎたようである。

そんな洋介に瞳は呆れたようにまた一つ深いため息をつく。今日一日授業を受けてその上洋介に付き合っただけで会議を開いているため彼女も疲れているのである。こちらもいい加減洋介に行動を決めてほしいといった様子が窺える。

「だから言ってるでしょ？　警察に行きなさいって」

「……やっぱり結果的にそうするしかないのか？」

「それが双方のためよ。洋介も被害に遭わなくてすむし、小山田さんもこれ以上余計な罪を重ねなくてもすむ」

「うーん……」

瞳の助言に洋介は考え込むものの、既にそういう悩む姿勢を見せる時点で瞳は気に入らない。明らかに苛々した様子で瞳は洋介の決断を待つ。

「……決めた？」

「いや、でもなあ……」

「ねえ、もしかして洋介って女の子から好意を寄せられてることに気が入ってるんじゃない？　それがたとえ歪んでいたとしても」

瞳は辛辣に洋介の内心を指摘する。洋介の煮え切らない態度に業を煮やしての行動のため、厳しい物言いになっている。先程から押されっぱなしの洋介には当然、それを黙って聞くしか道はない。

「凶星でしょ。それならいいわ。決断するしかないようにしてあげるから」

「な、何を言ってるんだ？　決断するしかないって」

先の読めない瞳の言葉に洋介はただただうろたえることしか出来ない。そして瞳は洋介がそんな冷静な判断を下せない状況を活かして行動に出た。

「洋介。私と付き合おう？　そうすれば踏ん切り付くでしょ」

「な、何？　つ、付き合うだあ？」

洋介は瞳のあまりの発言に口をパクパクさせながら動揺を露わにする。もはや冷静な思考が出来ないことは火を見るより明らかだった。

「そう。これで私は小山田さんにとって憎き恋敵ね。今の形振り構わない小山田さんなら私をどうするかな？」

「どうするって……はっ!？」

瞳の言葉に誘導されるように未来を想像した洋介は何かに思い当たったように顔をハツとさせる。そしてその後、その表情を今度は一気に青ざめさせる。その洋介の百面相で瞳には洋介の頭の中が手に取るようにわかった。もはやこの場の主導権は完全に瞳のものとなっていた。

「わかったみたいね。……間違いなく殺されるわね」

「お、お前……こんなことのために何言い出すんだよ……」

洋介は自らの命を懸けて洋介に決断を促そうとする瞳に底知れぬ恐怖を感じた。菜々美といい瞳といいベクトルは違うとはいえ命を軽々しく考えすぎだと洋介は思った。

自らの想いを成就させるためには人の命など簡単に摘み取ろうとする菜々美。洋介を動かすために自らの命をちらつかせる瞳。二人とも洋介の常識の中では完全に逸脱した存在となっていた。もはや人外と言つてもいいかもしれない。洋介には瞳の真意が全くわからなかった。

「まだわからないの？ 簡単なことよ。っていうか私がこう言いだす前に察してほしかったけど」

「な、何？」

「私だつてそんな狂つた相手に立ち向かいたくないわよ。まだうら若い命なんだから。そうなつたら私がこう言いだした理由なんてわかるでしょ」

「……理由？」

もう洋介には深く物事を考える余裕はない。瞳に支配された展開の中でただただ瞳の言うことを鸚鵡返しに口にするだけである。そんな洋介に瞳は最初から何も期待していなかったのか洋介が悩む様子を見せ始めたところで早くも口を開く。

「……私は洋介のことが好きつてことよ。それこそ身を呈して守りたいくらい」

「なっ……」

瞳の告白に洋介はまず驚き、そして顔を一気に紅潮させる。先程からの百面相は一向に収まる気配がなかった。

「聞こえなかった？ それなら何回でも言つてあげる。私は洋介のことが好き。それこそつい最近までの自分の態度を死ぬほど後悔するくらいにね」

「……」

瞳の聞いている方が恥ずかしくなるまでの告白が洋介に降り注ぐ。もう言っている本人よりも洋介の方が紅潮している。そして洋介はその恥ずかしさに耐え切れなくなったのか、それとも思いがけなく憧れの相手からされた告白に頭がついていかなかったのか固まつてしまった。女の子に告白されているのにそれを放置したまま固ま



る男。何とも情けない光景だった。

「……予想外って感じね」

瞳は心外なといった様子でため息をつく。十分にアプローチはしていた筈と振り返るが、洋介に察してもらえていなかったということは不十分だったのだろう。瞳はとりあえずそう結論付けて今の落胆の心地を振り払う。

「それで洋介の返事は？ 告白したんだから返事ぐらい頂戴。まあ、洋介が何と言おうと諦めるつもりはないから結局私は対小山田に動くんだけどね」

瞳は呆然とする洋介の肩を掴み、顔を近付けていく。瞳ほどの美少女がその端正な顔を近付けていくのである。まして瞳の表情は真剣そのものである。この強烈な存在感に洋介はようやく我に返ることが出来た。

「お、俺は……」

「私を危険な目に遭わせたくないから断るって言うのはなしよ。結局私は愛する洋介のために体張るんだから」

瞳は先手を打って洋介の言葉を遮る。洋介の性格を考えれば可能性の高い方向だったが、どうやらそれは当たっていたようで瞳にそう言われるや洋介は口を噤んでしまう。

「さあ、余計なことは考えないであなたの気持ちを聞かせて」

「……わかったよ」

洋介は観念したように頷く。こつも考えを読まれているのでは小細工や誤魔化しは通用しない。というよりもそんなことをしては失礼にも程があると洋介は思い直した。瞳の覚悟が定まっているのならと洋介は素直な気持ちを吐露する。

「俺は昔からずっと瞳のことが好きだ……。だけど何度踏み込んでいっても弾かれるばかりで……」

「……それは本当にごめんなさい」

瞳は苦い過去を思っただけに謝罪する。自らにとっても苦い過去だが、洋介にとってはそれ以上に辛く惨めな過去だったろう。そん

な態度を取って洋介を弱らせ、そこに菜々美が現れたことを思うと瞳は責任を感じてしまう。

「私をもっと早く洋介の良さに気付いてれば小山田さんは現れなかったのにね……」

「いや、結局俺が弱いからこうなったんだ」

責任を背負いこもつとする洋介に瞳は言いようのない不安に襲われた。せつかく両想いで恋人になったというのに一人で責任を感じる洋介を瞳は放っておけない。瞳は優しく洋介を抱きしめ、包み込む。

「二人で何とかしよう？　ねっ？」

「……ああ」

抱きしめられていた洋介は腕を動かし、こちらも瞳の背中に腕を回す。お互いを抱きしめ合う二人は迫りくる不安を共有しようとその腕の力を徐々に強くしていくのだった。

## 第二十二章

互いの想いを確かめ合い、晴れて恋人同士となった洋介と瞳はそのまま洋介の部屋にて今度は対小山田の作戦を練ることにした。とにかく結ばれても菜々美をどうにかしないことには待つのは嫉妬に狂った菜々美によるジェノサイドである。それでは意味がない。自然、二人の顔も恋人同士で同じ部屋にいうのにその雰囲気になつていた。

「さて、それで菜々美の方はどうしようか」

「警察に……といきたいところだけど決定的な証拠がないのよね…

…」

「やっぱりナイフとカッターだけじゃ無理かなあ」

そう言つて洋介は証拠物品として押収してきたナイフとカッターを見詰める。これには当然菜々美の指紋がべつたりと付着しているが、その凶器で洋介を襲つたという証拠には結びつかない。ナイフもカッターも日常で使う機会はあるのだから。

「やっぱり現行犯で誰かに通報してもらいたいわね。目撃者が欲しい」

「だけどそれだと襲われないといけないぞ。それこそ殺されかねない」

「だけど先延ばしにしてもいずれ襲撃されるでしょうね。結局危険は避けて通れないのよ」

弱気な洋介の尻を叩く瞳は闘争心に満ち溢れていた。障害があるほど燃え上がるのは結構だが、時と場合を弁えてほしいと洋介は切に願つた。何しろ命が懸つてしまつていたのである。そこは燃え上がるところではないと洋介なりに判断していたのだが、今の瞳を見ると洋介の消極的な態度は受け入れられないだろう。何とも難儀な状況であつた。

「それでも菜々美だつてそんな単純じゃないんだから人目のある所

で襲ってきたりしないだろう。どうやって仕向けるんだよ」

「それが単純なのよ。意外とね」

洋介の懸念に対し、瞳は自信ありげに答える。何か秘策があるのならはこの危険な作戦に対して前向きになることも吝かではない。洋介はそんな具合にやや身を正面の瞳に対して乗り出す。やる気が少々見え始めた洋介を見て瞳はニヤリと笑う。

「あの手のタイプは目の前で露骨にいちやついてやればすぐにでも沸騰するわ。それこそ周りが見えなくなる程にね」

「そうかなあ……」

「まあ、最初は人目のない所で彼女を煽らないと厳しいかな。でも一度沸騰させれば後は逃げる振りして人目のある所に誘導すればいい。それだけよ」

「……テキトーだな」

洋介は瞳の自信満々の提案に呆れ気味だった。そんなに上手いくとは正直洋介には思えない。まして菜々美はおかしくなった振りをして洋介を嵌めたことがあるほどの策士だ。そんな簡単に思い通りになるわけがない。洋介はすぐさま反対の意を示す。

「無理だよ、そんなの。もっと具体的にするなり別の考えを出すなりしないといけないな」

「うっん、絶対に上手くいく。それに具体的にしちゃうとイレギュラーな事態に対応し辛いし」

「だったら根拠を言ってくれ。今の俺には不安な未来しか見えない」  
「そうね……今の小山田さんの大まかな状況はわかるかな？」

いきなり瞳にそんな質問をされた洋介はたじろいでしまう。そんなことがわかるなら菜々美の所業に振り回されたりはしていない。洋介はやや不満そうな表情で瞳を見据える。

「そんなのわかるわけないだろ。わかってたらこんな状況になつてない」

「そこが駄目なのよ。彼女の立場に立って考えてみて」

「立場って言われてもなあ……」

「はあ……仕方ないわね。いい？　今の彼女は間違いなく焦っているわ」

洋介のやる気のない態度に瞳は嘆息しながら説明を始める。洋介もわかるわけないと言いながらもやはり興味はあるのか聞く姿勢を整えていた。

「焦ってるってどうして？」

「考えてもみてよ。彼女は洋介を脅して、しかもその上その凶器を証拠物件って言われて回収されちゃったのよ？」

「でもそんな決定的な証拠にはならないんじゃない？……」

「それでも彼女は加害者よ？　その辺はこちらが思ってるよりも深刻に考えるわよ」

洋介はそんなものと半信半疑で聞いている。どうしたって瞳の希望的観測にしか感じられないことは否めない。

「それで深刻に考えてる菜々美は今後どうしてくるんだ？」

「そんなの決まってるじゃない。まずはストーキング。そして出るなら不法侵入を試みるでしょうね」

「ええっ！？」

洋介もストーキングぐらいは想定していたが、不法侵入まではいきつかなかった。あまりに突飛に感じられる瞳の予想に洋介は口を挟まずにはいられない。

「不法侵入って……そんなことだいたい出来るわけないだろ。うちには母さん専業主婦だし」

「うーん、そうねえ……。不法侵入っていうよりも洋介の許可外侵入かなあ」

「……何それ」

よく瞳の言わんとしていることがわからない洋介は首を傾げて疑問の表情をする。瞳の方も上手く言葉を選べないもどかしさがあるのか難しい顔をしながらも説明を続ける。

「まず小山田さんは洋介の動向を確認してから洋介の家へ向かう。そしておばさんに洋介と遊ぶ約束があっただけだと思いますかと聞く。」

おばさんはまだ帰ってないと答える。小山田さんはどうしようと悩む。おばさんがうちで待つかと聞く。小山田さんはいいんですかと答えてそのまま洋介の部屋に上がる。はい、これで洋介の許可外侵入成功」

「……ホントだ」

洋介は瞳の話すシナリオを想像していかにもありそうだと思う身震いする。帰ってきて部屋に入ればそこには菜々美がいる。そんな場面を想像すると怖くてどうしようもない。洋介はすっかり青ざめてしまった。

「ど、どうしよう……」

「落ち着いて、洋介。そんなことはおばさんに頼んで小山田さんが来てもうちに上げないようにしてもらえばいいのよ」

「そ、そうだな。わかった」

「それで断られた小山田さんは恐らく次は洋介に直接仕掛けてくるわ」

「し、仕掛けてくる？」

瞳によって不安を取り除いてもらった洋介だが、また瞳の新たな状況予測に不安を投げかけられる。もはや洋介は瞳の操り人形のよきな状態であった。

「小山田さんとしては大事にしないで証拠物件を奪還したいのよ。だけどそれが出来ないとなると次は直接来るわ」

「俺に証拠物件を渡せてか？」

「そう。その時点で小山田さんはもう形振り構わない精神状態になってるわ。……洋介が大人しく承諾しないなら力づくでってね」

瞳は妖しく微笑みながら洋介の腕を掴む。洋介はその瞳の行動に大袈裟なほど驚いて震え上がってしまう。完全に瞳の言葉に吞まれてしまっていた。

「ち、力づくって言うത്？」

「証拠物件の譲渡、及び通報の取り止めを新たに凶器をちらつかせてしてくるわ。……多分凶器はスタンガン辺りね」

「な、何でそこまでわかるんだ？」

「スタンガンなら女の子の護身具として持っても不思議じゃない。あからさまな凶器を持ち出すっていう前回と同じ轍は踏まないでしようね。……そしてそこで彼女は女を利用してくると思う」

「女？」

そこで突然出てきた女という言葉に洋介は不思議そうな顔をする。もうここまで来ると洋介は瞳の言を疑ったり、否定したりはしなかったがそればかりは全くわからないといった顔つきである。

そんな洋介に対して瞳は無言で自らの着衣を乱れさせ、肌を露出しだす。理解不能な瞳の行動に洋介は急いで手で目を塞ぎ、そして後ろを向く。

「な、何やってるんだよ！」

「普通傍目から見ても男と二人きりで女が乱れた着衣をしていたらどう思うかな」

「そ、それはカップルが襲われるかのどちらだろう。それよりも早く服を……あっ！」

洋介は恥ずかしさに顔を赤らめながら慌てていたが、何か思い当ることがあったのか突如口をポカンと開けたまま動きを制止する。瞳はその洋介の反応を見て意を悟ったと判断し、話を続ける。

「叫ばれたくなかったら言うことを聞けっね。しかも今度は多分、ケータイか何かで状況を撮影するわ。前回の暴行の見せかけ事件を反省してね」

「そ、そうなたら一溜りもないな。どうすればいい？」

「そこで私の出番よ。二人で常に一緒にいればそんな真似は出来ない。特に登下校は絶対一緒にするわよ」

「も、もちろんだよ。それでなくても俺達は……」

「うん、恋人同士だしね。一緒に登下校したいもん」

二人は意見があつたなと微笑みながら顔を僅かに赤らめる。それでもそれは一瞬のことですぐに表情を引き締めて問題の対策に戻る。菜々美をどうにかしないことには二人の幸せはやってこないのだから

ら。

「それでこの対策をしてるとね。自然に小山田さんを暴走させることが出来るのよ」

「ああ、多分菜々美は常に俺の動きを見張ってる。そうすると嫌でも俺達がいちゃつくのも見ないといけないからな」

「そう。作戦も上手くいなくて、洋介は私に独占されている。自分がしたいことを私がしている。……我慢は出来ないでしょうね」

瞳はこれで自分の策に菜々美を嵌めることが出来ると妖しく微笑む。その表情はどこか悪女といった危うさを秘めた美しさを醸し出していた。洋介はその危険な美貌に魅せられていた。

「ほら、ボーっとしてないで。その時の対策もしとかないと殺されちゃうよ？」

「はっ！？　そ、そうだな。それでどうしようか？」

「もう、さつきから全部私に丸投げじゃない。むしろ洋介の方が当事者なんだからね」

「ご、ごめん……」

瞳の説教に洋介は小さくなって反省する。恋人同士となつてまだごく僅かな時間だというのに既に二人の関係は決まってきた。

それは洋介が瞳の尻に敷かれるという何とも情けない関係であった。「もう、仕方ないなあ。いい？　対策はね、とにかく人通りのない所は避けるってことよ」

「な、なるほど」

「でも大通りは避ける。そうじゃないと我慢出来なくなった小山田さんが仕掛けてこないから」

「爆発させる余地も残しておく必要があるってわけか……」

洋介は納得したように神妙に頷く。そして拍手をして瞳の深謀を称え始める。そこには多分に瞳のご機嫌を取ろうとする卑屈な考えが含まれていた。

「流石は瞳だ。俺なんかとじゃ格が違う。才色兼備ってやつだな」  
「もう、調子いいんだから。ちよっとは自分でも何か考えてよね」



瞳は口ではそう言うものの表情は緩み切り、もつと言つて、もつと褒めてと求める様子があった。勿論そんなことを口にはしないが、それを敏感に感じ取った洋介は賛辞と拍手を惜しみなく瞳に捧げる。ここ数日で洋介が身に付けた空気を讀む、とりわけ女性に対する空気を讀むという悲しい保身術の成果であつた。

「瞳がいなかったら俺は今頃途方に暮れてたよ、本当にありがとう。……でも早く服を着てくれない？」

「恋人同士だから別にいいでしょ？ それともお子様の洋介には刺激が強すぎたかな？」

「なっ……」

瞳の挑発に洋介は顔を真っ赤にして黙り込み、動きを停止させてしまう。一枚も二枚も上手の瞳に尻に敷かれつつも洋介はこういう恋人同士といった雰囲気のある会話ややり取りが本当に嬉しかった。昔から夢見てきた状況。実に幸せだった。

この心地よい状況が続けていくためにも洋介は菜々美をどうにかしなければならぬ。幸せな将来のために洋介は怯えていた先程までの自分と決別をし、菜々美に立ち向かおうと改めて決心したのだ。

## 第二十三章

翌朝、登校の支度を終えた洋介はこれから取るべき行動を思考していた。今までの生活でこんなに朝から考えることはなかった。せいぜい時間割や特別に持つていく必要がある物を整えるくらいだった。

それがここ最近では瞳や菜々美関連で考えなくてはならないことが大幅に増えた。劇的に変わりつつある日常に洋介は慣れることを強制されていた。

「さて、家を出る前にしとかないとな……」

制服に着替え、鞆を手にした洋介は自室を出て、一階に下りていく。そして母がいるであろうキッチンへと入り、母に声をかける。

「母さん、ちよつといい？」

「何？」

洋介に声をかけられ、振り返る母は不思議そうな顔をする。恐らく声をかけられたことに思い当たる節がなかったのだろう。洗い物をしていた手を止めて洋介を見詰める。

「もし俺がいない間に小山田菜々美って子が訪ねてきても家に上げないでほしいんだ」

洋介のお願いに母はまたもや腑に落ちない顔をする。無理もないだろう。理由もなくただその子を家に上げないでほしいと言われても困る話である。実際に顔を合わせて断るのは母である。訪ねてきた息子の知り合いを追い返すという嫌な役目を承るには納得出来る理由が欲しかった。そう感じた母は洋介に理由を尋ねる。

「どうして？ 友達とか彼女だとかじゃないの？」

「うーん、一応元カノってことになるのかなあ」

歯切れの悪い息子の態度に母は不審な顔をする。元カノという言葉と家に上げないでほしいという言葉から何を想像したのか汚いものを見る目で洋介を見詰める。その母からの無言のプレッシャーに

洋介はたじろぐ。

「か、母さん？」

「洋介……あんたその子に何やったの？」

「えっ？」

母からの質問に洋介は戸惑う。元々お願いをしてそれであつさり済ます予定だったのだからここまで話をする筈ではなかった。しかもその上詰問されるなど全く想定外であつた。洋介は答えの用意をしていない質問にすぐに反応することが出来ない。

戸惑う洋介に母は何を思つたのか、洗い物の途中であつた姿勢を正して洋介に正面から対する。その母から感じる重圧に洋介はじりじりと押され、この場から離脱したいという意思を表すかのように後退を始める。

「待ちなさい」

「うつ……」

微妙に逃げ腰になつていた洋介の腕を母ははつしと掴み、逃亡を阻止する。その表情は至つて冷静な落ち着いたものであつたが、それだけにその胸中が掴み辛く洋介に得体の知れない恐怖を与えていた。

「洋介、ちよつとそこに座りなさい」

そう言つて母は洋介を引つ張り、キッチンの椅子に座らせる。そして自身もテーブルを挟んだ向かいに座る。まるで尋問のような雰囲気洋介は落ち着きを失つてしまう。

「ちよ、ちよつと！ 俺これから学校だつて」

「そんなのどうでもいい。それよりもあんたには教えなきゃいけないことがあるわ」

洋介は何言つてると反抗したかったが、母の目はどうみても本気であつた。使命感や責任感に燃えたその瞳はそう簡単には洋介を解放しないという意味が明確に表れていた。洋介は言い方を誤つたと思わず天を仰ぐ。

「さあ、洋介。あんたには親として倫理を教えてあげないとね」

「だから誤解なんだって。つーか母さんの深読みと早とちりだよ……」

洋介は母に対してそう反論してみるが、もう無駄だろうと半ば諦めも入っていた。時刻はもう制限時間一杯。今出ないと遅刻という状況であった。

洋介がそう時間を確かめた時、ふと頭によぎることがあった。そしてそれは母からの解放を実現出来る可能性を秘めていた。

（そういえば瞳と一緒に登校するんだから、遅いと思ったらあいつが来るな）

洋介は拘束からの脱出を確信し、勝利の笑みを浮かべる。母への依頼は失敗に終わりそうだが、とにかくここで登校を足止めされてしまうよりもマシである。今、瞳を一人で登校させては菜々美に襲撃される恐れがある。それを阻止するためにも学校へ行くことは絶対に必要であった。

（瞳、早く来てくれ！）

洋介は天に祈る心地で援軍の到来を待つ。孤立無援の絶体絶命状態に陥っている洋介には瞳の訪問という援軍以外に脱出の術はない。ここで無理矢理脱出を図れば後でどういう仕打ちを受けるかわからない。最悪夕飯の支度がされていないという状態になるだろう。いや、それどころか家に入れてもらえないかもしれない。それを想像すると無理矢理逃げ出す方策は絶対に取れなかった。今の洋介にはもう自ら行動を起こすことは出来なかった。

「それじゃまず洋介にその小山田菜々美さんだっけ？ その子のことを説明してもらおうかな」

「……」

「ちょっと、洋介？」

「……」

「黙ってないで何かいいなさいよ」

「……」

母の呼びかけに洋介は沈黙を貫く。ここで下手なことを話すより

ももうすぐ来ることが確実な援軍に頼る方が得策である。洋介は針の筵に座らされながらもひたすら我慢を貫く。洋介に今出来ることは心の中で祈ることしかなかった。

「洋介！ あんたいい加減に……」

「ごめんくださいーい」

母が洋介の態度に怒りを爆発させる寸前、ようやく待ち侘びた援軍が到来した。昔から高梨家とも関わりの深い隣家のお嬢さんの登場とあつては母も遠慮せざるを得ない。これぞ洋介の練り上げた必殺の策であつた。

その必殺兵器は玄関から進入し、廊下を歩いてキッチンへと入ってくる。瞳にとっては勝手知つたる高梨家である。もう朝の時間といえどどこに誰がいるかというだいたいのパターンを熟知していた。瞳は迷いは全くないといった様子でキッチンにいる洋介を発見する。「あつ、まだこんなところにいる。早く行かないと遅刻だよ？ 早く行こう」

「あ、ああ。そうだな。それじゃ母さん、そういうことで……」

瞳という援軍に守られながら洋介はそそくさと立ち上がったキッチンから撤退しようと目論む。だが、母は事が事だけに納得するまで逃がさないとわんばかりに体を乗り出して洋介の腕を掴む。

「待ちなさい！ まだ話は終わってないでしょ！」

「ちよつ、母さん。遅刻しちまうって」

「そんな遅刻なんかより大事な問題でしょ。いいから座りなさい！」  
凄まじい剣幕で洋介を足止めする母は逃がす気など微塵もなさそうだった。洋介は戸惑った様子で瞳を見るが、瞳の方もこれは難儀だと言わんばかりに天を仰ぐ。

何と言つても洋介は瞳を当てにしてこの場を乗り切ろうとしていたのである。それが頓挫した今、洋介は潔くもう一度着席する他なかった。

「……わかったよ。座りやいいんだろ」

やれやれといった様子で着席する洋介を見て、母はその態度に不

本意そうではあったが一つ頷き、掴んでいた手を離す。洋介は軽いため息をつく。瞳を見遣り、先に行けと促す。もはやこの場から脱出することがかなわなくなった以上、瞳までここにいる必要はない。確かに瞳を一人で登校をさせるのは不安があるが、遅刻もやはりまずい。それに菜々美もまだ二人が付き合い始めたことは知らない筈で危険性は洋介に比べればさほど高くない。そう判断して洋介は瞳に一人で登校してもらおうと決断したのだった。

しかし、瞳は洋介の眼から何を読み取ったのか手近な椅子を引くとそこに着席する。予想外な瞳の行動に洋介は口をあんぐり開けて放心してしまう。

「瞳ちゃん、あなたは別にここに残らなくていいのよ。話があるのはこのバカ息子にんだから」

当然のように母が瞳をそう諭す。関係のない瞳をここに残して遅刻させては申し訳ない。母はそういつた配慮を見せるが、瞳はそれに対してもお構いなくといった様子でそのまま座っている。洋介にはもはや瞳が何を考えているのかわからなかった。

「お、おい。瞳、遅刻しちゃう……」

「いいの。それより洋介の誤解を解いて小山田さんを上げさせないようにするのが大事」

瞳はそう洋介に自身の考えを話す。洋介としても菜々美という言葉が出てきては強く瞳に当たれない。結局洋介の身に何か起これば、恋人となった瞳にも放っておけなくなるのである。二人の問題である以上、洋介はもうこれ以上何も言えなかった。

しかし洋介が納得しても母はそうはいかない。お隣の娘さんに遅刻をむざむざさせるわけにはいかない。どうにかして瞳に登校させようと考えているものの、肝心の本人が動く気はないと言わんばかりに自分を見つめていては何ともし難かった。結局瞳は二人の同意を得て、この高梨親子の会議に参加することになった。

「はあ……それで何だったかしら？」

「俺が母さんに小山田菜々美って子が家に来たら、家に上げないで

ほしって話」

「そう、それ！」

手で頭を押さえながら議題を確認した母は萎えていた怒りを一気に持ち直して洋介に吠え掛かる。瞳の登場によって少しは収まるかと思った母の剣幕は尚健在であった。洋介にとっては嫌な展開である。

「一体どういふことなのよ！ それって要するにあんたを忘れられなくて元力ノが縋ってきてるってことでしょ？ それを会いもしないで追い返せって、酷過ぎるじゃない」

母は今にも洋介に飛び掛かりそんな勢いで捲し立てる。言ってもないことを勝手に想像して責められるのは洋介にとってはいい迷惑である。しかもそれを否定する余地も与えず、一方的に糾弾しようというのだから性質が悪い。洋介はもうお手上げ状態であった。

だが、ここで先程とは違った展開が挟み込まれる。今、ここには新たな登場人物が出現しているのである。その新キャラであるところの瞳は拳手をして母の剣幕を遮る。

「おばさん、ちょっといいですか？」

「何？」

母は血走った眼で瞳の方を向く。その形相に何か過去にあったのだろうかと疑いたくなるが、瞳はその追求したい欲求を堪えて母に自身の考えを述べていく。

「まず小山田さんなんですけど、洋介とは確かに付き合ってたんですけどもうそれは終わったことなんです。そこまではおばさんの考えてるとおりなんですけど、今は小山田さんがしつこく洋介に付きまとして迷惑かけてる状態にまで達しているんです」

「……そうなの？」

瞳の話を聞いて母は一気に落ち着いたようで、静かに洋介の方を見る。洋介は瞳と自分に対する態度の差に納得がいかないものの、ここで場を壊す必要はないと大人しく頷く。

「それに告白すると今、洋介は私と付き合ってるんです」

「あ、あら。そうなの？」

瞳の告白に母はいやらしく微笑みながら洋介の方を見る。喜怒哀楽が激しいなと洋介は母の百面相に呆れながらも機嫌が直ってくれたならそれは重畳と黙っている。嗜好きな近所のおばさんみたいでいい感じはしないが、怒りにまかせて一方的に糾弾されるよりはマシである。瞳との交際を深く突っ込まれない限りは。

「それなのに小山田さんはそれが納得出来ないって言って洋介に復縁を迫ってるんです」

「あらあら、洋介も随分人気あるのね。全然知らなかったわ」

瞳の言葉に母は洋介をじろじろと見詰める。まるで品定めされているかのような感覚に洋介は落ち着かない。まさしく丸裸にされるかのような分析ぶりであった。そしてその分析は完了したのか母は首を傾げながら視線を洋介から外す。

「……駄目だわ。見慣れちゃってるからなのかわからないけど私には洋介の魅力が理解できない……」

「……」

母の辛辣な言葉に洋介は勃然と怒りが湧くものの、もういい年した、しかも実の母に男としての魅力を理解してもらっても扱いに困る。実に複雑な心境だった。

「そんなことどうでもいいから、話戻して」

洋介は脱線しかかった話の流れを元に戻そうとする。このまま放っておけばこの後、洋介は男としてどうなのかという論議に移りかねない。はつきり言って時間の無駄な上に居たたまれない。洋介はその外面以上に必死だった。

「そうそう、それで小山田さんが洋介を脅迫してまで復縁を迫って来たので、これはいけないと洋介はおばさんに頼んだわけです」

「それで勝手に家に上げないようにつてことなのね。なるほど……」

瞳の話を聞いて母はようやく考える段階にまで至った。洋介が話してもただ早合点をして洋介を責めるだけだったのにこの扱いの差はどうかと洋介は憤慨するが、話の持っていき方が下手くそだった



のかとすぐに反省する。実に喜怒哀楽が激しく洋介は不安定な状態だった。

「……わかったわ。まあ、洋介に確認取らずに勝手に上げるのもおかしい話だしね。それじゃ小山田さんが来たら洋介がまだ帰ってないからって帰せばいいのね？」

「はい、それをお願いします」

「何か簡単に話が済んだなあ……」

無駄に叱責を喰らった洋介としては落ち込むのも無理はなかった。ただでさえ菜々美の脅威に不安を覚えているのというのにスムーズに話が進まないのでは心も落ち着かないであろう。洋介はまだ朝だというのにひどく疲れてしまっていた。

「それであなた達学校はどうするの？ もう完全に遅刻だけど」

「勿論今から行きますよ。ねえ洋介？」

真面目くさった瞳は洋介にそう促すが、疲れ切った洋介にはそれに賛同する気力がなかった。ついつい仮病を使いたくなってしまふ。

「何か俺、頭が痛くなってきちゃったよ」

「ちよつと洋介、何言ってるの？ ほら、早く行こう？」

どうみても仮病だと悟った瞳は洋介の腕を掴んで無理矢理立たそうとするが、所詮女の子の力では脱力し、立つ気のない男を起こすのは難しい。

「洋介！ 馬鹿言ってるんで早く立ちなさい。サボるなんて許さないわよ！」

「あー、頭痛い。体に力が入らない……」

洋介は額に手を置きながらそう呟く。確かに実際頭は痛いわけだが、それは自分の言い分を聞こうとしない母に対する皮肉であって体がどうこういうものではない。そして体に力が入らないのも洋介の気の問題であつた。所詮言い逃れなど出来ない。陥落は時間の問題であつた。

「洋介！」

「いいわ。瞳ちゃん。今日はもう休ませましょう」

いよいよ怒りを爆発させた瞳に母は意外にも考えを洋介の希望を叶える方向へと転換した。これには瞳もそして当の本人である洋介も驚く。

「お、おばさん？」

「いいからいいから」

不服そうな瞳を母は手で制しながら洋介に優しい笑みを見せる。

洋介にはその優しい笑みが逆にそれまでの怒りの表情よりも何故か恐ろしく感じられ、思わず身震いしてしまう。

「洋介。辛いなら無理しなくていいのよ。ゆっくり寝てればいいわ」

「あ、ああ」

「洋介は安心して眠ればいいわ。私がその隣でちゃんと添い寝して看病してあげるから」

「いいっ!？」

母の口から飛び出した思わぬ発言に洋介は驚きを禁じ得ない。何が悲しくて高校生の男子が母親に添い寝なぞしてもらわなくてはいけないのか。洋介は即座に拒否を申し出ようとする。

「そんなの……」

「洋介ってば高校生にもなってお母さんに添い寝してもらおうの？  
かつこ悪い」

拒否しようとする洋介の言葉を遮って今度は瞳が間延びした腹の立つ言葉遣いで洋介をからかう。どうやら瞳は母の策を見抜いたようにでそれに同調しようと企んだようである。息の合ったコンビネーションに洋介は振り回され始めていた。

「ひ、瞳！ お前、何言ってやがる！」

「だってお母さんに添い寝って……ぷぷっ」

「背中とんとんしながら寝かせつけてあげるからね」

瞳と母は邪悪な笑みを浮かべながら、洋介を見詰めている。これは十中八九よくない流れになると感じた洋介はもう取るべき道を決められていた。

「わかったよ。行けばいいんだろ。行けば」

「別に無理しなくてもいいのよ?」

「うるさいよ」

もう自棄になった洋介は荒々しく鞆を引つ摺むと瞳を連れて玄関へと向かう。それを見送る母と洋介に連行される瞳は互いに目線を合わせると親指を立てて、作戦成功の喜びを分かち合う。

「いい加減自分で歩けよ」

「はいはい、分かりましたよ」

ようやく自分で歩き始めた瞳は洋介の横に並ぶ。登校するため二人揃って歩いて行く姿を見守った母はお似合いだと一人微笑むのだった。

## 第二十四章

既に学生服の人影は見当たらない通学路。洋介と瞳は開き直つてのんびりと登校していた。もう時刻は一限目も半ばの時間帯である。今から急いだところで終わりがけの一限目に滑り込むだけなので二人はいっそのこと区切りよく二限目から出ようと相談していたのだった。

それに二人には家の外に出た以上、対策をしなければいけないことがあつた。今や形振り構わない状況になりつつある菜々美への対策である。

「そんでどうしようか？」

洋介は最初から瞳にお任せと言わんばかりのテキトーな態度で瞳に話を振る。そんな洋介の態度にむしろ自分がその問題の中心だろうと瞳は呆れるが、巻き込まれてしまっている以上、対策を練らないと二人は破滅である。瞳は洋介の言うまま対策を考えざるを得なかつた。

「ちよつとは自分でも考えてみてよ。二人の問題なんだからね」

「すまんすまん」

瞳の苦言に軽く謝る洋介。その態度を見るに結局自分一人で考えるんだろつなと瞳はため息をついてしまう。

だが、洋介の考えというのは基本的に甘い。菜々美を振り切るこゝとが出来ずにここまで事態を深刻化しているのも洋介の甘さから来ている点は否定出来ない。菜々美と完全に決別するという意思が洋介には持てなかつた。元来気の優しいところのある洋介は必死に縋る菜々美を切り捨てる事が出来なかつた。強硬に菜々美を振りきればこの事態を回避出来たかもしれない。瞳はつくづくそう感じていた。

（でもそういう優しいところが洋介のいいところでもあるんだけどね）

それでも瞳は洋介の甘いところは決して欠点にしなければならないとは思わなかった。現に何度も気持ちを示し続けてきた洋介をその都度冷たくあしらったにもかかわらず、洋介はその後、気持ちを受け入れてくれた。洋介が甘くなかったら実現しなかった展開である。

（言い換えれば度量が広いのかな。まあ、良く言えばだけど）

瞳はそんな彼の性質のため息をつきつつも認めるかのような微笑みを見せる。これから先もこの性格ゆえに危ういことになるかもしれないが、その度自分が助けてあげようと瞳は決意した。それが洋介に対して冷淡に当たった時期の償いであると思った。

「とりあえず二人は絶対に一緒に行動。これが身を守る大前提ね」

「そうだよな。一人になったらまた菜々美に付け込まれそうだ」

洋介はもう何度痛い目を見たかと苦笑いをする。とにかくそのいずれも一人でいた時に起こったために洋介はこの提案には賛成だった。

「付け込まれるぐらいで済めばいいけどね。下手したら命を持つてかれるわよ」

「そうなんだよなあ……」

既に凶器をチラつかされた以上、少なくとも洋介は本気で身の危険を感じないといけない。そのためには一刻も早く菜々美を堀の向こうに送り込まないといけない。しかしそれが難儀であった。

「小山田さんを自滅させるのが一番安全なんだけど……。それには逆に危険に身を晒さないといけないのが問題よね」

「何度打ち合わせしても不安は残るよなあ」

「他に手があればいいんだけど」

「……実はないこともないんだけどな」

「えっ!？」

瞳は苦慮に顰めた顔を一気に驚愕へと変化させる。洋介の口から飛び出した他の手がないこともないという言葉に過敏に反応した瞳は洋介を押し倒さんばかりの勢いで洋介に詰め寄った。

「ちょ、ちょっと! 何で他に手があるなら早く言わなかったのよ

!？」

「く、苦しい……。瞳、手を離してくれ……」

洋介の首根っこを掴んで揺さぶる瞳に洋介は弱々しくギブアップを宣言する。瞳の手にタップして離すよう促す様はとてもいい手を持つているようには見えない。

それでも瞳にとっては喉から手が出るほど欲しい情報である。洋介から手を離れた瞳はさあ疾く話せと洋介の目を鋭く見据える。そのあまりの威圧感に洋介はかえって話し辛くなっているということ。瞳は全く察せていない。洋介は一気に自分の意見に自信を失い、吃りがちになってしまう。

「うつん？ どうしたの？ 早く言ってみてよ」

「あ、ああ……」

瞳の催促にも洋介は中途半端な頷きしか返せない。ただ引き攣り笑いをしながら頭を掻くだけである。

（い、言い辛い……。なんか下手なこと言ったらものすごい罵倒されそうな雰囲気だ……）

洋介はある程度は自分の提案に自信を持っていたものの、瞳の思わぬ期待の前に言い出し辛くなってしまっていた。異常な期待だけにそれを裏切られたと瞳が感じたらどうなってしまうだろうか。洋介は一気に臆病風に吹かれてしまっていた。

「ちょっと、早く言いなさいよ。気になってしょうがないじゃない」

「あ、あのな……。今思っただけだけどそこまでいい手じゃないかも……」

しきりに催促する瞳に対して洋介は下手に出る。最初に期待値を下げておけば、もし本当にくだらない手だと思われてもそこまで期待を裏切らないで済むだろうし、もしいい策だと思われたら期待値の低さから余計に褒めてもらえるかもしれない。実に矮小な態度だが、今や瞳の尻に敷かれつつある洋介にとってこれは将来の像かもしれない。しなかった。

しかし、そんな洋介の態度は瞳には違う風に取りれていた。その

出し惜しみにすら見える様子は否応にも瞳の期待を増していく。残念ながら洋介の期待した効果とまるで逆方向へと向かってしまっていたのである。

洋介も最初の内は自らの態度がさぞ瞳の期待値を下げたであろうと思っていたが、むしろ輝きを増す瞳の目を見て逆効果であったことをすぐに悟った。もはや洋介には逃げ場はなくなっていた。こうなるともう自らの思案を素直に披露するしかない。洋介は腹を括った。

「……わかった。それじゃ話すぞ」

「うん……」

通学途中にも関わらず、二人は真剣な顔で立ち止まり、会議を開く。場は道端。しかし、もう学生は登校している時間帯であり、通路には人通りは比較的少ない。二人は静かな環境であることも幸いして快適な会議を開ける状況にあった。

そして洋介が口を開きかけた今、遅刻している立場でありながら足を止めて悠々と二人きりの会議が始まった。

「俺の考えてるのはな、要するに菜々美に嫌われるようなことをすれば全部片付くんじやないのかってことなんだけど」

洋介はまず簡潔に自論を説明した。細かい事柄を省いたわかりやすい説明ではあるが、向かい合う瞳の反応はあまり芳しくない。洋介はわかりにくかっただろうかと無駄な心配をする。だが、むしろこれ以上どう簡潔にすればいいのかと洋介の方がわからなくなってしまう。とにかく洋介は瞳の意見を待つしかなかった。

「ど、どうかな？」

「うーん……結論から言えば、駄目だと思う」

「ええっ!？」

会議開始から数十秒、いきなり腹中の策を駄目出しされた洋介は驚愕と落胆に叩きのめされる。

洋介としてはそれなりに自信はあったが、瞳の否定的な態度を恐れて自信なさげに振る舞った。あくまで振る舞ったのであって、洋

介としては受け入れられるだろうという考えが頭の中で多数派だった。

しかし、それがものの僅かの間に否定されてしまったのであるからその衝撃は計り知れない。洋介は完全に魂を飛ばした放心状態になってしまっていた。

「あのねえ、洋介。洋介は小山田さんの状態をよくわかってないんだよ。今の小山田さんは何したって自分の都合のいいようにしか解釈しないんだよ？ 嫌われるような行動や言動をとったって、結局小山田さんを喜ばすだけ。無駄」  
「……」

瞳が反論しているが、今の洋介には全くそれが頭に入っていない。自己の防衛のために否定的な意見は全て理解する前に都合よく排除されていた。傷付き、繊細になった洋介の心に瞳の反論は致命傷を与えかねない。今の洋介は人形同然の無意識状態だった。

「むっ、洋介！ 聞いているの？」

「……いつつ、いたたたたたっ！」

まるで反応の返ってこないことを訝しんだ瞳は容赦なく洋介の耳を振り上げる。あまりの激痛に洋介の意識は無理矢理肉体に帰させられた。まだ癒しきっていない心に瞳の苛烈な意見は致命傷になりかねなかったが、もう洋介には逃げることは出来なかった。今から洋介は自信喪失になりかねない状況に晒される立場となった。

「私の話聞いてた？」

「あ、ああ。聞いてたよ。俺の意見が甘いつてことだろ？」

「具体的にどう甘いのか？」

「それは……」

無意識下で瞳の声を拾っていた洋介だが、細かい所までは網羅していない。それを聞いてしまっただけは心が軋むのだから聞くわけがない。洋介は瞳の詰問にしどろもどろになりながら、立ち向かう。

「ほら、聞いてない。これだから反省がないんだよ。このままじゃ本当に危ないわよ。小山田さんに簡単に嵌められそう」



「……」

事実二度も窮地に追い込まれた前科がある洋介は何も反論出来ない。いよいよ洋介は瞳の言葉のサンドバックと化してきていた。

「仕方ないわね……。いい？ 洋介が言うように小山田さんに嫌われる真似してもトランスした彼女には都合のいいようにしか解釈されないのよ」

「仮に殴る蹴るをしたとしても？」

「多分嬉々として殴られ続けるでしょうね……」

「うわぁ……」

実際にその光景を想像すると洋介は全身に鳥肌が立ったような感覚がしていた。洋介は実際に自らの腕を見てみた。やはり鳥肌が立っていた。非常にある意味恐ろしい光景なのだから無理もない。

「なんか蹴る足とかにしがみ付かれそうで怖い……」

「ボコボコにされながらも嬉しそうに笑いながらしがみ付く女の子……。ちよつとしたホラーね」

二人は更に具体的な光景を想像して震え上がる。出来の悪いホラー映画なんかより余程恐ろしいものだった。二人はすぐさま洋介の意見を却下する。もう洋介にはその意見への未練やプライドなどはあつさり放棄していた。

「そ、それ以外に何か案はある？」

「……ないな」

結局自身の身を危険に晒して菜々美の暴走を誘うしか道はないのかと洋介は落ち込む。下手をすれば落命とあつてあまり取りたくない策だが、これ以降も菜々美といういつ爆発するかわからない危険物を抱えていきたくはない。洋介は覚悟するしかなかった。

「やっぱり暴走を誘うしかないか」

「そうね……危険だけどやるしかないわ」

一度覚悟が決まればその後は揺るがない。洋介は腹を括ってどう菜々美を誘い出すかを考える。幸い足を止めていたこともあつて学校まではまだ距離があるし、最悪帰りでも翌日でもいいのである。

ただし、早めに片をつけたいものではある。自由なようで自由でない難しい問題であった。

「まあ、作戦が出来上がったらまた連絡するわ」

「うん。それじゃ学校に向かいますか」

策を最終決定した二人は学校に向かって歩みを再開する。学校に入ればそこには菜々美がいる。いつイレギュラーな事態が起こってもおかしくはない。二人は気を引き締めながら学校へと向かうのだった。

## 第二十五章

校舎から鐘の音が響き渡る。ちょうど一時限目の終わりを迎えた所で洋介と瞳は昇降口へと入ってきていた。下駄箱に靴を入れて廊下に足を踏み入れると二人は気を引き締めた表情でお互いに見つめ合う。

まだ授業の終わりたてということもあってか昇降口付近の廊下には人の気配はない。二人は辺りを警戒しながらお互いに近寄り、抱きしめ合う。

「ここからは危険地帯だな。……気を付けろよ」

「それはこっちのセリフだよ。洋介の方が危険なんだからね」

二人は別れを惜しむかのように抱きしめ合いながら視線を重ねている。ほんの僅かな時間しか許されない二人だけの世界。菜々美をどうにかしない限り、最高でも仲の良くなった幼馴染で留めておかないと身の破滅が迫る。疑惑ならともかく決定打を見られては菜々美の暴走は避けられない。

「もうすぐ誰か来ちゃうかもね。……離れないと」

「……そうだな。ホントはバカッフルみたいに人目なんか気にせず、いちゃつきたいんだけどな」

「いいの？ そんなこと言っちゃって。小山田さんをどうにかしたら私、ホントにやるよ？」

「おう、望むところだ」

二人でそう言うて笑い合う。そしてそのやり取りが区切りになった。徐々に近付いてくる足音と声。どうやら教室から出てきた生徒達が二人のいる方に向かってきているようである。

洋介と瞳はお互いに頷き、ゆっくりと距離を空ける。そしてちょうどその瞬間、二人の視認出来る範囲に人影が現れたが、その人影が見知らぬ男子生徒だったことに二人はホッと胸を撫で下ろす。

「じゃあな」

洋介はこれ以上の長居は禁物と瞳に背を向け、歩き始める。

「洋介はこれからどうするの？」

瞳は最後にこれだけは聞いておくと洋介の背中に質問を投げかける。その質問に洋介は顔を瞳の方に向けて少し考える。

「そうだな、とりあえず俺は直接教室に行くわ。瞳は？」

「私は一応、職員室に寄ってから教室に行こうと思う」

洋介と瞳はクラスこそ別だが、同じ学年ということで教室は同じ階である。二人とも同時に教室に向かつてはいらぬ推測をさせてしまふことになりかねない。瞳はそこを慮ったのか洋介とは別の行動を取ることにした。同時に向かうよりは数分とはいえ時間差があった方が安全だろう。

「そうか。それじゃ俺は帰りにでも遅刻届を出すかな」

「面倒臭がつちゃ駄目だよ。ちゃんと提出しないと」

「はいはい。わかりましたよ」

洋介はそれだけ言い残すと再び顔を前方に向け、歩みを再開する。目指すは自分の教室。何故遅刻したのか菜々美を筆頭に友達等に聞かれるかもしれない。洋介はそこを予測して理由を練りながら歩いていく。

（とりあえず一番自然なのは寝坊だな。先生への印象は最悪だが……）

友達へ最も納得させやすく根掘り葉掘り突っ込まれないのはこの理由だが、それでは教師等学校側にいい印象が持たれない。かといって腹痛などの体調不良を持ち出せばいらぬ心配をされそうで心苦しい。洋介は菜々美問題以外のところでも心労が溜まりつつある。早く解放されたかった。

結局洋介はいらぬところでこれ以上消耗するのはごめんだと遅刻の理由を寝坊と決めて、教室へと急ぐ。ただでさえ遅刻なのに二時限目にまで遅れるのは避けたい。それも瞳のように職員室に向かったわけでもないのに遅れるというのは最悪である。余計な叱責は誰しも頂きたくない。洋介は急いで廊下を進み、階段を昇って教室の

前までやってくる。

しかし、その勢いはどこにやら洋介は教室の前まで来るとその足取りを止めて、一つ深呼吸を入れる。

（菜々美はどんな様子だろうか。……まあ、とにかく油断せずにかつ自然に振る舞わないと）

洋介はそう心の中で方針を定めて、覚悟を決めると一気に教室の扉を開け放つ。そして恐る恐る教室内に足を踏み入れた。

「お、おはようございまーす……」

遅刻をした日の挨拶は誰しも小さくなってしまう。罪悪感が込み上げ、自然声だけでなく行動も小さくコソコソしがちである。洋介は目立たぬよう自身の席まで素早く移動をする。

だが、その素早く移動をしたのがいけなかった。そんな不自然な動きをしては見つけて下さいと言っているようなものである。本当に見つかりたくなければそこは何事もなかったかのように普通に、そして静かに移動をするべきであった。洋介の高速移動が目に入った数人のクラスメイトが洋介に気付き、声をかけてくる。

「よお、高梨。どうしたの？ 遅刻なんかほとんどしないのに」

「ああ、ちよつと寝坊してな」

洋介は事前にシミュレートをしておいてよかったと心底思った。

洋介がそう答えるとクラスメイト達はそこにはもう興味がなくなつたのか一時限目の内容がどうだったとか話はもう流れていつていた。このまま遅刻の件は皆の頭から忘却の彼方に消えていつてほしいと洋介は願った。ここでその話がずるずる続いて、他クラスから瞳の件も伝わって話が絡まり合うのが最悪なパターンだったが、どうやら回避出来そうである。洋介は一つ安堵のため息をつくと、やっと余裕が出来たのか菜々美の姿を探し始める。

（えーと菜々美はつと……今は教室にいないみたいだな）

洋介が菜々美の姿を探しても休憩時間ということもあるのか姿は教室内にはなかった。どこか拍子抜けした洋介だったが、同じクラスなので必ず接触する機会がある。気を引き締めておかないと隙に

付け込まれかねない。洋介は菜々美不在の今の内から何事にも対処出来るよう心構えをしておく。

（休憩時間は勿論、授業中も一応警戒しておかないと。今の菜々美は何を仕出かすかわからないからな）

こうして気を引き締めていた洋介だったが、授業開始の鐘が鳴り、教師が教室に入ってきたというのに向に席にその姿を現さない菜々美に不審を感じた。単に何か頼まれ事でもしているのかもしれないし、トイレが混んでいたのかもしれない。それでも洋介には嫌な予感がひしひしと感じられた。

「……なあ」

洋介は小さな声で隣の席の男子に声をかける。もう教師が入ってきて出欠をとっているだけに辺りを憚って小声でやり取りを出来るよう体も男子の方へ少々乗り出す。

「何だ？」

「今日って小山田休みだった？」

「ああ、休みだった」

「そうか……ありがとう」

洋介はその事実を聞くと軽く礼を言って体勢を元に戻す。そして目を瞑って状況を整理し直した。

（今日は菜々美は休み。それで俺は遅刻していたから登校時間や一時限目の一部まで家にいた。だから菜々美が家に来ていたことはなと思う。隠れていたなら話は別だが）

洋介は時間と行動の整理をして、菜々美の行動のあたりを付けようとするが、どうやら瞳の言った自宅訪問ではないと悟った。そうなる下次に出てくる問題は何かをしているのかということだった。

（俺に直接来なかったからといって安心は出来ない。もしかしたら準備を万端整えて襲撃するつもりかもしれない）

とにかく洋介は菜々美の行動を察知したかった。そして出来ることなら自身で自宅に籠城して菜々美の襲来に対応したかった。

（母さんに被害が及ぶかもしれない……）

一度そう考えが行き当たるともう洋介はジツとしていらなかった。静かに机の上に広げた教科書、ノートの類を鞆にしまうとこっそりと席を立つ。

「あん？　おい、高梨。どこ行くんだよ」

その洋介の不審な行動に気付いた隣席の男子は不思議そうな顔で洋介にそう尋ねる。当り前だろう。学校に今さっき遅刻してやって来たというのにいきなり帰り支度を整えて教室を出ようとしているのだから。洋介はその質問に対し、ただバイバイと手を振って答える。そしてこっそりと教室を抜け出した。

「おいおい、さっき来たばかりだろうよ……」

取り残された男子はそう呟く。全く意図の読めない洋介の行動を見せ付けられた拳句に回答を残していつてもらえなかったのだから堪らない。彼は今日一日中洋介の謎の行動を気にしては考え込むことを繰り返すのだった。

## 第二十六章

「はあはあ……洋介、洋介」

授業時間帯の街中を菜々美は駆けていた。身には学生服を纏い、通学鞆を持つという明らかに登校途中の格好だが、向かう先は完全に学校の方面ではない。

「今日しかない……そうじゃないと……」

菜々美は何やらぶつぶつと呟きながら走っている。スカートが翻つてしまうことも気にせず走る姿は非常に男の目を引くのだが、その異様に怪しい呟きと笑みに周りは露骨に目線を逸らす。今の菜々美は何か触れてはいけない存在だと周りに意識されていた。

そのせいだろうか菜々美は警官やお節介な近隣住民に呼び止められることもなく走り続ける。そして気が付けば辿り着いた場所は高梨家の見える角であった。菜々美はそこに身を隠し、頭だけを角から出して高梨家の様子を窺う。

「もう洋介はいないよね……他にはいるかなあ」

菜々美はそう呟きながら高梨家の様子を探るものの、所詮そのような遠目からでは家の中の様子を知ることなど出来ない。菜々美は焦れるように地団駄を踏む。

「何としても証拠物件を回収しないと」

菜々美の狙いは洋介を脅す際に使用した凶器の回収であった。屋上で奪われた時はあまりの激痛と洋介から与えられた痛みという至福のあまり身動きが取れなかった。そのため洋介の逃亡を許してしまったが、それをそのまま放っておくのは危険だった。

「今、私がこうして無事にいられるってことはまだ洋介は通報とかしてないってことだよ……そうなるか今しかない」

菜々美は何かに怯えるように身を震わせると、両腕で自らの身を抱く。

「そ、そうしないと……私、洋介に会えなくなっちゃう」



菜々美はその最悪な未来を想像するともう止められなかった。意を決した菜々美は角から身を出してそのまま高梨家前の道路を堂々と突き進む。

「もうこうなったら誰かいようと関係ない……邪魔するならこれで……」

目の据わった菜々美は懷からナイフを取り出す。そしてその刃を出して首を掻つ切るかのような身振りをする。実に物騒な女子高生だった。

このような危険人物が近くにいるとは露知らず、周りの住宅は閑静なものである。ごく普通の日常を謳歌し、思い思いに午前中を過ごしている。そしてそれは高梨家も変わらないはずだった。

しかし今、高梨家には危機が迫っている。殺傷沙汰も辞さない覚悟的菜々美が一步一步その距離を詰めている。ナイフは巧妙に後ろ手に隠して油断の気配など微塵も見せない。

（インターホンを鳴らしたら、多分洋介のお母さんが出てくるからまずは普通に会話。それで駄目ならナイフで……）

頭の中で段取りをシミュレートしている菜々美はもう犯罪者の雰囲気を感じることなく醸し出していた。そんな濁った眼では誰が応対しても家になど上げないだろう。もうこの時点で最悪な事態しか起こり得なかった。

「あと、少し……」

もうあと数歩で高梨家である。菜々美は一つ深呼吸をして準備を整える。

「すーはー……」

準備万端。いざ討ち入り。

しかし、天は菜々美に背いた。深呼吸をする菜々美の前に突如現れた人影。菜々美の深呼吸は停止した。

「いけない！ 出遅れたわ。折角のバーゲンなのになんて失態。今から取り返さなくちゃ！」

高梨家から飛び出した人影は洋介の母だった。化粧をしたりして

すっかりめかし込んだ格好である。菜々美や瞳とは違った大人の色気を意識したその出で立ちは美女と言つて差し支えないものだった。「早く駅に行かないと、乗り遅れちゃう」

母は魂を飛ばして呆然としている菜々美の横をすり抜けて急いで駆けていく。目的に目を奪われた母にはどうやら家の近くで呆然と佇む怪しい少女など目に入らないようだった。

「……今のは洋介のお母さんだね？　新しい敵とかじゃないよね？」

ようやく意識が帰つて来た菜々美からまず出た言葉はそれだった。今の菜々美にはとにかく綺麗な女性は全て洋介を奪いかねない敵である。ましてそれが洋介の家から出てきたとあつては見過ごせない。「まあ、今のところはどうでもいいか。それよりも洋介の家は……」硬直から解放された菜々美は恐る恐る高梨家を覗き込む。どうやら無人のようである。やはりさっきのは洋介の母だったのだろうと菜々美は確信した。

「どっかから入れないかな？」

菜々美は侵入口を確保しようと辺りを探る。窓や塀などを見るものの、どうやら窓は開いてない上に塀などを使って二階に侵入というのも出来なさそうである。

「どうやって入ろう……あまり目立つと見つかりそうだし」

菜々美は辺りを見回す。高梨家の傍には非常に近い距離に隣家がある。それこそ互いの家から向かいの家が丸見えなぐらいに。それこそが菜々美の目下の敵である瞳の家だった。この非常に地理的にも感情的にも鬱陶しい隣家に菜々美は苛立ちを隠せない。

「あの女はどこまで私の邪魔を……っていつか洋介の部屋からあの女の家が丸見えじゃない。絶対誘惑とかしてるよ、あの女狐」

菜々美はぎりぎり歯軋りをしながら血走った眼で河野家を睨みつける。出来るものなら今すぐにこの目障りな家を焼いてしまいたいぐらいだったが、それをやっては高梨家にまで被害が及びかねない。菜々美はそこを考慮して特別に恩赦をしてやった。

「ピッキングなんか出来ないしなあ……鍵が開いてればいいのに」  
菜々美はそんな都合よく鍵が開いてるわけないよねと諦めの表情ながらも玄関のドアノブを回す。すると簡単にそれは回り、ドアが開いてしまう。このあまりに予想外な事態に菜々美は呆然と口を半開きにしたまま、その場で硬直する。

「開いちやった……」

この都合のよすぎる展開に菜々美は罨を疑うものの、だからといって回避するにはあまりに惜しい。菜々美は虎穴に入るべきか退くべきかで板挟みになってしまった。

「多分さっきの洋介のお母さんらしき人が慌てて飛び出して鍵を閉め忘れたんだと思うけど……」

多分そうだろうと思ってても躊躇してしまう。菜々美はなかなか次の行動が取れない。だが、それでもナイフは不要だろうと刃を閉まっ  
つてポケットの中につまむ。そしてその動作と同時にまたしても不意の出来事が菜々美を襲った。

「ふんふん……」

「ひっ!？」

突如、隣家から聞こえてきたドアの開く音とご機嫌な鼻歌。その主は瞳の母によるものだった。こちらめめかし込んだ格好で出掛けようとしている辺り、恐らく目的は洋介の母と同じだろう。だが、こちらは慌てることなく玄関をしっかりと閉めた後で施錠も抜かりはない。そしてあるうことか何故か左右確認。これが菜々美に決断を促させた。

「いけないっ!」

この危機に菜々美は急いで高梨家に侵入し、ドアを閉める。そして高梨家に潜り込んだ菜々美は息を殺して辺りの音を聞く姿勢を見せる。

「ば、バレてないよね?」

いくらそう言っても自分で確認することは出来ない。これで河野母が何事もなく出掛けてくれればいいのだが、そこまではわからない

い。菜々美は音による確認が無理と判断するとすぐに鍵を掛けて、家の奥に移動する。後は窓などの外から見える所を避けて待機する。菜々美はもう心臓が死ぬかと思うほど拍動していた。

「何も起きない、何も起きない、何も起きない……」

菜々美はまるで呪文を唱えるかのようにそう自分に言い聞かせる。その顔は気の毒なほど青ざめてしまっていた。とても先程まで人を斬りつけても構わないと心に決めた人物とは思えない。刃物をしまい、一度緩んでしまった決意はもう締め直せないようである。

「……もう大丈夫かな？」

しばらく息を殺して身を潜めていた菜々美はその沈黙を解くと、ゆっくりと窓際に移動する。

カーテンを壁にして外を窺う菜々美だったが、そこには誰もおらず、何事も起こってはいなかった。それを確認すると菜々美は一つ深く息をつき、安堵の心地に浸る。

「とりあえずこれで一安心……なんだかんだで最適な展開になってきたなあ」

確かに誰にも気付かれずに高梨家に侵入出来れば最高とは思っていたが、こつも順調に事が運ぶとかえって不安になるものである。だが、菜々美はその不安を振り切って高梨家の散策を開始する。

「まずはこれだけはやっておかないと」

そう言うとき菜々美は急いで二階へと上がり、一目散に洋介の部屋に突入する。

「証拠物件、証拠物件と……」

洋介の部屋に入るなり菜々美は物色を開始する。まずは部屋をざっと見渡し、目的の物を搜索する。

「まあ、さすがにそんなわかりやすく置いてないね。親に見つかったら面倒だろうし」

菜々美は大雑把な搜索を打ち切ると、次にかさ入れを始める。まずは洋介の机の上を確認し始める。

「ちよつと失礼しますよ。……あつ、これって……」

洋介の机の上を調べている菜々美はある物を発見するとそれに目を奪われ、行動を一時休止してしまう。

菜々美が机の上で発見し、今手に持ったその物体は洋介が使用しているであろうリップクリームだった。

菜々美は徐にリップクリームの蓋を外し、底の部分を回してリップクリームを外に出し始める。

「こ、これを洋介はいつも口に付けて……ごくっ」

今にも涎を垂らしそうな状態になっている菜々美はもうリップクリームに目が釘付けであった。証拠物件探しなぞ既にどこかへと置き去りになってしまっていた。これより菜々美の目的は洋介の私物チェックである。その第一弾として菜々美はリップクリームを綿密に調査し始める。

「っ、使い心地を確かめてみようかなあ」

ちよつとどんなものかと試すような口ぶりをしながらも、菜々美のその眼は血走っていた。もうそれ以外目に入らないといった具合の集中の仕方である。

「こ、ここに洋介の唾液やら何やらが……はあはあ」

荒い息をリップクリームに浴びせかけている菜々美。その様はどこから見ても変態以外の何物でもなかった。若く麗しい女子高生がそれをやっているからまだ見ていられるものの、男がやっていようものなら問答無用で通報モノである。

だが、菜々美の挙動はその域で留まりはしない。更にリップクリームを口に近付けると舌を出して軽くペロリと一舐めする。かなり間違った使用方法ではあるが、当の本人の満足具合は相当なようで、満面のそれでいて爛れた笑みが顔中に広がっていた。

「よ、洋介の唾液が私の中に入ってきた！ それで次はこれを使った洋介の中に私の唾液がは、入る……ごくっ」

完全に爛れきった菜々美は倒錯した喜びにうち震えていた。もう何の躊躇もなく洋介のリップクリームを舐め回す。そのおかげで洋介のリップクリームはすっかり菜々美の唾液にコーティングされて

しまっていた。その成果を見て菜々美は満足げにしている。

「これで一つ洋介の持ち物が私色に染まったわ。……さて次はと」

一仕事終えた菜々美は次なる獲物を物色し始める。既にこの部屋に侵入した目的を見失っているようで洋介の持つ脅迫証拠物件などは全く眼中になくなっていった。

菜々美は目を光らせながら洋介の部屋を念入りに調べ始める。

「い、異性の部屋に入ったらまずこれが定番だよな」

顔を赤くし、どもりながら菜々美が向かった先は洋介の衣服が収納されているタンスだった。ここには洋介の肌に密着した、菜々美にとって垂涎の品がしまわれている。実に調べ甲斐のある場所である。

「……実に興味深い」

菜々美は躊躇なく人様のタンスを開けていく。一番上の引き出しを開けた菜々美の視界にはＴシャツなどの上着類が入ってきた。

「ふむふむ……黒色が多いね。洋介の好みは暗い色かな」

引出しの中を端から端まで調査して洋介の好みを網羅していく菜々美。その熱の入り様は凄まじかった。色から柄、丈などを調べて好みを正確に把握していく。これはプレゼント攻勢に使えると踏んでの行動だろう。使えるものは何でも使うその心意気は本気そのものだった。

「さて、次の引き出しにいかうかな」

一段目を堪能した菜々美は悠々と二段目に移る。洋介の母はともかく洋介が帰ってくるにはまだまだたつぷり時間があると想定しての行動だった。それに母の方もせっかくめかし込んでショッピングに出掛けたのだからそうすぐには帰ってこないだろう。菜々美の計算はよく条件やら心理を踏まえていた。

「二段目には何があるかなあ」

菜々美は二段目の引き出しを開けて、中を覗き込む。そこにあったのはジーンズやジャージなどのズボン類だった。菜々美はそれらを逐一手に取っては眺めて悦に入る。

「これどれぐらい履いてるのかあ……くんくん」

突如ジーンズを手にとって顔に近づける菜々美。そしてその行動は匂いを嗅ぐという行為にエスカレートした。菜々美はまるでワインの香りを楽しむ通のように目を閉じながら優雅にジーンズの香りを楽しんでいる。

「……ちよつと男くさい匂いがするけどほとんど無臭……」

期待していたほどのものではなかったのか、菜々美の表情は残念そうに歪む。そうなると菜々美の興味は消え失せ、洋介の好みをチェックするだけで二段目は終わらせた。

「次のは……小さい引き出しが二つ並んでる」

タンスの三段目はやや小さい引出しが二つ並んだ格好になっていた。恐らく靴下やハンカチなど小物を収納する専用のものだろう。菜々美がまず片方を開けると予想通りそこからは靴下やハンカチ、タオルなどが覗いていた。

「靴下は短めのが多くて、色はそこまで拘りはないのかな。バラバラだね。ハンカチも特に拘りはなしと」

本来であれば靴下の匂いを嗅ぐという暴挙に及ぶであろう菜々美だったが、先程のジーンズで悟ったのか洗濯済み衣類は洗剤やら柔軟剤のせいで洋介の匂いが消えてしまふと判断してそういった行動は取らなかった。あくまで好みの調査に留める。

だが、菜々美のその冷静な判断も隣の引き出しを開けた瞬間あっさりと崩れ去る。隣の引き出しに入っていたのは洋介の下着類だった。この刺激の強い品々にはさすがの菜々美も顔を一気に紅潮させる。

「こ、これって洋介のパンツ!? そうだね、間違いないよね!」

異様にテンションの上がる菜々美。目の前には菜々美にとってのお宝があるのだから無理もない。もう菜々美は冷静に好みの調査などしていられなかった。次から次へと下着を取り出してはそれを抱き締めたり、匂いを嗅いだりと欲望を容赦なくぶつける。拳句の果

てには頭に被ってしまうという暴挙に及んだ。もう行動だけでなく見た目も完全無欠の変態であつた。

「い、一枚ぐらい持つて帰つても平気だよね？」

更に菜々美は引き出しの中から一枚下着を手に取るとそれをそのまま履いてしまう。鞆にしまうのではなく身に付けてしまう辺りが菜々美の真骨頂だつた。洋介の下着と密着した菜々美は満足げな顔で次の引き出しに移る。そこには段が低くなり取り辛い場所のためか洋介の匂いが消えているどころか嫌な匂いがしてくる。菜々美はすぐにその段は戻してしまう。

「まあ、とりあえずこんな感じでいいかな。まだやらなくちゃいけないことあるし」

衣服調査を終了した菜々美はここでもようやく本来の目的に移る。洋介に回収された凶器類を奪還することである。恐らく嚴重に保管されているだろう。さすがにあんな物を持つて外には出られない。見つければ厄介なことになるからである。そこまで読んだ菜々美は絶対にここにあると確信していた。

「まあ、探しながら洋介の部屋も色々チェック出来るし一石二鳥だよな」

愛しの洋介の部屋にいうことでご機嫌な菜々美はむしろすぐには見つからないことを願つた。それだけ見る場所、時間が増えるからである。尤も見つかったところで結局がさ入れは続行するのだろうか。

いよいよ本格的に搜索に入る菜々美はまず洋介のベッドに近付く。こういう見られたくないものを隠す時には相手の性質を考えないといけない。思春期の男子である洋介が相手ということで菜々美は絶対ここだと確信していた。思春期の男子の見られたくない物を隠す所といえばここが相場である。

「ついでに如何わしい本が見つかったりしたら……後学のために参照しておこう」



そんな思惑も含んだベッド下の搜索だったが、結果は芳しくはなかった。証拠物件も見つからず、如何わしい類の本も見つからなかった。どうやら洋介は裏を掻いて一般例から離れたようである。その念の入りように菜々美は苛立つどころか楽しそうにしている。狩りがすぐ終わってはつまらないと言わんばかりに菜々美は肉食獣のような鋭い目つきをしていた。

「面白くなってきたわ。絶対に見つけてあげるんだから」

気合いの入った菜々美は徹底的に部屋を搜索する。その力の入り様は相当なものだったが、それでいて怪しい痕跡は残さないよう片付けもしっかりしている。その大胆且つ繊細な行動は菜々美の本気具合を雄弁に語っていた。

しかし、気合いが入れば入るほど疲労も甚だしい。何より成果がなかなか見えてこないという現実精神的疲労を徐々に蓄積していく。ベッド、机、タンスなど洋介の部屋にある様々な家具を調べてきた菜々美の行動を嘲笑うかのように証拠物件は見つからない。菜々美はいよいよ心身ともに疲れてきていた。

「あー、もう！ 全然見つからないじゃない！」

菜々美は苛立ちを発散するため洋介のベッドを蹴り飛ばす。そしてその蹴りでやや冷めた頭が今の行為を評価し、菜々美は慌ててベッドを確認する。洋介の私物を自身で壊すようなことがあってはならない。下着は盗んだが、ここではベッドに損傷はないか気にする。菜々美の行動は実に不可解だった。

「はあ……ちよつと疲れちゃったから息抜きでもしようかな」

そう言うとき菜々美は洋介の部屋から退出し、階段を降り始める。その大胆不敵な闊歩具合はもはや勝手知ったる家のものである。とても無断で忍び込んだ者の取る行動ではなかった。これも高揚した気分のなせる業だろう。

悠々と一階に降りてきた菜々美はそのままキッチンへと入っていく。そして棚からコップを取り出し、そこに茶を注いで飲み始める。あまりに無礼な振る舞いだ、菜々美に罪悪感など微塵もない。そ

の証拠に菜々美の頬は緩み、紅潮していた。

「ふふふつ、これで洋介と間接キス。それも双方向ね」

洋介が口付けたであろうコップで茶を飲み、そして自分の唇が付いたコップで洋介が飲み物を飲む。それを想像すると菜々美は極上の至福を感じた。

だが、菜々美はこれだけでは足りないと感じたのか、その使用済みのコップをそのまま棚に戻してしまう。これで次に使用するときには菜々美の唾液の付いたコップで飲み物を飲むことになる。勿論それを洋介が使うとは限らないが、頭の中が至福で一杯の菜々美にはそんなことなど思い至らなかった。とにかく今の菜々美は幸せな思考回路になってしまっているのである。細かいことなど気に留めることはなかった。

茶で喉を潤し、間接キスで心も潤した菜々美はもう一頑張りしようとしてまた二階へ戻ろうとする。とにかく目的は証拠物件の奪取なのである。そこを見失ってはいけない。そう気を引き締め直し、二階へ上がるうとする菜々美の目にまた新たな誘惑が飛び込んできた。

「あれ？ あそこって……お風呂かな？」

菜々美の視界に入った部屋。それは高梨家の風呂場であった。そこは言わずもがな洋介が裸になり、全てを曝け出す菜々美にとって至高の場である。

そして菜々美がそんな場を逃すわけがなく、すぐさまターゲットを洋介の部屋から風呂場へと移し、階段を昇ろうとしていた足をそのまま方向転換させる。かつてない興奮に駆られた菜々美は一目散に風呂場へと向かい、勢い込んで扉を開ける。扉を開けた先には脱衣場があり、洗濯機や洗濯籠そして洗面台が付いている。それらの中でも菜々美が真っ先に興味を持ったのは洗濯籠だった。

「あそこに洋介の使用済みの服が……」

もう生粋の変態へと成り下がった菜々美は洗濯籠を恥ずかしげもなく漁り、洋介の物と思しき服を探り当てるとハイテンションに収穫を喜ぶ。学校の男子が見たら絶望する有様だった。学校内でも屈

指の美少女である菜々美の隠れた一面がこんなでは失望もいいところである。それでも菜々美にとつては仮に誰かに見られていたとしても一部の例外を除いて全く気にしないであろう。菜々美にとつてはそんな外聞よりも洋介に関わることに触れる方が大事なのである。そんな菜々美だからこの勢いはもう止められない。洗濯籠を漁って洋介の服を取り出した菜々美はそれを大事そうに横に分けておき、名残惜しそうに戦果を見つめながらも次の行動に移る。

「次はいよいよお風呂ね……」

菜々美は視線を浴場に向けると徐に服を脱ぎ始める。次々と床に落ちる衣服の中で男物の下着が目立つ。明らかに異質であった。

洋介の下着を筆頭に全てを脱ぎ去った菜々美は惜し気もなく晒された裸体で意気揚々と浴室に入っていく。何とも思い切りのよい人物であった。

「どっかに隠しカメラとかないかなあ」

浴室に入った菜々美は浴室の角や浴槽内を覗いてはそう呟く。自分の自慢のプロポーションを洋介に見せつけたい。そんな思惑を持った菜々美は隠しカメラの存在を期待したが、元より菜々美が家の中に入つて来ると想定などしていないのだからあるわけがない。そんな当たり前のことに菜々美はがつくりと肩を落とす。すっかり露出狂の気まで現れてきていた。尤も菜々美の変態的な行動の全ては洋介のみに向かつているから真性のもではなかったが。

期待を裏切られたため、隠しカメラの搜索を止めた菜々美は次に排水溝を覗き込む。何か洋介の身体に関わる物はないかと貪欲に探し求める姿はある種の感心の念を抱かされるが、やっていることは実にみつともない。直向きな行動もやることによってほとんど悪印象をもたらすだけである。

「どっかに洋介の痕跡がないかなあ」

そう言つて排水溝から顔を上げて、辺りを探る菜々美。その目線はタオルにいたり、シャンプーにいたりと非常に忙しい。そして物によつては行動を起こす。タオルを見つければそれで自身の身

体を擦って自らの痕跡を残し、シャワーヘッドにも自身の肌を密着させる。もうやりたい放題だった。

そんな風に思う存分痕跡を残した菜々美だったが、最後になって目を付けたのは風呂の残り湯だった。浴槽の半分ぐらいまで入っている湯。そこには昨夜洋介も入っただろう。そんなことを想像すると菜々美によからぬ企みが湧いてくる。

「……飲んでも大丈夫かな？」

興味深そうに浴槽を覗く菜々美はそんなことをポツリと言い出す。ここまで来ると完全に正気の沙汰ではなかった。

確かに洋介が入浴したかもしれないが、入ったのは洋介だけではないだろう。母親も入っただろうし、父親も入っただろう。それに洋介が入ったから興味があるといっても飲むなどといっては不衛生極まりない。身体から落ちた一日の汚れを含んでいるのである。当り前のことである。

だが、やはり例によってこと洋介に関することでは菜々美に当たり前のことなど通用しない。そこにあるのは本能だけである。飲みたいと思っただけだ飲みたいのである。そこにそれ以外の余地は何もなかった。菜々美は吸い込まれていくように何の躊躇いもなく浴槽に顔を近付ける。

「んぐんぐ……ぷはあ……」

豪快に残り湯を吸い込む菜々美は喉ごし爽快と言わんばかりに口元を腕で拭って見せる。味がどうだったかはわからないが、どうやら菜々美的には大満足のようである。その至福の笑顔はこの後、腹を壊しても悔いはないと雄弁に語っていた。むしろ体内から洋介の一部に攻撃されると思うと菜々美は幸せですらあった。

「洋介の出汁がよく出たお湯。ごちそうさまでした」

手を合せ浴槽にお辞儀する菜々美。その姿はいよいよ常人には全く理解出来ない境地に入りつつあった。そこまで恋い焦がれていると言えば美しくも感じるが、実態を見るとやっぱりみっともなかった。

至高の一杯を堪能した菜々美はそのまま今度は全身で洋介の出汁を味わおうとそのまま入浴を始める。昨日の残り湯ですっかり冷めてしまっている湯は何にも気持ち良くないはずだが、当の本人は極楽極楽といった趣である。

現在まだ二時限目が始まるぐらいの早い時刻。学校が終わるにはまだまだ時間がかかなりある。そして出掛けた洋介の母もあのめかし込み様から昼ぐらいは外で食べてくるだろう。そう判断した菜々美の高梨家体験コースはまだまだ続くのだった。

## 第二十七章

菜々美が学校に来ていない。その事実を知った洋介はもう嫌な予感で頭が一杯になっていた。教室を飛び出し、先程通って来た廊下を逆走する洋介にはもう授業をサボる罪悪感など感じる余裕もなかった。ただ出来ることは廊下を駆け抜けることのみ。

「あいつは絶対俺の家に向かつてる。間違いない」

洋介には菜々美の行動がはつきりわかっていた。タイミングからいって自宅へ襲来することは疑いない。問題はそのタイミングである。

（間に合うといいんだが……）

洋介はとにかく一刻も早く家に帰って母に説明しようと更に速度を上げる。欠席してまで行動を起こす菜々美はもはや形振り構わなはず。これがまだ学校終了後というならそこにまだ理性を感じられるが、先走って行動を起こす状態はかなり危険だった。もう会うことすら危険である。家上がるのを断ったら襲撃すらしかねない。菜々美はとにかく焦っているのである。その危険性を伝えたかった。もしかしたら学校をサボって帰ってきたことでこっぴどく説教を食らうかもしれないが、それすらもどうでもよかった。無事に相見えることさえ出来れば。

急ぐ洋介は授業が始まっていることで無人の廊下を駆けていく。誰かと遭遇する可能性は限りなく低いため、角を曲がるにも速度は落とさない。洋介は滑って転ばないよう角の壁をしっかりと掴んで無理矢理体を方向転換させる。

「うおおおおおおおっ！」

遠心力に抗う洋介は力強い咆哮を上げる。そしてまるで飛ぶように廊下の角を曲がる。しかし、それがいけなかった。スピード感溢れる身のこなしで廊下を曲がる洋介の眼前には一人の生徒がいた。

「ちよっ！ 危なっ！」

「ええっ！？　きゃあああああ！」

凄惨な光景が廊下に広がった。飛ぶように角を曲がった洋介の目の前に現れた女子生徒は哀れにも火の出る勢いの体当たりを喰らい、弾き飛ばされていく。

背中から廊下に倒れ、その勢いで廊下を滑っていく女子生徒。それも廊下に倒れ込んだ勢いで膝が顔に付くような体勢になってしまっている。何とも恥ずかしいおしめ替えスタイルだった。

そんな哀れな格好で廊下を滑る女子生徒はしばらく廊下を背中で掃除していくと、勢いを失ってようやく止まった。ただ、上がったしまった足が顔の前を通り越して顔の横にくる姿勢になってしまっていたため、そのおしめ替えスタイルが解けない。どうやら完全にお尻が持ち上がってしまったようである。

「うわっ！？　ちよつと大丈夫！？」

ぶつかっていった当人の洋介は勢いを全部女子生徒に叩き込んだのか、何ともなかった。女子生徒の柔らかい体で衝撃を緩和した洋介は、悪いとは思いつつも不謹慎な喜びを感じずにはいられない。

そのため表情は神妙でありながら、目元や口元が我慢出来なくブルブルと歓喜に震える。

突き飛ばした女子生徒に駆け寄る洋介はそのあられもない姿勢を慮ってか、目を両手で覆っている。しかし、前が見えないと危険だからなのか、隠しきれないスケベ心からなのかその覆った手の隙間は普通に広い。もうそれは手で覆ってなくても一緒というくらい広がった。

「大丈夫ですか？」

突き飛ばした女子生徒の隣にまで来た洋介は覆っていた手を女子生徒の頭部に添えるため、目から離す。洋介はよく見えるようになつた目でその女子生徒を見詰める。

「すみません、凄い急いで。それで俺……って、あれ？　……瞳？」

「……これ謝ったぐらいじゃ済まないわよ」

キョトンとした顔で驚く洋介を、突き飛ばされておしめ替えスタイルを余儀なくされた瞳は冷たい目で見詰める。純白の下着を惜し気もなく晒しているというのにその表情に羞恥の色はない。完全に怒りで感情が埋め尽くされていた。

「ご、ごめん！ 本当にごめん！」

「……とりあえず私の体勢を元に戻してくれるかな？ 勿論目を瞑ってね」

「イ、イエッサー！」

指令を受けた洋介は忠実に従い、目をきつく瞑りながら瞳の足を下ろす。その目は先程の緩い目隠しとは違って完全に何も見えないように努め、足を戻すために差し出した手も目を瞑っているため手探りでいくが、絶対に変な所を触らないように徹底している。それほど瞳のオーラは洋介に恐怖を刻み込んでいた。

「こ、これで宜しいでしょうか？ ……瞳さん？」

「……まあ、いいわ。許してあげる」

「さ、さすが瞳様。度量が広くておわす」

過剰に謙る洋介は揉み手しながら瞳を称える。何とも哀れな小物に成り下がっていた。

そんな下手に出る洋介を瞳は冷たい眼差しで見ながら、埃を払って立ち上がる。その際にも洋介は手を貸すことを忘れない。その辺りの心配りは完璧だった。これも二人の長年の関係がなせる業だろう。そこには瞳の気を引きかかった洋介の過去の努力が垣間見える。け、怪我とかはないか？」

「大丈夫よ。……まあ、強いて言えばあんな恥ずかしい格好をさせられて心が傷付いたぐらい？」

「ご、ごめんなさい！」

「冗談よ。それにどうせいずれ全部見せてあげるつもりだし」

「えっ？」

瞳の口走ったちょっと危ない発言に洋介の顔が真っ赤に染まる。そんな洋介の様子を見て瞳は一矢報いたと満足そうな笑みを浮かべ



る。何とも小悪魔な女性であつた。

「ぜ、全部って……」

「多分洋介の想像してるとおりよ」

「……」

「あれ？ どうしたのかな？」

「もう勘弁して……鼻血出るから」

あまりの恥ずかしさに洋介の方が完全に参ってしまったようである。顔をこれ以上ないくらい真つ赤にした洋介はもはや瞳を直視することが出来ない。直視しようものなら勝手に目が瞳の制服の中身を描画してしまう。洋介は恥ずかしさのあまり後ろを向く。

「ごめんごめん。からかい過ぎちゃった」

「本当に勘弁してくれよ……」

場の雰囲気が変わったからか洋介は何とか堪えて、瞳の方へ向き直る。だが、依然としてその顔は真つ赤である。

「初心ね。可愛い」

「もうね、本当にやめて」

「私の下着をガン見してた仕返しよ。……それで洋介はこんな所になにしてるの？ 教室行つたんじゃなかったの？」

瞳は首を傾げながら洋介にそう問い掛ける。当然だろう。本当なら今頃教室で授業を受けている筈の洋介が廊下を物凄い勢いで走っているのである。不思議に思わないわけがない。

洋介は瞳にそう尋ねられるとようやく自分のするべきことを思い出したようで、途端に焦り始める。

「そうだ！ 俺、こんなことしてる場合じゃ……」

「……何かあつたの？」

瞳は洋介のその態度に何事が起こったなとすぐに悟った。表情を引き締めて洋介に事情を問う。

「教室に行ったら菜々美が欠席だって知ったんだ。それでこのタイミングであいつが欠席ってことは……」

「そうね。間違いなく洋介の家に向かつてるわ」

それだけで十分だと瞳は転がった鞆を拾って体の向きを洋介と同じ向きに変える。その行動は共に高梨家に向かうという意味を示していた。

「いいのか？ もう遅刻届出しちゃったんだろ？」

「そんなのどうでもなるわよ。それよりもおばさんが危ないわ」

「ああ、……そんなじゃ行くか」

洋介のその言葉を合図に二人は走り始める。下駄箱で靴を履き替え、昇降口を飛び出して校内から出る。辺りの様子を窺いながら慎重に脱出する二人だったが、仮に見つかったとしても構わず逃走したことだろう。それほど今の事態は切羽詰まっていた。

「どうか菜々美がまだ行動を開始していませんように……」

「そんなこと願ってても仕方ないわよ。それよりも早く帰るよ！」

「ああ、そうだな」

二人は学校を出てから全速力で往來を駆けていく。制服姿の男女が学校にも行かずに走っている姿を見ればやはり訝しがる筈だが、誰も止める気配はない。いや、止める余地がないほど二人の走りは勢いが良かった。

まるで弾丸のように駆け抜けていく二人だが、洋介には小さな不満が芽生え始めていた。

（瞳って足速っ！ ついていくだけで精一杯だ。……情けねえな、俺）

洋介をリードして先を走る瞳は男女の身体差を無視した速さだった。あまりの速さにヒラヒラと捲れるスカートを拝めるのは愉快そのものだったが、女の子の後塵を拝している現状は不愉快というか情けない。だが、どう足掻いても瞳には追いつけない。洋介は自らの身体能力が恨めしかった。

（とにかくついていくしかない。……置いてかれるのだけは避けないと）

目標を瞳に置き去りにされないことと定めた洋介は無理をせずに今のペースを保つ。今はとにかく急ぐことと瞳を一人にしてしまわ

ないことの二つをしないといけない。菜々美が今、どこにいるかわからないことも無視出来ない要因だった。

（もし、こうして走ってる最中に襲ってきたら……）

考えられないことではない。今は洋介も瞳も菜々美が高梨家に向かっていると考えている。だが、それはあくまで予想であって本当にそこにいるかは定かでない。もしかしたら高梨家に向かう途中で近くを歩いているかもしれない。不安は尽きない。

（あつ、もしかして瞳がこんなに速く走ってるのは）

洋介は瞳の走りの速さにもう一つの理由を見出した。それは途中で襲撃されるかも知れないと判断してのことかもしれない。これだけ全速力に近い速度で走っていればなかなか捕まえることなど出来ない。洋介は瞳に直接聞くわけではないが、きっとそうだと思った。（けどこのままだと家に着く頃には満身創痍だな……）

洋介はそこが心配だった。疲れ切ったところに菜々美が襲撃してきては堪らない。それに慎重な行動が取りにくい。切れる息にふら付く足。どう考えてもいい状況は望めない。瞳はどう考えているのだろうか？と洋介は気になった。

「ひ、瞳！ このままだと家に着く頃には疲れ切っちゃうぞ。どうするんだよ」

「何？ もう疲れたの？ 情けない……」

瞳の見下すような言葉と視線が洋介に突き刺さる。そう言われてしまつては洋介もこれ以上瞳を諭すことなど出来ない。いや、むしろ洋介の方が瞳に唆されていた。

（ちよ、あいつ今情けないって言ったよ？ なめられてるよ？）

沸々と洋介に怒りが込み上げる。馬鹿にされたままで引つ込むわけにはいかない。そう思った時、洋介の目つきが明らかに変わった。全力疾走に疲れ、このままでは危ないと先のことを不安がった洋介はもはやそこにはいなかった。そこにいるのは瞳の言葉と態度に挑発された鬼神がいた。鬼神は徐に速度を上げ、これ見よがしに瞳の前へと出る。そして得意そうな顔で瞳の方を見る。

「ほら、早く行くぞ！」

「すぐ調子に乗るんだから……家に着いてからが本番なんだよ？」

「わかってるって。これぐらい軽い軽い」

「それならいいんだけどね」

瞳は洋介に追い越されて後ろを走るものの、そこには悔しさなどなかった。ただ勝手に洋介が競っているだけである。そしてそこそが瞳の狙いだった。洋介をダレさせることなく気合いを入れさせ続ける。色々思い悩みやすい洋介を操縦するのはなかなか骨が折れることだが、さすがに長い付き合いの瞳は見事に洋介を操縦してみせる。既に洋介は瞳の手の内で踊らされる様相を呈していた。

依然として凄まじい速さで駆け続ける二人はあっという間に自宅近くにまでやって来る。そして家が近付くと二人は何も言わなくてもわかっているとばかりに二人して速度を落とし、注意深く辺りを見る。

「洋介……気を付けてね」

「お前もな。いつ菜々美が出てきてもおかしくないぞ」

もしかしたら既に近くで様子を窺っているかもしれない。そんな気がするほど自宅の周辺は危険な雰囲気がプンプンしていた。角という角が怪しいし、電柱なんかも侮れない。ここにきて二人の移動速度は著しく減退した。

「とにかく角に差し掛かったら注意してね。いきなりグサツとなったら笑えないから」

「言われなくてもわかってるよ。俺だって命は惜しい」

凶器が迫るといった経験を味わっている洋介は無意識に慎重な行動を取っていた。無意識の内に忍び足になっている辺りはまるで隠密の如き注意深さだった。

一方で瞳は洋介よりも過激な行動を取っていた。洋介は守り、もしくは避けるといった方向性であるのに対し、瞳のそれは迎撃の方向性だった。角に差し掛かると拳を構える。もし菜々美と遭遇したら一発お見舞いしてやろうというその意気込みは実に勇ましかった。

しかし、二人のそんな心構えも無駄だったようで何事もなく二人は高梨家に到着してしまう。あまりにあっさり目的地に辿り着いた二人は些か呆気に取りられた様子で高梨家のドアを見詰める。

「……もしかしたら考えすぎだったかな？」

洋介は頬をポリポリと掻きながら苦笑する。あまりの平穩ぶりに一度引き締めた気合いが一気に萎んでいく。とりあえず何事もなくよかった。そんな安堵が洋介に込み上げるものの、瞳はそうではなかった。まだ安心出来ないと警戒態勢を緩めることはない。

「まだ家の中を見たわけじゃないでしょ？ こっそり侵入してるかもしれない」

「それはないって。ほら鍵掛かってるし」

「侵入してから掛けたのかもしれない」

「考えすぎだつて……」

洋介がそう言おうとしたその瞬間、家の中から物音が聞こえてくる。樂觀視していた洋介はその音に激しく驚く。

「い、今何か音がしたぞ」

「だから言ったでしょ。これは絶対いるわ」

「あつ、違うわ。多分母さんだよ」

「洋介のお母さんって家にいる時鍵なんか掛けるっけ？」

あくまで希望的観測を消そうとしない洋介に瞳はあえて不安な予想をぶつける。それでもしないと洋介は現実から逃避しようとする。と言うよりも自説を盲目的に信じていた。

「……いいわ。とにかく入るわよ」

「ああ、それじゃ鍵を開けてと」

「ゆっくり静かにね」

瞳は鍵を開けようとする洋介にそう注意を促すと自らは携帯電話を手に持ち、いつでも警察に電話が出来るように備えておく。これでいざとなれ脅してやればいい。だが、不安も残る。あえて不法侵入なぞを断行してみせる相手に警察などが有利な武器になり得るだろうかということである。構わず暴行に及びそうで怖い。瞳は不安

を拭い去ることが出来ない。

「よし、開いた」

それに比べて洋介は気楽なものである。出たとこ勝負で先の見通しなど何も持っていないのであろう。何とも不安たつぷりな人材であつた。

今現在洋介は家の中にいるのは母親だと考えて行動しているため、その挙動は実に大胆だつた。思い込みとはかくも強いものか、瞳は洋介を見てそう思わざるを得ない。自分なぞは家の中にいる菜々美を想像すると家の中に入るのが不安である。そういつた点ではすぐに中に入ろうとする洋介は頼りになる存在だつた。

「絶対家の中にいるのは母さんだつて……ほらあそこにい……る？」

「……おばさんってあんなに若くて……頭イカレてたっけ？」

「……いや」

家の中に入るなり廊下で見かけた人影は二人を脱力させた。洋介の樂觀にも瞳の注意深い考えにもどちらにも合致しない状況。それが目の前に広がっていた。

まず、家の中にいたのは菜々美だつた。その点では洋介の考えは外れ、瞳の予測が正しかった。

しかし、その状況は瞳のそれには当てはまらない。あまりにも間の抜けた状況が二人の危機感を霧散させる。

「まだ安心は出来ないんだろうけど何でだろう、力が抜けるわ」

「俺も同感だ……」

玄関で脱力する二人はもう慎重に行動する気も失せていた。それだけ目の前の菜々美の有様は酷かつた。

頭には洋介のトランクスを被り、上半身は裸。そして下半身にはやはり洋介のトランクスを身に纏うという見るからに変態ですと強調している姿だつた。

「おい……」

菜々美のあまりの自由つぷりに我慢出来なくなつた洋介は低い声で菜々美に声をかける。洋介としては脱力のあまり低い声となつた

のだが、その声が耳に入った菜々美は一瞬の驚きの後、咎められたかのような怯え方で洋介の方を見る。

「えっ？ あれれ？ 洋介がどうしてここに……」

「お前が欠席だつて知ったら嫌な予感がプンプンしたからな」

尤も証拠物件を回収されるかもという予感ではしたが、こんな予感ではしなかったと目の前の菜々美の姿を見て洋介は嘆息する。もうあまりの脱力感に上半身を惜し気もなく晒している菜々美を見ても何とも思わない。洋介はムードって大事だなと身をもつて知ったのだった。

そんな脱力感から落ち着き払った洋介とは逆に菜々美は悪さの現場を見られてしまったのだから堪らない。わかりやすいくらい狼狽し始める菜々美はどうしよう、どうしようと目線を慌ただしく動かしながら必死に打開策を見出そうとしている。

「あ、あのね……これには深いわけがあつて……」

「不法侵入に深いわけがあるのか？」

「えっとね……」

「そういや母さんはどうした？」

「さ、さつき出掛けてったよ」

「ふーん、とりあえずそれは良かった。……それでお前は本当は何しに来たの？」

「そ、それは……」

「どうせ証拠物件回収に来たんだろ？ それも全然深いわけじゃないしな」

洋介は必死に取り繕う菜々美に対して冷静に不法侵入の目的を指摘する。完全に動機を悟られている菜々美はただただ迷い、活路を探している。

洋介は菜々美の開き直りによる暴走にだけ気を付けて菜々美の行動を見張る。対策はきっちりとしていた。

「うつうつうつ……」

「もうお前に勝ち目はないから。だから大人しくしろ……ってどこ

いくんだよ!？」

穩便に事を進めようとする洋介は突如菜々美が起こした行動に驚かされる。窮地に陥った菜々美は唸り声を上げるとそのまま駆けだしたのだった。玄関側には洋介と瞳がいるため塞がっている。そうなると思げ場はリビングを突っ切って窓から逃亡というのが唯一の退路なのだが、何と菜々美は二階へと駆け上っていく。全く意味のわからない行動だった。

「あいつ、何がしたいんだよ。二階に行っても逃げ場なんかないのに」

哀れそうに菜々美の行動を見守る洋介は先程から静かにしている傍らの瞳の方へ視線を移す。だが、そこには瞳の姿はなかった。

「瞳？」

どうせ菜々美は自ら袋小路に飛び込んだから何も出来ないと判断した洋介は姿を消した瞳を探し始める。

「少なくとも俺の視界には入らなかったから……」

状況を整理した洋介はここしかないと思関のドアを開け、外に出る。するとそこには携帯電話で通話している瞳の姿があった。洋介が外に出るとほぼ同時に通話が終了したのかすぐに瞳は携帯電話をしまう。

「おい、誰に電話してたんだ？」

洋介は当然のようにそう尋ねる。先程までこっちは何を仕出かすかわからない菜々美と対峙してたんだぞと洋介はやや不満そうな表情である。

洋介のその質問に対し、瞳はごめんとといった具合に頭を軽く下げ、理由を話します。

「警察に通報してたのよ。だって明らかに不法侵入だし」

しれっとそう言う瞳はこれで菜々美の脅威は終わ리と言わんばかりの笑顔である。一度警察のお世話になればいくら菜々美でも行動を自重するだろう。それを考えると洋介も成程と同じく顔が晴れやかになる。



「それもそうだな。菜々美はどうせ俺の部屋で籠城してるだろうし、これで逃げられないだろ」

それでも突然飛び出してくるかもしれないと玄関には注意を払う洋介。瞳もそこには懸念があるようでこれが最後の警戒とリビングの窓に厳しい監視の目を向ける。警察が来るまでは自分達で身を守るしかない。そうなると洋介も瞳もその視線と注意を一点に集中させてしまう。しかし、菜々美はそのどちらからも出てこなかった。

「……」

洋介と瞳を嘲笑うかのように二階の洋介の部屋から姿を現す菜々美。小さな窓のため足から外に出し、その後ろに体を通して、頭を潜らせる。まさか二階から出てきはしないだろうと判断した二人の盲点を突いた菜々美の脱出だった。

リビングの逆側に面している洋介の部屋の窓は誰の監視もない。その点では菜々美の策は当たりだった。しかし、菜々美は大事な点を見落としていた。

「ここからどうしよう……」

身体を窓の外に出した菜々美は今現在窓枠を掴んでぶら下がっている状態である。帰って来る筈のない洋介が現れたことで気が動転してしまった菜々美は正常な思考回路を失っていた。尤もこれまでもだいぶ正常な思考ではなかったが。

その結果菜々美が出した結論は脱出というものだったが、そこに余分な証拠物件の回収という過程を含んでしまったがために菜々美は二階へと向かってしまった。元々今回の高梨家潜入の目的は証拠物件の回収である。それを忠実に実行してしまったために起きた誤算であった。菜々美は回収の任務は成功したものの、肝心な逃亡という過程が頓挫するという事態に陥ってしまった。状況は最悪である。

「ここから飛び降りたら……でも二階ぐらいなら平気かな？」

菜々美はそう呟きながら下を見る。決して不可能な高さではない。それでも着地したら相当な衝撃と痛みがありそうな高さでもある。

それに菜々美は今、通学鞆を肩に提げ、身動きが取りにくい状態にある。更に何よりも問題なのは裸足ということである。風呂上りで家の中を歩いている時に洋介と遭遇したために靴下すら履いていない。上半身には急いで羽織った洋介のシャツ、そして下半身は相も変わらず洋介のトランクスというちよつと外を出歩けない格好であることも逃亡を困難にしている。菜々美は八方塞がりであった。

「そ、そろそろ腕が限界に……って何か聞こえてくる……」

菜々美は近くに迫って来る音に耳を澄ます。その音は聞いた者に緊張と不安を与えるものだった。特に疚しいところのある人間には余計に不安を与える音。それはパトカーのサイレンだった。その近付いてくるサイレンを聞きとった菜々美は目に見えてうるたえ始める。

「や、ヤバいよ、これ。早く逃げないと……」

焦る菜々美は高所にいるためにち早くサイレンの音の出所を見つけてしまう。どう見てもパトカーはこの家に向かっていた。もう菜々美の不法侵入を通報されたと誰が見てもわかった。菜々美は決断を迫られていた。

「……やるか」

男らしく決断を下した菜々美は躊躇する素振りも見せずに握っていた窓の枠を離す。その瞬間、菜々美の身体は急降下を始める。

「きゃああああああつ！」

あまりの恐怖に絶叫の雄叫びを上げる菜々美。その可愛い絶叫はしかし、ここでは決して上げてはならない声だった。すぐに洋介と瞳はその絶叫を聞き付け、その場へと向かう。

そして彼らが行動を取ろうとしたその時、菜々美は地面に着地していた。

「痛い……痛いよお……」

裸足で足から着地した菜々美は激痛に悶え苦しむ。体が汚れるのも気にせず地面でのた打ち回る菜々美はもうこれで逃亡出来る可能性をなくした。足を押さえ、痛みを和らげようと努力する菜々美の

元へすぐに洋介と瞳が駆け付けた。

「二階から飛び降りたの!? 馬鹿じゃないの?」

瞳は呆れたとばかりに口を半開きにしている。洋介に至ってはもう何も口に出来ない。全く想像もしていなかった菜々美の行動にただただ驚くだけである。

そしてその現場に更に駆けつける者の姿があった。サイレンを鳴らして、高梨家にまでやって来たパトカーから警官が降りてきたのである。

「強盗の通報があったのはここで間違いないですか?」

警官は人の姿を見つけるとすぐに洋介達の元へとやって来る。そして洋介と瞳が視線を向ける先を見て困惑をし始める。

「あ、あの……強盗が入ったって聞いたんだけど……」

「ええ、あの子です。鞆を見てみてください。凶器を隠し持ってますから」

瞳の言葉に警官は胡散臭そうな眼を向ける。当然であろう。瞳が視線を向けている先には無害そうな美少女が横たわっているのである。ただその格好はシャツに男物のトランクスという変わったものであったが、危険そうな雰囲気はない。

だが、それでも通報を受けて駆け付けた以上、そのままにして帰るわけにはいかない。調べてみて問題がないなら、悪戯は止めなさいと指摘すればいい話である。警官はやれやれといった様子で菜々美に近付く。

「ちよつとごめんね。調べさせてもらうよ」

「あつ! ダメ!」

「特に怪しい物は……普通にあるな……」

止めようとする菜々美の手を搔い潜って鞆の中身を調べた警官は予想外の展開に我を疑う。鞆の中からカッターはともかくナイフが出てきてしまつては無視出来ない。警官は途端に菜々美に厳しい目を向ける。

「これは一体どういうことかな?」

「え、えつと……」

「不法侵入に凶器所持。しかも家の人に遭遇しちゃったらもう……」  
暗に強盗と思っても無理ないよねと指摘する警官に菜々美はガタと震え始める。このままじゃ犯罪者のレッテルを貼られ、洋介の近くに寄ることも規制されかねない。それだけは絶対に嫌だった。菜々美は必死に動かせない体を動かそうと努力を始める。しかし、そんな行動を警官が見逃すわけもなかった。

「はい、無駄なことはしない。……それじゃゆっくり署で事情を聞こうか」

「ちょ、ちよつと触らないでよ！ 私に触ってもいいのは洋介だけなんだから！」

「はいはい、わかったから。それじゃ自分で歩こうね」

「嫌よ！ 警察なんか行かない」

「はあ……それじゃ触るしかないな」

「や、止めてよ！ 洋介、助けて！ 洋介ええええつ！」

洋介に助けを求めながら菜々美は警官に連行されていく。その姿は哀れみを誘うものの、洋介には届かない。むしろ洋介は脅威が去ったと胸を撫で下ろしていた。

「これで……身の危険は去ったかな？」

「うん、それにちよつと足の具合もおかしそうだったし」

「捻挫でもしたかな」

「それも結構重そうね。あれじゃ当分身動きも不自由でしょうね」

これで菜々美は身体的にも状況的にも洋介に付きまとうことが出来なくなった。恐らくこの事件で学校も退学になるだろう。そう判断した洋介と瞳はやつと平穏な日常が戻ってくると心の緊張を解いた。

「はあ……何か力が抜けた。もう何もする気にならない」

「私も……今はもうただ休みたいわ」

「……でもこれでやつと瞳と恋人らしく出来そうだな」

「……うん。何の気兼ねもなくね」

そう言う二人は顔を赤らめながら微笑む。どれだけイヤつこうと菜々美の脅威を恐れることはない。それは二人にとってこれ以上ない幸せだった。まだまだ付き合いたてで色々したいことがある。洋介と瞳はお互いにそう思いながら見つめ合う。

今日この時危機は去り、洋介と瞳の付き合いがしがらみから解放されたのだった。

## 第二十八章

菜々美が警察に連行されてから一ヶ月後、洋介と瞳は心おきなく交際を続けていた。もう菜々美の脅威に怯える必要はない。二人の交際は順調そのものだった。

二人で協力してきた菜々美対策のおかげから二人の結びつきは非常に強くなっていた。吊り橋効果でもあったのだろうか、それとも幼馴染という関係からか二人の結束は固く、破綻の恐れなど全く感じさせない。

そして更に二人の付き合いを後押しするイベントが待っていることも要因としてあるだろう。高校生活の一大イベントである修学旅行である。恋人達としてはこのイベントを前に別れるなどという愚行は起こすわけもない。恋人のいる者は一生の思い出を、いない者はこれを足掛かりに恋人を作ろうと息巻く。勿論それは洋介と瞳も例外ではなかった。二人はまさに今、洋介の部屋にて自由行動の計画を練っている最中である。

「とりあえず班が一緒だから集団行動の時は問題ないな。後は自由行動か」

「そうね。一回きりのイベントなんだから漏れのないようにしないとね」

そう言う瞳はガイドブックを広げる。二人並んでガイドブックを見ているため、お互いの距離はごく近い。それを二人とも意識してか顔がやや赤い。なんとも初々しい一面である。

「それにしても修学旅行が豪華客船での船旅になるなんて驚いたな」

「まあ、学校からしたらイメージ刷新に努めたいんじゃない？ 小山田さんの件があるし」

「学校の財政は大丈夫なんだろうか……」

「……もしかしたら来年からは相当渋ったものになるかも」

二人は学校の財政を気にしながらもどうせならこの機会を楽しも

うと思った。豪華客船なども乗る機会はないかもしれない。これは菜々美の恐怖に耐えきった二人への褒美なのだと思います。満喫することを二人で決めたのだった。

待ち遠しい修学旅行当日はあつという間にやって来た。洋介と瞳もちろん初めての豪華客船ということで興奮しきりだが、周りの生徒や中には一部の教師も明らかにテンションが上がっている。思わぬ海外旅行という僥倖に誰もが興奮していた。

一同は港に到着し、そこから豪華客船に乗り込む。港まで来る道中もちろん興奮を隠しきれず、皆が皆はしゃいでいたのだが、豪華客船を実際に目の当たりにするとそのスケールの大きさにまたテンションが上がる。その有様はこのまま最後まで力が保つのかと注意したくなるぐらいの騒ぎ様である。

「……俺、こんな日が来るなんて想像もしなかった」

「私も絶対こんなのに縁なんかないって思ってた」

豪華客船を見る洋介と瞳は周りとは違ってその非現実的な光景に圧倒されていた。これは夢じゃないのかと信じられない様子である。だが、点呼をとって諸注意があった後、実際に乗り込むとその非現実が自らの手で触れるようになり実感をもたらす。

「……写真いっぱい撮っておこう」

洋介は使い捨てカメラの他に持ってきたデジカメを見て頼りにしてるぞとポンと叩く。何しろそうそう経験出来ない旅行である。まして船旅。期待は否応なく高まる。それは洋介だけでなく傍らの瞳も同じようではないか。いまだ様子を見せている。

「洋介、洋介！今日の晩御飯バイキング形式だって。何が出るんだろう。楽しみだね」

「こんなに興奮してる瞳も随分久しぶりだな」

洋介はこんな表情見るのいつ以来だろうと目を細める。二人の記憶は中学校などの期間を隔ててのものなので何とも昔に感じる。中学校での修学旅行も二人の思い出など全くない。それだけに洋介は

瞳と親しくなつて初めての旅行ということで瞳の一挙一動をしつかり目に焼き付けようと思った。

「そついえば洋介と修学旅行で一緒に行動するのって初めてだもんね。……あーあ勿体無かつたなあ」

「今回を大事に出来れば俺はそれで満足だよ」

「……そうだね。忘れられない思い出を作ろう？」

「ああ」

二人は過去の分まで楽しく素晴らしい思い出を作ろうと誓い合つた。舞台はまるでそんな二人のためにもたらされたかのような豪華な旅行。まさにこれ以上ないシチュエーションだった。絶対いい旅になる。そんな予感がする修学旅行は今まさに始まつたのだった。

楽しい時間は過ぎるのが早い。豪華客船の中で思い思いに時間を過ごした生徒達はあつという間に迎えた夕食の時間にまたテンションが上がる。バイキング形式で好きな物を思う存分食べることが出来るのも大きな要因である。一体どんな料理が出るのだろうか。生徒達はそんな期待を抱きながら皆、食堂へと向かつていく。その流れの中に洋介と瞳の姿もあった。

「船酔いとかもないし、まさに最高の状態で美食にありつけるな。本当に最高だ」

「あ、あまり食べ過ぎて体調崩すなんてことはやめてよ？ 目的は食べることだけじゃないんだからね」

「わかつてるって」

洋介は苦笑しながらそう返事をする。さすがにそこまで馬鹿ではないと思つてはいるが、本気で念を押す瞳の胸中を思うと了解したと言つてやらないといけない。だが、洋介としては半分ぐらいはそれを破る氣でいる。美食を前にして控え目になど出来るかといった趣である。高級料理を味わうことなど平凡な庶民であるところの洋介には滅多に縁がないのだから無理はない。尤も注意を促している瞳も立派な庶民ではあるのだが。そこは自制心の差であろう。瞳は



本懐を見失うことはない。

食堂に流れていく生徒達は皆足早に移動していく。洋介もそれに負けないよう急ぎたいのだが、連れの瞳の様子がおかしいことに気が付いた。何やら歩き辛そうにしており、速度は徐々に落ちていく。「おい？ どうした？」

「……船のせいか、ちよつとお腹の調子が悪いのよ……」

心配そうに見詰める洋介に瞳は恥ずかしそうにしてそう答える。食べ過ぎて腹を壊すなど言っている当人がこれでは話にならない。思わず洋介は呆れた顔で瞳を見てしまう。

「人にそんなこと言つといてお前がそれかよ……」

「じ、自分がこうなつたから注意したんでしょ！ そこら辺の心情をちゃんと酌んでよね」

「わかつてるつて。……それで大丈夫か？ トイレ行くか？」

「ば、馬鹿っ！ 女の子にそんなこと聞かないでよ！」

洋介のデリカシーのない言葉に瞳は憤る。確かに洋介の心配そうな気持は伝わっているが、そこで素直にトイレに行くなどと言えるわけがない。瞳は難儀な彼氏に呆れつつも、腹痛が辛くなってきたのかヨタヨタと進行方向と逆に歩き始める。

「ご、ごめん、さっきより酷くなってきた……ちよつと私、食事無理だわ」

「大丈夫か？ 付き添うよ」

「……人の話聞いてた？ 洋介付いてきちゃったら私楽になれないんだけど」

「そんなこと気にしてる場合じゃないだろ。途中で倒れたりしたらどうするんだ」

「……は、早く食堂行つて……」

心配そうな洋介を瞳は遠ざけようと必死になる。その切羽詰まった様子はますます洋介を不安にさせる。二人の思惑はすれ違い続いていた。

「お、おい、大丈夫かよ！？ 何か顔真っ青で体も震えてるじゃない

いか」

「も、もう限界なのよ！ 早く行つて！」

「く、苦しいのか！？」

「そ、そうだけど違うの……オ、オナラ出ちゃうから……早くここから離れて。お願いだから……」

これ以上ないほど苦しそうに、そして恥ずかしそうに瞳は洋介に切羽詰まった事情を伝える。こんなことを言わせる前になんて離れてくれなかったのかとその顔は不満そうな感情でも一杯だった。

ようやく瞳の意を察した洋介はこちらは逆に顔を真っ赤に染めて急いでそこから離れる。彼女の痴態を見たいという下衆な思いもあったが、それを実行して瞳に嫌われてしまったら本末転倒である。洋介は理性を総動員して足を動かす。そしてあつという間に洋介の姿は瞳の視界から消えた。

「や、やつと行つてくれた……ううう、早くトイレに行かないと

……」

腹痛に苦しむ瞳はヨタヨタと歩き始める。既に周りには誰もいない。我先にと皆が皆食堂に移動したのだから当然だろう。そしてその状況は瞳にとって好都合だった。

「も、もしオナラしちゃつてもとりあえずは大丈夫よね？」

出来るだけ堪えたいが、無理な時は仕方がない。そんな時に周りに人がいては困る。瞳は歩く先に誰も現れませんようにと祈りながら歩いて行く。

「あと少し……あと少し」

こんな姿を見られてはイメージ失墜もいいところである。早く個室に入ってしまったいたいと思ったその矢先、瞳の前に人影が現れた。

その影を察知した瞳はなんて都合の悪いと思わず舌打ちをしまつ。それもイメージ失墜ではないかと思うところだが、切羽詰まった瞳にはそんなことなど気にする暇はなかった。とにかく今はこの人影をやり過ごすことに集中しないといけない。

「……ふっ！」

瞳はこの場をやり過すため、なけなしの力を振り絞って平静を保つ。そしてすれ違うまでの辛抱と震える体を叱咤する。

だが、目の前の人影は一向に動く気配がない。不審に思った瞳はそれまで腹痛で相手が誰かなど確認も出来なかったが、ここで目線をようやく上げる。そしてその表情はそのまま凍りついた。

「……嘘、なんであなたがここにいるの……？」

「もちろん愛しの洋介を取り返しに来たのよ。……ああ、それと洋介と泥棒猫との間違った関係を壊しにも来たんだっけ」

瞳の視界に移った女子生徒は壊れたように笑う。その姿はあまりにも異常だった。いや、そもそもここに存在していること自体が異常だった。本来であれば警察の保護下に置かれている筈。だが確かに瞳の目の前には強盗未遂に脅迫などの所業を重ねた罪人、小山田菜々美が立っていた。

「ど、どうして……」

「そんなのここにいるってことは逃げてきたに決まってるでしょ？」  
何を当たり前のことを言わんばかりに菜々美は呆れてみせる。そんな余裕そうな菜々美に対して瞳は絶体絶命の窮地に立たされていた。腹痛に苦しみ、満足に身動きも取れない今、襲われたら一溜まりもない。瞳は先手を打とうと大声を張り上げる。

「だ、誰かつ！ここに犯罪者がいるわ、早く助け……うぐうつ！？」

だが、助けを求めた瞳の声は途中で途切れた。代わりに辺りにはビチャビチャと水音が響き始めた。瞳の喉から噴き出す血の雨が辺りに飛び散って凄惨な音楽を奏でる。そしてそこにすぐに大きな衝撃音が轟く。それは力を失い、その場に倒れ込んだ瞳の音だった。

「か、かはっ……」

「もうこれでム力つくその声も聞かなくて済むね。……って、うわっ！汚っ！」

元々腹の調子を壊し、トイレに急いでいた瞳である。力を失った結果、その場に堪え切れなくなった奔流が噴き出す。菜々美はその

惨状に急いでその場から逃げだす。

「最期の最期まで私をム力つかせるなんて……本当にやな女」

憤慨しながら菜々美は堂々と船内を歩き始める。もはや失うものがない菜々美は実に大胆だった。返り血に濡れたその有様を見れば菜々美と気付かなくても誰もがヤバいとわかる格好である。即通報ものの状態である菜々美は目的であるところの洋介を目指して歩みを続ける。

「さーで、洋介は何処かなーと……あれ？」

洋介を探して辺りをキョロキョロと見て廻る菜々美はその視界に気になる物を見つけた。それは万が一の事態に備えた救命ボートであった。普通ならばそこまで目につかない代物。だが、菜々美には不思議とそれが自分にとって非常に大事なものだと感じられた。

「……これで洋介を連れて……」

「おーい！ 瞳い、どこ行っただんだー？」

菜々美が何かに魅入られたようにそう呟いたその時、菜々美にとって目的の人物の声が響いてきた。菜々美はその声に反応して物陰に隠れてしまう。本当ならばすぐさま洋介の前に飛び出して抱きつきたいのにどうしてもと我ながら不思議がる。だが、隠れてしまった以上仕方ない。とりあえず様子を見ようと菜々美は物陰から洋介が来るのを待つ。

「本当にどこ行っただんだ、あいつ？ つーか大丈夫かな？」

洋介は瞳の心配をしながら辺りを見て廻っている。その様子が菜々美をどうしようもなく苛立たせ、そして悲しませる。その心を自分だけで占めたい。そう願う菜々美はじつと洋介を見守る。

（どうしたら私が一番になれるんだろう？ どうしたら……あつ！）

洋介の一番になりたい。瞳の存在など、いや瞳以外でも誰の存在も洋介の中に居座らせたくないと思った菜々美はその方策を一瞬の内に閃いた。それはちょうど洋介が救命ボートの前まで来た時だった。菜々美はその考えに魅入られたかのように行動を開始した。

「……洋介、一緒に行こ？」

「えっ？ ……ぐあつ！？」

菜々美が取った行動は何とも無計画な体当たりだった。だが、それはまるで作られたお話かのように都合よく洋介を壁に突き飛ばし、その衝撃で洋介は気を失ってしまふ。今なら全てが自分の思う通りに動く気がする。そう感じた菜々美は気を失った洋介を救命ボートに押し込み、自らもそれに乗り込む。

「えーと発進の仕方は……こうかな？」

どこをどうやったのか救命ボートはあっさりと夜の海に発進していく。大海原に放り出された二人を置いて豪華客船は何事もなかったかのように遠ざかっていく。まさに絶体絶命の状態である。だが、菜々美は何も慌てたりしない。

「大丈夫。今まで運命は私達の邪魔をしてきたんだもん。その分、今から補ってくれてるんだよ」

菜々美は気を失っている洋介の頭を膝枕しながらそう呟く。どう考えてもこのまま海の藻屑と消える運命しか待ち受けていない。だが、菜々美に絶望の感情など皆無だった。これからは二人だけの世界で生きる。そう決断し、行動を取った以上菜々美に恐れるものなど何もない。むしろ微笑みながら洋介の寝顔を見つめている。

「洋介……これから二人だけの世界が待ってるんだよ……楽しみだね」

洋介にそう囁きかけた菜々美は不意に強い眠気に襲われた。脱走に凶行と過激な行為を行ってきた菜々美はその間は感じていなかったが、極度の緊張に晒されていた。それが緩んだ今、どつと心身に疲れが押し寄せた。菜々美はもう自分の意思で目を開けてられないと徐々に瞳を閉じていく。

「……洋介……目が覚めたら……新しい世界が待ってるよ。そして……そこで末永くよろしくね……」

そこまで言うとき菜々美はとうとう完全に目を閉じた。初めての洋介との添い寝にその表情はこれ以上ないほどの至福に満ちていたのだった。

## 最終話

「……ここはどこなんだ……」

洋介は一人途方に暮れていた。目を覚ますとそこにあつたのは見慣れぬ風景。視界には砂浜と海、そして密林しか見えてこない。洋介には全く現状が理解出来なかった。

そして更に自らの格好も理解が出来なかった。最後の記憶では制服を着ていたはずなのだが、今現在の洋介の格好はパンツ一丁となっていた。

「何故俺はパンツ一丁で見知らぬ所で眠っていたんだ？」

疑問だらけの洋介だが、一つだけわかることがあつた。それはただ生きてはいるらしいということだつた。やや頭が痛むのが何よりの証拠だつた。どうやら瘤が出来ているらしい。

「とにかく調べてみないことには何にも始まらないよなあ……」

洋介はそう思ひはするものの、見知らぬ土地、そしてそこに密林があつたりするのでは危険を感じてなかなか動けない。危険な生き物はいないだろうか、異民族が住んでいたりしないだろうか。そういった数々の不安が洋介をその場に縛り付ける。

「……どう見たって日本じゃないしなあ……」

生い茂る密林からは日本というイメージを連想させない。もしかしたら西南諸島かもしれないが、それも定かではない。とにかく洋介は不確定要素が多すぎてまともな判断がつかない。

「とにかくまずは様子を見るか……」

結論を出した洋介はその場に座り込み、何か異変が起こらないかを見張る。そしてそのついでに手がかりが何か見えないかを調べる作戦だつた。消極的な策ではあつたが、一番安全とは言えた。とにかく待ちに徹する。そして徐々に調べる範囲を広げていこうという見通しだつた。

だが、この作戦には欠陥があつた。それは食糧がなくてはならな

いこと。待ちに徹している以上、自ら食料を得ることが難しい。そのため事前に食料にあてがないといけないのだが、洋介にはそれがなかった。目を覚ましてからまだ十数分だったが、洋介は豪華客船内で夕食をする前に捕まってしまったため、空腹はかなりのものだった。

「ヤバイ……腹が減ったし、そういや喉も乾いた……」

ここがどこなのかはわからないが、気候は温暖だった。それこそ洋介がパンツ一丁で寝ていても風邪を引かない程度には温暖である。そうなる喉も乾きやすい。洋介は自覚するや、飢えと渴きに苦しみ始めた。

「安全を取るか水、食料を取るか……どっちかしないとイケないな……」

究極の選択だった。このまま飢えと渴きに苦しむか、危険を冒しても食料と飲料水を探し求めるか。だが、洋介にはすぐ決心がついた。このままじっとしていてもジリ貧である。その内、散策する力も失われていくだろう。そうなってからでは遅い。洋介は動ける内に危険でも生きるあてをつけておきたかった。

「……行くか」

意を決した洋介はそう呟くと腰を上げる。なけなしの勇気を振り絞って冒険を開始する。洋介にとってかつてないほどの一大決心だった。強い決意を秘めた洋介は今まさに一步を踏み出そうとする。

「……不退転の覚悟だ……俺」

勇気が萎えない内に勢いをつけようとする洋介だったが、現実は一厳しかった。突如密林の方から聞こえてきた声と足音、物音に洋介は敏感に反応し、あつという間に硬直してしまう。

「な、なんか聞こえてきたぞ……今」

音の発生源は徐々に近づいてくる。それをわかっていても洋介は身動きを取れなかった。恐怖に凍りついた体はもはや洋介のものではなくなっていた。逃げると警鐘を鳴らす頭とは裏腹に体の方はその場に留まり続ける。

「こ、こつちに来る……」

もうすぐそこまで物音は近付いてきている。もう終わった。洋介は呆気なく覚悟を決めた。どうせこの先どうなるかわからない運命である。それならば色々翻弄される前に楽に消えたい。そう願った洋介は潔く目を瞑る。

（ああ、儚い生涯だった……）

「あつ、ちゃんとここにいたっ！」

物音はとうとう洋介の目前にまで来た。どうやら話している言葉は日本語であるようだが、既に瞑想の段階に入ってしまったている洋介にはそれに気付く余地はない。ただただ短い生涯に思いを馳せるのみである。

「あれ？ 起きてるよね？ おーい、洋介？」

「おかしい……俺を呼ぶ声が聞こえる……ああ、そうか。死神が俺を呼んでるんだ」

「むっ、死神とは失礼な。こうしてやる、えいっ！」

「あつ、痛っ！ くうううう……死ぬう」

目を瞑って恐怖から逃れようとしている洋介に目の前の人物は拳骨を喰らわす。それはふざけて繰り出した拳骨のため大した痛みではないのだが、恐怖に耐える洋介には突然の痛みは過大に感じられた。その結果大袈裟に頭を押さえて、苦しむという行動をし始める。それには流石に驚いたのか殴った当人も慌てて洋介の心配をしだす。頭を抱えて苦しむ洋介を支えて、膝枕をするような体勢に持っていく。

「だ、大丈夫？ そんなに強くやったつもりはないんだけど……あつ、瘤が出来てるね。ごめんね、もしかしたらそこ触っちゃったかも」

「あ、ああ、瘤に当たった……って日本語？」

ここにきてようやく相手が日本語を喋っているということに気が付いた洋介は恐る恐る目を開ける。するとそこには日本語を話せる人物どころかよく見知っている人物がいた。彼を悩ませ続けた元彼



女、小山田菜々美だった。

「な、菜々美！？ どうしてここに……」

「洋介に会いたかったから逃げてきちゃった。……ううう、本当に会いたかったよう」

そう言うとき菜々美は感極まったのか涙を流しながら膝枕している洋介の頭を抱え込んだ。

「むぐう！？ むううううううう」

「本当に会いたくて会いたくて……」

自らも自信を持っているところであるバストに包まれてしまった洋介は苦しくなる呼吸にジタバタ悶える。だが、菜々美の抱え込む力は強く、全く引き剥がせそうにない。

「あれ？ どうしたの洋介？ そんなに暴れて」

洋介の異変を察した菜々美はそこでようやく洋介の頭部を解放する。洋介は苦痛半分、幸福半分といった状態で呼吸を必死に整えている。苦しかったのも事実だが、悩ましいバストに包まれた至福もあったので、あまり強く不満を言えない。結果としてただ呼吸を整えることしか出来なかった。

「はあはあ……死ぬかと思った」

必死に酸素を求めながらも洋介は菜々美がいたことで助かったと心底思った。これで菜々美から現状に対する情報を得ることが出来る。そうすれば生き延びることも出来る。洋介はこの僥倖に深いことは考えずにただありがとと感謝をしていた。

「はあはあ……なあ、菜々美。ここってどこか……わかるか？」

洋介は荒い呼吸を整えながら菜々美に聞きたいことを尋ね始める。少なくとも密林から出てきたのだから自分よりもここについては詳しくわかっているだろう。そう判断した洋介の質問だったが、その返答はいきなり洋介の顔を曇らせるものだった。

「ここ？ さあ？」

「えっ？ さあってお前……」

「だって私もどうやってここに着いたのか知らないんだもん。気が

付いたらここに流れ着いてたっただけで」

「……そういや俺らってなんでこんなところにいるの？」

洋介はまずそこが疑問だったと質問を変える。船上でいきなり襲撃され、気を失っていた洋介は一部始終を知らない。目が覚めたらいきなりどこその土地にいたという話である。まさしく彼は何もわからない状態なのである。

そんな洋介に対して菜々美は顔を曇らせるでもなく明朗に事情を説明していく。

「救命ボートに乗って海に出たら、凄い眠くなっちゃって。それで目が覚めたらここにいたんだけど……」

「救命ボートって……俺そんなのに乗った覚えないぞ？」

「うん、だって気を失ってる洋介を私が乗せたんだし」

「気を失ってた？ ……そういや俺って瞳を探してたら何かにぶつかられたところから記憶がないな……」

「それ私。ぶつかったの私だよ」

素直に犯人だと白状する菜々美。それに対して洋介も半ばわかってたけどねといった様子で頷く。そうなると洋介にはここに至った経緯が全て判明した。だが、判明したからといって何かが解決したわけでもない。結局現状は何も変わらない。だが、洋介はその経緯を知ると思わず身震いをしてしまう。

「……よく今生きてるな、俺……」

「やっぱり私達は何か持ってるんだよ」

「うるせえっ！ 何か持ってるんだったらこんなことで使いたくなんてなかったわ！」

菜々美の緩い言葉に洋介は思わず声が大きくなる。洋介としては無理矢理こんな所に連れてこられた格好なのですこぶる不機嫌だった。何てことをしてくれたんだという怒りが沸々と湧き上がってきていた。

「どうするんだよ！ このままここで暮せてか？ 冗談じゃない」「いいじゃん。私と洋介二人だけの世界。幸せでしょ？」

「喧しい！俺は不幸だ！」

もういよいよ沸騰してしまった洋介は止まらない。菜々美の勝手な行動に対する不満をぶつけずにいられなくなってしまった。冷静さを欠いた洋介はその言葉に不安を感じることが出来なくなっていた。

「本当に余計なことばっかしやがって。人の家に勝手に入るし、脅迫はするし……。挙句の果てにこれかよ。本当に何してくれてんだよ」

「だ、だって洋介のこと大好きだから……」

「大好きなら俺を喜ばす行動を取ってくれよ！お前がやってると全部逆じゃないか！」

「そ、そんなつもりは……」

「そんなつもりはなくても実際そうなってるんだよ」

「……」

「もしここから無事に救出されたら絶対俺、お前のこと訴えてやるからな。危うく大海原で水死するところだったじゃねえか」

「……」

「それに今だってここが安全だって決まったわけじゃないしな。何があるか……って菜々美？」

「……」

それまで勢いそのまま菜々美を罵り続けていた洋介は突如黙り込んだ菜々美に不審がった。そして黙ったまま着ている服のポケットに手をつ込んだところでもう洋介には嫌な予感がしていた。

「ちよ、ちよつと言い過ぎた。ごめん、本当にごめん！」

「ねえ、洋介？」

「は、はい！」

先程までの勢いはどこにやら。洋介は菜々美の声に背筋を伸ばして反応する。膝枕から解放された直後であるためその距離は密着状態。逃げ場はどこにもない。洋介は迂闊だったと今更ながら自分の言動に後悔した。

「これ、何かわかる？」

「ひいつ！？」

菜々美がポケットからナイフを取り出すと洋介は惨めにも悲鳴を上げて、その場に凍りつく。すっかり腰が抜けてしまったようで身動きもままならない。

しかし、それも無理はなかった。そのナイフは明らかに血液が付着しており、誰かを斬り付けた痕跡が残っていたからだ。それはつまり菜々美はその気になれば人を斬り付けることにも躊躇がないということを示している。そしてもちろんそれは洋介も例外ではないだろう。洋介はかつてない恐怖に襲われていた。

「ねえ、洋介？ 私、洋介が寝ている間にこの島を見て廻ってたの」「そ、そうか……」

「それでね、この島が物凄い狭い島だってことがわかったの。それこそあつという間に一周できるぐらい」

「……」

「そしてこれが一番重要なんだけど……」

「そ、それは？」

「この島、私達以外誰も住んでないの」  
その言葉を聞くともう洋介には希望が何もなくなくなった。菜々美と正真正銘二人きり。退路は狭い孤島であるため全くない。まさに袋の鼠だった。

「それで洋介……私としてはね、ここのアダムとイブになろうとと提案したいんだけど……」

「だ、誰が？」

洋介がそう問抜けな問いを返すと菜々美は鋭い目つきでナイフを光らせる。それだけで洋介はもう黙ることしか出来ない。力関係は歴然としていた。

「そんなこと言わなくてもわかるよね？」

「は、はい！ わかります、わかります！」

「それで洋介は……受け入れてくれるかな？」

菜々美はにつこりと魅力的な笑顔を浮かべながらナイフを洋介に突き付ける。言葉上では選択肢を用意されているが、実際には選択の余地などない。ただただ洋介は首を縦に振るしか出来なかった。「うん、嬉しいよ。これで私達一つになれたね。……それじゃ、結ばれた二人の最初の共同作業をしようか？」

「き、共同作業って？」

「この島は私達の島なんだから私達の手で繁栄させないといけないよね？」

「あ、ああ。そういうことになるかな？」

「だったら……もうわかるよね？」

そう言つと菜々美は徐に服を脱ぎ始める。それで菜々美の意を察した洋介はガタガタと震え、恐怖を露わにする。もし菜々美似の子が生まれでもしたらと思うと気が気ではない。狂気に満ちた島が出来上がりそうに恐ろしかった。

「さ、二人の愛の結晶を作ろう？」

腕を掴まれ、引き寄せられた洋介は菜々美によって強引に唇を奪われる。その光景はもはや捕食に近かった。その瞬間、洋介はもう全てを諦めた。瞳からは生気が消え、人形のように菜々美のなすがままに扱われる。もはや洋介は菜々美の所有物に成り下がった。

孤島という檻の中に入れられた洋介は彼の過去、未来、人間関係そして彼自身の人格さえも悉く破壊された。ただこれから先待ち受けるのは菜々美によって作られる世界。そこは決して洋介が望む世界ではない。菜々美の数々の常軌を逸した行動によって洋介にはもう菜々美に対する愛など湧き上がりもしない。

（せめて菜々美を愛することが出来るならな……）

そうすれば楽になれただろうにと思いながら洋介は意識を徐々に手放す。それはもう二度と彼が彼らしい行動を取ることがないという合図だった。

狭くなつていく視界には熱心に洋介の身体にキスマークを付けている菜々美が映っている。洋介はそんな菜々美を哀れそうに見なが

ら、ゆっくりと目を閉じたのだった。

## 最終話（後書き）

というわけでえらい長く時間がかかりましたが、これで「DEST ROY」は終了です。

読んでみると第二十八話で止めた方がよかったかもしれないと思いました。一応プロットでは最後は無人島で洋介が飼われるという考えだったのでそこまで書きました。そのため最終話は余分という感じがしないでもないです。

私の作品の中で最も長いお話ということで色々至らない点はあったと思いますが、ここまで読んでくださって本当にありがとうございます。ありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9853d/>

---

DESTROY

2010年10月8日11時44分発行